
召喚されちゃった少女

ポイ宇宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚されちまった少女

【Nコード】

N5072L

【作者名】

ポイ宇宙

【あらすじ】

唯我独尊、天真爛漫、一騎当千のお笑い好きの女子高生サナエ。ある奇跡的な出来事で、強制的にファンタジーの世界に来てしまった。

元の世界に帰る方法を、マルと共に道中で出会う人々と毎回起こるトラブルに巻き込まれたり、巻き込んだりと、どアウエイの異世界での生活を満喫して行く。

果たして無事帰ることができるのか・・・

私が召喚されるまで（１）（前書き）

初めて、長編物に挑戦します。書きあがるのがいつになるか分りませんが、なんとか書き上げたいと思います。読まれたら感想、またレビューお願いします。

私が召喚されるまで（１）

太陽が西に向かいそろそろゴールしそうな時間。普通に言えば夕方。一面が朱色に彩られている。その絵画のような情景を背景に、人々が生活している。生を営んでいる人々の中に今回のお話の主軸となる少女サナエがいた。肩までの長さに切られた茶色の髪を揺らし、不機嫌な表情をしている。

「ほんま、疲れた。なんでテスト前なのに、がつつりクラブあんな。しかも、いつもよりキツイメニューやったし」

サナエは、ぶつくさ言いながら黒帯で縛られた道着を、虫笛を使いオウムと交信をとるナウシカのように振り回していた。

「はあ、今７時か。家帰ってご飯食べて、うんで、抱腹絶倒笑いのファンタジア見て、お風呂入ってから勉強やな」

腕に巻かれた時計で、時間を確認し、今夜見るお笑い番組を思い描いていた。

家に向かっていているサナエの進行方向に漫画では定番、私生活ではまずお目にかかれない、バナナの皮が怪しげなオーラを発し、道に置かれている。お笑い大好きなサナエなら気づくと同時に迷わず踏みしめこけるだろう。しかし、今のサナエは、現在、目を付けている若手芸人フロップीडィスクの漫才を脳内再生している最中。どうなるバナナ。

バナナの横にあるマンション。築２５年、月８万の物件。その５階に住んでいる秋山ゆい（３１・人妻）がベランダにいた。不思議なことに彼女は、これまたお笑いでは定番のタライを持っていた。ある一定の高さから頭上に落下させると、心地よい笑いを誘う音を鳴らすリアクションには必須のアイテムである。

「ふー、水道代の節約になるけど、やっぱり洗濯機の方が楽ね。ケチらないで洗濯機にしろ」

洗濯に使ったタライをベランダに干そうとしている最中だった。バナナ、タライ、奇跡としか言いようのないタッグが今組まれた。果たしてこのタッグはどのような化学反応を起こしていくれるのか。

1円玉くらいの大きさのハエがいた。ハエ業界の中では勇敢なハエで通っている。ハエが恐れる人間をからかうことに長けており、今まで何人もの人間をイライラさせてきた強者である。得意技は人間の鼻の前で飛び回ることである。Casual and ideal action通称CIAと呼ばれている。どこかの組織の名前のようなが、この技は大変難易度と死亡率が高く、長い間使ったのが現れなかった技なのだ。そんな技を持ったハエが偶然目に入った秋山ゆい(31・人妻)に目を付けた。

「ようし、あの女をやるか。今日も俺のウイングはいい動きだ」スピードを上げハエは秋山ゆい(31・人妻)に向かっていった。

タライを干すにはどのようにするのか試行錯誤している秋山ゆい(31・人妻)はハエの悪巧みに気付くわけがない。それを良いことにハエは秋山ゆい(31・人妻)の眼前に来ていた。

「よし、女は気づいていないのか楽に接近できたな。さて、それでは見せてやろう。誰もが尊敬の眼差しで見るCIAを」

ハエは通常時の3倍の速度で羽を動かし秋山ゆい(31・人妻)の鼻の前で飛び始めた。

「あら。ハエ・・・・・・へっ、ふえくしょんばろう」

秋山ゆい(31・人妻)は、盛大にくしゃみをした。それはもう、本当に大きなくしゃみで、ハエが風圧により飛ばされそうになっているほどだった。CIAにより見事にくしゃみをさせることに成功したハエは、飛散してくる鼻水、よだれを持ち前の飛行技術により見事に避けていた。

「これだから、やめれねえなあ」

そう言っただけハエは、満足して、この話を仲間内に広めるために飛

んで行った。

くしゃみをしてスッキリした秋山ゆい（31・人妻）はあることに気付いた。

「あら、・・・タライ」

階下で大きな音が鳴った。

サナエの頭の中で再生されているフロツピーディスクの漫才はいよいよオチようとしていた。ボケの斎藤が一部地域で大爆笑をかつさらう玄人向けの一発ギャグ、ツツコミを頭に受けた際に使う『頭ボツコボコ、こっことはどっこ、わったしはどっこ？』をして、それにツツコミの田中がつっこんで終わるといったものだ。さあ、いよいよだ。サナエはそう思っていたが、オチが再生されることはなかった。つい先ほど10メートル上から投下されたタライがそれを阻止した。タライはサナエの頭にクリティカルヒットし、辺りに自分のできる限り鳴らせる快音を響かせた。音に驚き、電線に留まりさえずっていた雀たちが一斉に飛び出した。

「うんなあ・・・タライ？」

変な声を出したサナエは、余りの衝撃で足取りがおぼつかなくなっていた。快音で耳はキーン、タライの攻撃で目がチカチカ、まとも立っていることが難しく、2次会終わりの酔っ払いと同じ千鳥足になっている。そして、その脚はまるで意識を持っているかのよう。サナエの言う事を聞かず勝手に歩を進める。向かう先はバナナ。先ほどからずっと出番を待っているバナナを言う事のきかない右足が踏みぬいた。よしきたと言わんばかりにバナナは渾身の力を込めて摩擦と喧嘩別れをし、舗装されたアスファルトの地面を滑った。

「うわっ、なぜバナナ」

サナエの右足は大きく弧を描き、かかと落としのようにサナエの眼前まで上がった。その反動により左足は中に浮き、サナエの体も宙に浮いた。そして、サナエはこけた。

「うっ、いったあ。頭打ったあ。なんか色々あつてこけたよな、私。えっと、確か、フロップीडィスクの漫才を脳内再生してて、うんで、いよいよオチって時になんかが頭に降ってきてんなあ。なんやっただけ……ああそうや、タライや。ほんで、フラフラなつて、バナナ踏んでこけたんや」

打った頭をさすりながらサナエは自分の身に何が起きたのかを確認した。血が出ているかと心配したが、どうやら小さなこぶができただけのようだった。自分の無事を確認し、サナエの頬はゆるんだ。「あっははははは。タライにバナナって嘘やろんだだけベタやねん。つつか、奇跡やろ。なに、偶然タライが降ってきて、ほんで、偶然バナナがあつてそれを偶然私が踏んで見事にこける。完璧や。笑いの神が降りてきたな。くっそ、ギャラリーがいないんが残念や。しゃあない、今日は勉強そっちのけでこのことを一番面白くできる話し方を考えるしかないな。ふふふふ。明日が楽しみやな。この話をすれば、周りにはドツカンドツカン大笑い、そして、それに目を付けた大物プロデューサーが私をスカウト。そして、私は最強に面白い美少女女子高生として、売り出されて、ゆくゆくは星川聖徒（今人気絶頂のアイドル）と結婚。うふふふふ。さあ、こうしていいられない、さっさと家に帰ろ」

長い妄言を一通り言い放ったサナエは辺りを窺がった。サナエが座っているのは先ほどまでの文明が発達した住宅街ではなく、木々が生い茂り、名前のわからない虫たちが合唱している暗い森だった。「頭ボッコボコ、こっことはどっこ、わったしはどっこ?」

沈黙があたりに広がった。どうやら、この周辺にはお笑い玄人はいなかったようだ。

私が召喚されるまで（１）（後書き）

記念すべき第１話です。とりあえず、よくしゃべるキャラを描きたかったのでサナエと言うキャラを作りました。しかし、大阪府民にも関わらず、大阪弁を文字に書き起こすのが難しいです。今後、サナエのセリフに四苦八苦していきそうです。

山賊現る。変態現る。サナエ困る。(2)(前書き)

間が空いて2話目です。おそらく、こんなペースになると思いま
す。続きを待たれている変わり者の方、長い目で見てくださいね。

山賊現る。変態現る。サナエ困る。(2)

サナエは戸惑っていた。さっきまで自分がいたのはコンクリートで作られた家や、まっすぐに天へと向かう電柱で構成された人工的な場所だった。しかし、今いる場所はどうか、人工的なものは一切無い。あるのは自然と呼ばれるものだけだ。暗く視覚も利かない、その分聴覚が鋭くなる。風により葉がすれる音、セックスアピールしている虫の鳴き声、その一つ一つがサナエを不安にさせた。

「なななな、なんで、さっきまで帰り道におったやん。それやのになんやここ、森？ いったいどうなってんねん。なんや、ワープしたんか。いやいや漫画か。ここは、現実21世紀やでそんな有るわけないやろ。そりゃ、1回くらい別世界に行きたいなって思ったことあったけど。そうや、これはきつと夢なんや、よし、それじゃあ、空を飛べ」

サナエは両腕を翼のようにピンと伸ばし、いつでも浮遊してもいい準備をした。しかし、残念ながらこれは夢ではない現実である。当然、飛ぶことはない。腕を上下に振り羽ばたくが結果は同じ、ただその場で微風を起こすだけだった。

「うーん。夢を操るんは難しいのか、なら、ベタやけど・・・いてててて」

サナエは自分の頬を思い切り抓った。もちろん通常通り頬の痛覚が脳に痛みを伝える。

「・・・夢や無いんか。これは現実なんか。どうしよ」

現実を受け入れたサナエは自分の今の境遇を確認し途方に暮れた。

サナエの10メートル後方。いかにも悪者といった顔をした男が3人いた。3人は同じ顔で同じように髭を蓄えていた。違うところと言えば、一人は髭を1つに縛っているのだが、もう一人は2つに縛りもう一人は4つに縛っているとこだ。これでしか判別するこ

とができないほど似ている。

「おいおい、女がいるぞ」

1つ縛りが言った。外見通りの低い声である。

「本当だ。さすが兄さん。女に対する反応が早い」

2つ縛りが感心した。こちらも先ほどと同じように落ち着いているが低い声である。

「しかし、あの女、変った服装しているね」

4つ縛りが続けて言った。裏声で話しているかのような高い声である。

「こりゃあ、あの服と女で二度儲けることができるな、さあいくぞ」

「「おう」」

3人は帯刀していた剣を抜きサナエに向かって行った。その眼は悪意を含んでいるように見える。

「何や」

長く育った草をかき分け自分に悪意を持ち向かってくる山賊3人組の気配を感じ、サナエは振り向いた。

「いよう。お嬢さん」

視界に入ったのは、髪の毛ボサボサ髭ボーボーの不潔度1000のいかにも一週間風呂入っていませんの男が3人立っていた。

「いやあああああああ」

サナエは大きく悲鳴を上げた。その悲鳴により、安眠をしていた鳥たちが一斉に騒ぎ出した。

サナエの居る森の中、少しサナエから離れた所。

「ううん悲鳴？これはうら若き女性の声。助けを求めている悲鳴だ。行かなければ」

イリアリアに住むマルグロリア・ドミニコフの耳にサナエの悲鳴が届いた。心に秘める正義感のエンジンがかかり、マルグロリアの足を悲鳴の方へと走らせた。

「待っている。絶対に俺が助けてやる。そして・・・わあ、格好い

いお方、どうもありがとう。何かお礼がしたいのですが、私は何も持っていません。よろしかったら私をいただいてもらえませんか・
・ってことになるに決まっている。行くしかない、さあ、我が愛剣
サンタフェ、将来のお嫁様を助けにいくぞ」

サンタフェは今助けを求める少女を助けるため光を放った。サン
タフェを振り、マルグロリアは自分の進行を邪魔する者を全て切り
払って行った。

「なななな。さつ山賊」

戸惑うサナエに、3人はV字フォーメーションを組み、自己紹介
を始めた。

「俺たちは、1つにまとめられた髭がかっこいいアルト」

「2つにまとめられた髭がクール、イルト」

「4つにまとめられた髭が素晴らしいイルト」

「「俺たち3人合わせて、この森を仕切る鬼斧山賊団戦闘員ア行
3兄弟」」

3人の背後で爆発とシュピーンと言う音が発生した。

「・・・」

「ふふふ。恐怖でグウの音も出ないようだな」

アルトが満足そうに笑った。確かに今日の登場文句はいつもより
キレがあり、自分の中でも高評価であったとあるとは考えていた。

「・・・だっさ」

「うん、なんだっってお嬢さん」

キヤー格好いい、やめて、襲わないで助けて等の、歓声、悲鳴を
期待していたアルトの耳には予想外の返事が返ってきた。

「ださいって言うてん。なんやねんそれ、爆発と効果音は自分らで
用意したん。格好悪すぎ、つつかさ、なんでアルト、イルトで最後
がエルトやねん。そこはウルトやろ。どうしたんウルトはウルトは
どうなってん？」

「つつ・・・ウルトは死んだ」

「あ・・・ごめん。気使わんで。なんで、なんで死んだん？」

アルトが神妙な面持ちで語り始めた。

「あいつは、風船キノコで死んだ」

「風船キノコ？」

「知らんのか、風船キノコとは食べた物を風船のように10秒間膨らます毒キノコだ。ほらこれのことだ」

地面にあった風船キノコを抜きアルトはサナエに投げた。キノコはいかにも毒キノコのハデな柄をしている。そして、傘にはひらがなでふうせんと書いていた。

「風船化してしまったものは浮遊を始めどんどん空へ上がっていく、そして10秒たつと空気が抜け墜落死だ。ウルトは空腹のあまり風船キノコを食べてそして・・・」

「ごめん。なんつうか、アホらし」

「ななな、なんだとこのアマ、許さねえ覚悟しろ、ある程度傷めつけていい、行くぞてめえら」

「「おおおおおお」」

亡き兄弟をバカにされ、3人は激昂し剣を振り上げサナエに襲いかかった。

「ちよつちよちよ、ちよつ待つてえ」

「はあはあはあ確かこの辺のはず」

マルグロリアは息を切らし暗い森の中で目を凝らし、自分の助けを求めるお嫁様を探した。

「全然見つからん。このままでは俺の髪は長い黒髪で清楚な感じのお嫁様が悪漢にやられてしまう。それだけは断じて阻止せねば。頼む俺の、第六感よ働け」

集中し辺りの気配を探る。

「きゃあああああ」

聞こえた。悲鳴がマルグロリアの耳に届いた。

「近い、向こうだ」

マルグロリアは神経を尖らしいつでも戦えるような状態になり、森の中を疾走した。

「いよおしここだな。おい、その悪者ども何をしている。そのか弱き女性から手を離し、大人しくこの場から去れ。さもないとこの名剣サントフェにより血を流すことになるぞ……決まった。さあ、これできつと未来のお嫁様は俺にメロメロだ」

マルグロリアが着くほんのちょっと前。サナエとアルトが対峙していた。他に2人居たのだが、すでにイルト、エルトは白目を向き夢の世界へと旅立っていた。

「この女、よくもやりやがったな」

2人がやられアルトは腰が引けていた。しかし、こんな女1人に逃げるわけにいかない、長年山賊稼業を続けているプライドが後退を許さなかった。

「そんなこと言われても、自分らが襲ってくるからやんか」

「うるせえ。このアマ絶対に許さねえ、くらえ」

アルトは恐怖のせいか手と足の動きが合致していない。当然まともな攻撃ができるはずない。その攻撃をサナエは軽々かわし、左足を軸に回転し体重を右足に乗せ、アルトの側頭部に叩き込んだ。

「うぬああ」

アルトは吹き飛び木に激突した。

「くそおお」

打たれた頭を振りアルトは何とか立ち上がった。

「嘘、立ち上がる？結構ええの入ったのに、頑丈やな」

「強い。どうする、どうすればこの女を倒せる」

その時だった。突然、沈黙を引き裂く大声が響いた。

「いよおしここだな。おい、その悪者ども何をしている。そのか弱き女性から手を離し、大人しくこの場から去れ。さもないとこの名剣サントフェにより血を流すことになるぞ……決まった。さあ、これできつと未来のお嫁様は俺にメロメロだ」

頭に木の葉を乗せ、剣を胸の前に横一文字に構えた格好をつけた男マルグロリアが出現した。

「さあ、悪者どもかかってこいって・・・あれ」

マルグロリアの目に映るのは、いかにも山賊の男3人を、変わった服装をしている10代後半の少女が1人で倒しているところだった。

「・・・えーと、そうか。お前が悪者か」

マルグロリアは一瞬考え、剣を構えサナエの方に向いた。

「さあ、覚悟しろ。悪党、俺のサンタフェの力を見せてやる。さあ、お前たち今のうちに逃げるんだ」

アルトはその言葉を聞き逃げる決心をした。今はマルグロリアがサナエの敵になっているのだが、このままではいずれ自分たちがマルグロリアの標的になるのが目に見えていたからだ。

「この野郎。そこで待って居やがれ仲間を連れてきて復讐してやる」
アルトが負け犬の捨て台詞を吐き、のびている二人を連れてスタコラ森の奥へ逃げに行った。

「ふふふ。これで貴様と一対一だな。さあ、行くぞ」

剣を中段に構え隙が見当たらない。隙の無さがマルグロリアの強さを表している。

「なんでやねん」

隙があるうがなかるうが関係なくサナエは一瞬で間合いを詰め強烈なツツコミを裏拳で胸にくらわした。

「よう考えるや、なんで、こんなか弱くて、かわいいこの私が悪者やねん。あんな剣もつた髭面の3人を素手で襲うかあ！襲うんやつたらもつと準備してから襲うちゅうねん！ええか、私はいきなり襲われたから抵抗しただけや。ほんま、この容姿を見て分らんかな、この可憐さを」

「いつ一体どこが可憐で、か弱いんだよ・・・」

マルグロリアは強烈なツツコミによるダメージで気を失った。

「あつ、やってしもた」

山賊現る。変態現る。サナエ困る。(2)(後書き)

とりあえず、このシリーズはプロローグみたいなものです。

もう1人の主人公であるマルグロリアがこの話から参入します。

流石にサナエ1人だけだと話が続かないということで、基本的には真面目のマルグロリアを入れ、なんとか話を進めていこうと思っています。

ファイトオアエスケープ？イエスッ！エスケープ（3）（前書き）

ちょこちょこと修正加えていってます。とりあえず、サブタイトル考えるのがしんどいです。

ファイトオアエスケープ？イエスッ！エスケープ（3）

「ああ、だめだよ。こんな公衆の面前でそんなこと大声で言えないよ。分かったよ、言うよだから怒らないでくれよ。いくよハニー、愛しているよ。世界中の誰よりも……ぬはあ！あれ、愛しのハニーはどこに、まっまさか……ゆっ夢？」

激烈な攻撃によりお気楽な夢から目を覚ました。

「くそ、夢だったか、非常に残念だ。もう少しで結婚だったのに」「なんちゅう夢見てんねん」

「うん」

マルグロリアが顔を上げるとそこには、マルグロリアの理想とはかけ離れた、ショートカットで茶髪のサナエが立っていた。

「あつ、お前は悪党」

「ちやうわ」

軽くマルグロリアの頭をはたいた。

「それじゃあ、あれか悲鳴を上げたのはお前なのか」

「そうやけど」

「そんなバカな。貴様のような猿みたいな女があんな守ってあげたくなるような悲鳴を上げるわけないだろう」

「誰が猿や。私はこう見えても学校では麗しの美少女って言われたらええと思ってるねんで」

「思ってるだけかよ」

「うるさいなあ。つつかここどこやねん。いきなり森の中やし、急に山賊見たいなん襲ってくるし。なんなんドッキリか、カメラどこや。はよドッキリのプレート持って来い」

「何を言っているんだお前は、ここはイリアリアの近くの森ではないか。山賊が出るから立ち入り禁止のエリアだぞ。有名だろ」

「イリアリア？何それどこの国、アメリカ？」

「アメリカ？貴様、俺を馬鹿にしているのか」

「・・・どういうことや。アカン意味わからん。いったいどうなつてんねん」

理解できない物事が重なりサナエの脳はすでに稼働限界を迎えていた。ショートボブの髪の毛を両手で今にもむしり取りそうなほど掴んでいる。

「むっ、お前その手の甲の紋章は」

「紋章？」

サナエが右手の甲を見ると2頭の竜が首を噛み合っている絵が描かれている。

「なんやこれ、あかんとれへん。生んでくれたオトンとオカンごめんなさい、サナエはあなたたちがくださった体は傷物になってしまいました」

手の甲を擦ってみたが取れる様子は無かった。

「その紋章は召喚された者の証だ。誰かが貴様を召還したようだな。なるほど貴様はどこか別の世界の住人のようだな。」

「召喚。えっじゃあ、私は異世界に来たってこと。まさかそんな漫画みたいなこと」

「貴様の手の甲の紋章が何よりの証拠だ。誰が何のために召還したのか分かんが、1つ言えることは、貴様は異世界のからこの世界に召還されたということだ」

「・・・なんてこった。ほな、私はどうしたらええんやろ。てか帰れるん？」

「うむ、帰ることはできる。ただし召喚した人間にしかできんだ。普通は召喚者の近くに召還されるものなのだが、どうやら事故かなにかでまったく違う場所に出てしまったようだな。これは召喚者を探すのは骨が折れそうだな」

「ほな早く召喚者を」

居ても立ってもいられなくなったサナエはすぐにでも駆け出しそうになっていた。

「まあ、待て。イリアリアの役所に行くのが一番手っ取り早いだろ

う。召喚物に付けられる紋章は召喚者1人1人で違うのだ。そして召喚者は召喚を行うには国に許可を取る必要がある、そうしなければ魔物や人間を召喚して国を混乱させるやつが現れるからな。貴様のようなはぐれ召喚物のことも役所が何とかしてくれる」

「なら、早く行かな。イリアリアってどっち？」

「連れて行ってやるついてこい」

第一印象最悪の男が妙に優しくなり少しだけマルグロリアを見直したサナエ。

「ありがとう。私、サナエって言うねん」

「うむ、俺はマルグロリア・ドミニコフ、気軽に絶世の美男子マルグロリア様と呼んでくれ」

「・・・」

見直した自分が恥ずかしく思ったサナエだった。

「むっとうしたほら呼んでみる、絶世の美男子マルグロリア様と」

「うるさい、誰が呼ぶか。お前なんかマルで十分や」

「なっ貴様マルはないだろせめて、マルグロリアと呼べ」

マルは初めて呼ばれたあだ名に対して嫌悪感を示した。

「作者も面倒臭くなってマルってなってるやる。もう少ししたら読者もマルグロリアってこと忘れるわ」

「そんな一応俺は主人公の1人だぞ、こんな扱いはあんまりだ」

話が妙にはずんでいる2人を物陰から見つめる者たちが20人。

その中の3人は先ほどの山賊アルト、イルト、そして、ウルトの遺影を何故か持っているイルト。

「おい、イルト何故遺影を持っているんだ」

イルトの行動に疑問を持ったアルトが質問した。

「ウルト兄ちゃんを馬鹿にした奴の末路を覚えてもらおうと思ってね」

「相変わらず陰気なやつだな」

「それほどでもないよ」

「おい、てめらそんな馬鹿な話してんじゃねえ。なんだありや女じ

やねえか」

顔中傷だらけ、服の下も傷だらけの男が2人の話を静止した。

「すみません団長。ありや女ですがとんでもねえ強さです。なんせ俺たちが束になっても全く敵わなかったんですから、特に蹴りがすごいなんの」

「はん、お前たちなんか子どもでも倒せらあ」

団長の横で草を咥え格好をつけていた長髪の男が口を挟んだ。長髪の男は他の者とは違い鎖鎌を備えていた。

「うるせえ、レイトル」

3兄弟とレイトルは幼馴染である。常に仲が悪くいつも喧嘩をしている。結果はレイトルの圧勝で、3兄弟が最後に勝ったのは10歳のころだった。しかも内容は姑息な罠を使い勝ったというなんとも情けないものである。

ちなみに他の15人は特にこれと言った特徴もないので簡単に説明させてもらおう、全員団員である、よくある山賊顔でいかにも悪党といった容姿をしている、エキストラである。はつきり言ってセリフもないのでいるという事だけ頭に入れてもらったらいい。

「団長、あの男ラムダ警護団の人間じゃねえか」

ラムダ警護団の制服を着ているマルをレイトルが確認した。

ラムダ警護団は、イリアリアまたその近辺を警護する団体だ。また、イリアリア以外の地域にも支部をいくつも構えており民間が運営する警護団体では最大級である。ラムダ警護団が本気を出せば、世界の4分の1を支配できると言われている。ちなみにラムダとは創始者の名前である。

「ああ、だが、あのガキのランクは下っ端だ。なんも勲章が付いてねえ、俺達の敵じゃねえ。さて、それじゃあ、てめえら殺すなよ2人とも商品だからな、行くぞ」

「うおおおす」

むさ苦しい男19人が体育会ばりの良い返事をした。そして、各々物騒な物を持ち漫才をしている2人に向かっていった。

「とにかく、早く連れてって」

「むっ、人のことを散々貶しているくせにずうずうしい奴だな。しかし、これも仕事だ、来いさっさと行くぞ」

「わーい」

座っていた2人は腰を上げお尻を払った。

「残念だが、イリアリアには行けねえよ」

団長が1人で湾曲した剣を構えて立っている。こんな人間道端で出会ったら、有無を言わず逃げるのが一番の手段である。

「山賊か」

不意の登場にマルが戸惑った。しかし、相手が1人だと分かると急に強気になる。

「なるほど、さっきの奴の仇打ちと言ったところか、俺がいる限りあの女に手は出せん。やりたければ俺を倒せ」

「そうかい、ならまずお前さんをやっちまうとするか、おい」

団長が声をかけると潜んでいた山賊たちが出てきた。それは、もう、男くさい集団であった。

「へっへっへっ、これで女お前も終わりだな。借りを返させてもらうぜ」

その集団の中でアルトの声だけ聞こえた。

先ほどまで剣の柄を握っていたマルは剣から手を離し山賊を数えていた。

「123・・・20、20人か。よし、お前らこの女を好きにしろ」

「っておい」

「無茶を言っな、さすがの俺でも20人は無理だぞ。それに見ろ、あの男を鎌だぞ鎌。それにあの目つき危なすぎるだろ、絶対に強いぞ・・・と言っわけだ。俺はお前と会わなかった。それじゃあ、達者で暮らせよ」

確かにレイトルの眼は座っている。確実に職務質問の対象になる

ほどだ。

「逃がすかあ」

そそくさと逃げようとするマルをサナエが全力で制止した。

「やめろ、襟を引っ張るな、伸びるだろ。ダルンダルンになった服を着てるのはかなり恥ずかしんだぞ」

「うるさい、もしこのまま逃げようとしたら襟の一部を千切ってブイネックみたいにするぞ」

「なっ貴様それはだめだ。俺はブイネック着ない主義だ」

「どんな主義やねん。なら嫌なら逃げんな」

空気を切る音を発しレイトルが投げた鎌が、しょうもない言いあいをしている2人の足元の草を刈った。

「ぎゃあぎゃあうるせえんだよ。おい警護団の男お前も俺達の獲物だ、奴隷として一生扱ってやるよ」

今にも2人に襲いかかりそうなレイトルを抑え団長が一步前に出た。唯一この凶暴なレイトル抑えることのできるのは団長だ。それほど、団長の力は強いのだ。

「さて、こちらとしては商品に傷をつけたくねえから大人しくして欲しいんだがな」

「これは困ったぞ。どうやら見逃してくれる様子ではないな」

「ほな、どうすんの」

「決まっているだろ。戦力的には圧倒的に不利。勝てる要素は0。ならやることは1つ」

「1つ？」

「ああ、逃げる」

マルはそう言うつと懷に手を入れラムダ式と書かれた煙幕玉を取り出し、それを地面に向けて投げた。一瞬にして辺りは煙に包まれ視界がぼろになった。煙幕に呆気を取られているサナエの手とサナエの鞆の持ち手を握りマルは走った。

煙幕が晴れた頃。ようやく山賊達は状況を把握した。さっきまで

話していた2人が居なくなっている。

「どこに行った」

「団長。俺は鼻が利くんだ女の匂いなら覚えたぜ」

アルトが鼻を指差し誇らしげに言った。アルトの鼻は本当に高性能で、シエパードをライバルと言うほどだ。

「相変わらず気持ち悪い奴だな。おめえは」

「レイトル、アルト兄ちゃんの唯一の特技なんだから黙って見ててよ」

ウルトの遺影を大事に抱きかかえているエルトが言った。遺影の中のウルトはものすごい笑顔だ。

「あんまり、フォローになってないぞ」

少し頭の弱いエルトにイルトが呆れた。

「いいから、早く連れてけアルト」

「はい、こちらです団長」

2人の逃げた方向に鼻息を荒くしたアルトが走って行った。

「はあはあ、しまったな」

「うん、しまったなあ」

2人は途方に暮れていた。

「しかし、驚いたわ、まさか、自分で投げた煙幕で方向が分らんようになって、適当に走ったらこんなところに出るとはなあ」

「うむ。予想以上に煙が強かった」

「しかし、どうすんねん。逃げ場無しやで」

2人がいるのは崖っぷち、落ちたら別の世界に旅立つことのできる高さである。場所と状況両方とも崖っぷちである。

「だが、大丈夫だ。こんな暗い森だ。もう俺達のことを見失って諦めているだろう。もうすぐ夜が明ける。ここは日が昇るのを待つてからイリアリアに向かった方が得策だな、道に迷ったし」

そう言って、マルは座ろうとしたが、声がそれを止めた。

「残念だが。それは無理だな」

「なに!？」

2人が声のした方を向くと先ほどの悪意丸出しの20人が立っていた。

「なんで、ここが」

「ふっふっふ。このアルト様の特技が嗅覚だからさ。女てめえの匂い辿らせてもらったぜ」

アルトが自慢げに胸を張り言った。

「匂いつて。変態」

「うむ。変態だな。しかし、特技が嗅覚とはしよばいやつだな」

「せやな。なんか如何にも脇役っぽいな」

「てめえら好き勝手言いやがってもう絶対許さねえからな。団長やっちやいましょう」

色々と一晩で馬鹿にされたアルトの怒りは最高になっていた。

「だそうだ。と言うわけでお前から少し痛い目見てもらおうか」

団長が声をかけると全員が一步前に出た。アルト、イルト、エルトは剣を舐め威嚇してくる。そして、レイトルは鎖鎌の鎖を持ち、鎌をブンブン振り回している。その他はまあ、なかなか悪い顔で剣を構えている。

「こつ、これはまずいんちゃうん」

「うむ。絶体絶命と言うやつだな」

「どうすんねん」

「どうしようもないな」

「なんか、武器とかないかな。うーん、あつ」

サナエは武器になるものを求めポケットを探っていた。そして、手になにか柔らかいものが当たった。

「これは風船キノコ」

アルトにもらった風船キノコがあった。

「・・・せや」

サナエは何か閃めき、風船キノコを見て、にやつと笑う。かわいらしい笑顔なのだが、どこか影を感じさせる表情だ。

「お前らかかれ」

団長の声に合わせ一斉に全員が襲い掛かった。

「おいマル」

「なんだむぐう」

サナエは手に持った風船キノコをマルの口に突っ込んだ。

「ええからよく噛んで呑み込め。それで、落ちろ」

マルの顎を掴み、風船キノコを咀嚼させる。そして、マルの尻を思いっきり蹴った。

「むぐうわああああ」

強烈な蹴りを喰らったマルの体は大きく飛び、崖下へと落ちて行った。

「なんだあとち狂ったか」

山賊達は、サナエの凶行を目にし、動きを止めた。凶行に及んだサナエはゆっくりと山賊達に向かい。

「バイバイ、アホども」

と山賊達を嘲笑し、崖を飛び降りた。とても無邪気な笑顔で。

「自殺しやがった」

アルトが驚きを隠せない顔をしている。エルトは自分たちの行為が人を自殺に追い込んでしまったことに罪悪感を抱き落ち込んでいた。

「ああ、僕らはなんてことしてしまったんだ。すまない2人とも、頼むからお化けになって出てこないでよ。ウルト兄ちゃん僕を守って」

エルトは上ってきた朝日に照らされた崖から2人を確認するため下を覗いた。

「ああ！兄ちゃん達あれを見て」

「なんだ？」

山賊達は一斉にエルトの指差した方を見た。

「「あああああああああ！」」

山賊達の眼に映ったもの。それは一瞬、理解するのに時間がかか

るものだった。逆光により最初は影しか見えなかった。丸い気球のようなものに人が捕まっているシルエツトだった。そして、目が慣れてくるとどういった状態なのか理解できた。ぷっくりと膨らんだマルの足をサナエが握り宙に浮かんでいた。マルはサナエの重さによりゆっくりと下降している。

「あはははははは。アホな山賊どもばーいばーい。あつはははは、ばーかばーか」

サナエは過呼吸になりそうなほど大笑いをしている。

「おい、後で一発殴らせろよ。俺をこんな姿にしゃがって」

「ええやんか。逃げれんねんから。それより、あの山賊達見てみいや。アホ見たいな顔してんで」

「うむ、確かにそうだなバカ面だな」

「笑つとき笑つとき、あははははははひひひひひひ」

「うむ、むははははははははは」

どこかの閣下のような笑い方をするマルである。しかし、爆笑する二人は忘れている。風船キノコの効能時間を。

「ははははははははは。はっ？・・・あああああああああ」

10秒経つたのだ。マルの体からは空気が抜け、2人は結構な高さから森の中に落ちて行った。

ファイトオアエスケープ？イエスッ！エスケープ（3）（後書き）

一応、マルがボケ、サナエがツツコミというスタンスを取ろうと思っ
ているのですが。

どちらとも、勝手にボケたりするので臨機応変にスタンスが変化
しそうです。

下手したら両方がひたすらボケて収集がつかなくなりそうです。

終わりが見えない旅へ（4）（前書き）

いったん短編を挟んでの投稿です。なので、結構間が空いて、すこしキャラの性格を忘れてました。

終わりが見えない旅へ（４）

「くそっ」

獲物を目前まで追いつめ逃げられ、さらに馬鹿にされたことにレイトルは憤慨していた。とにかく不機嫌で、目に映るもの、子供でも犬でも、なんでも襲いそうなほどイライラしている。

「なんであの女は風船キノコを持っているんだ。あんな毒キノコ普通は持っている意味がないだろ」

「あっ」

アルトは、サナエと初めて会話した時のことを思い出した。そう言えば、俺はあの女に風船キノコを渡したという事を思い出し、バツが悪そうな顔をした。

「どうした、アルト」

「えっ、いやいやなんでもない。うんなんでもない。しかしまさか、風船キノコをあんな風に使うとはなあ」

「なんだ、変な奴だな。なんか隠してんのか」

ひどく動揺するアルト。その横のエルトが口を開いた。何か、エルトが話そうとしているのをエルトが見つけた。エルトが口を開くと口くなくことが無いことを彼は知っていた。しかし時すでに遅し。

「兄ちゃん任せて。僕絶対に言わないからね。兄ちゃんが風船キノコをあの女に渡したこと」

口には指を当て、如何にも秘密を守っていますというドヤ顔をしている。

「エルト、お前の絶対は絶対に信用ならんな」

レイトルが兄アルトの末路を想像し、苦笑した。すくなくとも、レイトルが熟読している世界拷問100選のいくつかを体験させられるだろう。

「ほお、アルトお前か」

先ほどまでの、怒りの表情とは打って変わり、レイトルは闇を持

った笑みを浮かべている。

「いっいや、違う違うぞレイトル。あの女がウルトのことを聞くから説明しただけだ。そもそも、毒キノコを食べるという発想など湧かんだろ」

確かにウルトの件があつたので少なくとも山賊達には無い発想だ。
「確かにそうだな。だがなあ、俺の気持ちが出まらないからな、痛い目見てもらうぜ」

「へっ？」

懐から出した世界拷問100選6月号を捲りレイトルは試したい拷問を探し出した。

「そうだな、一定間隔で一定の痛みを与える拷問にするか」

どこからか、鞭を取り出し、10秒間隔でアルトを打ち続けた。
それはもう見ている方にも痛みを感じさせるくらいのものだった。

「イルト兄ちゃんなぜ、アルト兄ちゃんがこんなことに」

「うん、エルト、お前のせいだ」

アルトの悲鳴をBGMに兄の惨劇を止めることを考えず、イルトは兄が全治何カ月になるのか考えていた。

森の一角に生えている木々は悲鳴を上げていた。はるか上空から落ちてきた人間2人が自分達の枝を折っていくのだ。木々からしたたまったもんじやない。

「うわああああああ・・・いったあ」

木がクツシヨンになり落下の勢いが殺され、サナエは大きな怪我をすること無く大地に到着した。

「ぬおおおおおお」

サナエに続きマルも背中から着地した。2人は、自分の状態を確認した。まず手、そして足。両方とも欠損していなかった。指の動きを確認する。そして、頭を触る手には何も付いていなかった。

「奇跡。ほぼノーダメや」

「そうだな。奇跡としか言いようがないな」

「ほんまや、って、いやあああああ」

マルの方を向くや否やサナエは赤面し、少女らしい悲鳴を上げた。
「どうした？」

突然、サナエから少女らしい悲鳴を聞き、マルは何が何だか分からず動揺した。

「こつち向くな、この変態があああ」

サナエはすぐに顔を手で覆いマルから目をそらした。

「誰が変態だ誰が」

「ええからこつち向くな、うんで自分の体見ろ」

「体？うおお、すっぱんぽんじゃないか」

サナエに言われマルは体を確認した。服が破れほぼ全裸状態になっている。街を歩いていたら3秒で警察が走ってきて職務質問を飛ばして現行犯逮捕される程の露出だ。

「服はどこに」

状況に気付きマルは股間を手で隠した。毛やその他は隠せないがブツだけは隠せた。

「・・・あつ風船キノコのせいかな」

衣服消失マジックのタネが分かりサナエは少しスッキリした表情になっている。

風船キノコにより膨らんだせいで、マルの服は大きくなったマルに耐え切れず破れたのだ。普通の主人公ならどんなにダメージを受けても下半身の衣類は残るのが定番だが、マルはそうはいかない。しつかりと破れてもらっている。

「貴様、頼むから一発殴らせてくれ」

「いやや。とりあえずその貧相なもんしまつて。トラウマになるから思春期の女の子に見せんとして」

「誰が貧相だ誰が。それでも警護団の中ではビッグマグナムと言われているんだぞ」

「ええから早くしまえや、そのニューナンプ」

「だれが小型銃保持者だ」

マルはぶつくさ言いながら残った服を巧みに使い、ターザンのような格好になった。ものすごくダサイ、しかし背に腹はかえられない、マルは泣く泣く妥協した。

「寒くないん？」

季節は冬ではないが時間帯は早朝、しかも森の中、かなり気温は低い。

「寒いよ！だが、どうしようもないだろ。なんだお前が服を貸してくれるのか」

「絶対いやや」

「そう言うだろ。だから、こうやってるんだよ」

「もう、このくんだり飽きたから、はよイリアリア連れて行って」

「なんだお前、むちゃくちゃか」

「よう言われる。さあ、行こ」

「俺は無宗教だが、今だけは神に願うよ。お前に天罰が落ちるようになって」

「この世界に来てしまったことが天罰やわ」

2人は口喧嘩をしながらイリアリアに向かって歩き出した。

落下から2時間後。2人はイリアリアに入っていた。この2時間色々あった。獰猛なイノシシに追いかけられたり、底なし沼にハマったり、イリアリアの近くでマルを見た女性に悲鳴を上げられ正義感あふれる勇敢な旅人に襲われたりと色々な事件があり2人はくたくたになっていた。

「視線を感じる」

ターザンスタイルのマルが言った。先ほどもさらに布はボロボロになっており、なんとか下半身を覆っている状態である。

「そりゃ、半裸もん」

「いや、お前も見られているぞ」

「やっぱりかあ。私の美しさに皆釘づけか」

そう言ってサナエはくるりと一回転しポーズを決めた。

「それはないな。おそらくお前の服装だろう」

「分かってるわ。もうちょっとのつてくれもてえんちゃうん」

ボケをすかされサナエは恥ずかしくなった。やはり、ボケは何かしらリアクションが無いとだめになる。

「うるさい。黙れ。言つとくが風船キノコの件まだ許したわけではないからな」

「分かった。謝るわ、ごめんな、ターザン」

「誰が、ジャングルの王者だ」

役所に行く途中。このままではマルがいずれ捕まると思い、2人は服屋『独特服』に寄っていた。イリアリアでは有名な量販店で低価格、高品質、種類豊富を売りにしている。学生に大人気のお店だ。

「うーむ。どのようなコーディネイトにするか」

「なあ、早く出ようや。めっちゃこの店おんの気まずいねんけど」

適当に服を物色しているサナエが言った。店内はお客であふれ返っているが、2人の半径5メートル以内には誰もいない。

「そりやそうだろうな。店員さんが俺を見てヒッて小さな悲鳴を上げたからな」

「なら、コーディネイトなんか考えんとさっさと買つてな」

「なんだお前。少しくらい待っている。なんならお前も服を買ってこいよ。金ぐらい貸してやるぞ」

「えっほんま。やった。助かるわ。流石の私でもずっと好奇の目で見つめられるんはきついかからな」

サナエは少女らしい笑顔を作り、スキップで服を物色しに行った。不本意にもマルはその笑顔にときめきを感じてしまった。

「あーいうかわいらしさがずっと続けばいいのに」

ぼそつとマルは自分の先ほどの感情の変化を後悔し愚痴った。

服を新調し、すっかり街の風景に馴染んだ2人。ようやく、役所に向かうことになった。

「うむ。やはり、自分で選んだコーディネイトが一番良いな」

「・・・さっきのターザンの方が良かったなあ」

「いやいや、半裸だから」

「その格好よりマシやったわ。なんやねんその格好。なんで素肌に革のジャケツト、そして、革パンやねん。なんや、ロックバンドのボーカルか。ついでにマイクスタンドも買っとけよ」

「む。貴様この格好を馬鹿にするな。この格好はな、俺の尊敬するハンターの戦闘服だぞ」

「・・・・・・・・ふーんどうでもええから。少し距離置いてな」

そう言つて、サナエは少しだけマルから離れた。

役所に着いたころマルの服装が変わっていた。サナエに途中で見つけた服屋で着替えさせられていた。よっぽどサナエは嫌だったらしい。役所の中は順番待ちの人で混み合っている。ざっと見て10人ほどいる。客層もまちまちで、本当に何の用があるんだと若干呆れ気味のサナエだった。

「うはあ、めっちゃ混んでるやん」

「いつも、こんなんだ。ちよつと待つてろ」

そう言つてマルは召喚課受付に向かった。少し、受付女と話し帰つてきた。

「どうやら、5時間待ちのようだ。帰っていいか」

「帰らせるか。5時間も知らん街で知らん人に囲まれて待つていられる自信ないわ。お願いやから話し相手になつて」

「む。妙に素直だな。いいだろう。その代わり俺のことをマルグロリア様と呼べ」

「ええから、ここ空いてるから座りやマル」

サナエは自分の座っている椅子の隣の椅子を叩いた。

「せめてマルグロリアって」

「マル」

「うっうむ」

サナエの押しに負け、マルは素直に座った。ここに2人の主従関係が成立した。

「おい、おい起きろ」

マルは隣で眠っているサナエの肩を揺すり、起こした。

「んっんあ」

「順番が回ってきたぞ」

「うーん。やっとか」

目を覚ましたサナエは口元のよだれを拭き、大きく伸びをした。

「しかし、貴様、俺に話し相手になれと言っておきながら、まさか開始15分で眠るとはな。流石の俺でも予想できなかったぞ」

「ごめんごめん。ものすごい自分の話が退屈やったから」

「本当に、お前はサラッと悪口を言うな」

「癖かな」

「性質が悪い奴だ」

ようやく順番が回ってきて、2人は受付に向かった。

「すいません、召喚紋章を確認させてほしいのですが」

営業スマイルをしたマルが受付に告げた。

「はい。では少々お待ちください。ただいま登録簿をお持ちしますので」

そう言って、笑顔が素敵な受付女は登録簿を取りに一度席を外した。

「あのさ」

「どうした？」

「登録簿を見るのはええけど、何百通りとあるんちゃうん？確認するの大変やで」

「心配するな。紋章それぞれに召喚者自身の魔力が練られてあるから、登録簿の上でかざせば自然とそのページがめくられるようになってる」

「魔力って便利やな」

「ああ、なんでも魔力で水も作れるそうだ」

「ぜひ、水不足で喘いでいる国に派遣したい人材やな」

2人が待たされ数分もすると、大きな登録簿を台車に乗せ受付女が帰ってきた。

「これになります。えつとどちらが」

「私です」

「それでは、こちらに手をかざしてください」

サナエは自分の右手の紋章を一度確認し、それを登録簿にかざした。紋章が光りだし分厚い登録簿が独りでに開き始めた。ページを何度も往復するが本の動きは止まらない。このままだと、本がバラけてしまいそうだ。

「あれっ、全然止まれへん」

不思議に思ったサナエが受付女に聞いた。

「・・・どうやら、あなたの紋章はこの登録簿の中にないみたいですよ。ここイリアアの登録簿に登録されていないだけなのか、もしくは、公式に認められていない召喚者のどちらかだと思います。前者ならいくつかの街や国を回れば見つかると思いますが、もしモグリ
の召喚者なら見つけることは困難だと思います。」

「・・・っていう事は、見つけるにはいろんな場所を旅してこの世界を探し回らなあかんかもしれんってこと？」

「そう言うことになると思います」

申し訳なさそうに受付女が肯定した。世界中を探して見つかるかどうかかわらないと言っているようなものである。申し訳なさそうにするのも無理はない。医者が治る確率がほぼ無い癌を宣告するよ
うなものだ。

「すいません。お力になれなくて」

帰る方法がほとんどなくなってしまった。その現実を突き付けられたサナエ。普通の10代の少女なら狂乱し、現実逃避するほどの
衝撃である。しかしサナエは

「うーん。確かに大変やな。でも探すしか手がないんやろ。なら探

します」

生来の樂觀さで簡単に人生の銃弾な決断を下してしまった。同性の受付女の胸をキyunとさせる男らしさだ。

「うむ。そうか、かなり大変だが頑張れよ、応援してるぞ」

サナエの現状を他人事のようにマルが言った。流石のマルも世界中を回るのに付き合うのは嫌なようだ。このままこの物語からフェードアウトしようとしている。しかし、そうは問屋が卸さない。仮にも彼はこの物語のもう1人の主人公である。こんな簡単にフェードアウトさせるわけにはいかない。

「この馬鹿者」

突然野太い声が聞こえた。バラードを歌えば簡単に女を惚れさせることが出来る美しい低音である。

「その声はもしかして団長」

マルが振り向いた先には団長と呼ばれた男が立っていた。整えられた口髭に。ピシッと分けられた七三分けの髪型、如何にも紳士的な50代だ。彼は今日、役所のお偉いさんと話し合いのために役所に来ていた。なんたる偶然、いやこれはもう必然と言っても過言ではないだろう。彼がいなければこのままマルは話から離脱していただろう。

「いいか、マルグロリア。我々ラムダ警護団は困った者、弱い者の味方だ。例え人生のすべてを費やさないとけない任務でも、実行するのが我々だ。それなのに貴様はなんだ。困っている少女を見捨てて逃げようとしていただろう。それでもラムダ警護団の一員か。いいか、これは命令だ。お前は今からその少女に付き添い、共に召喚者を探し出せ」

「でええ、本当ですか、団長!？」

一生外回りを命令されたマルは驚きを隠せないようだ。

「当たり前だ。俺は嘘が嫌いだ。さあ今すぐ準備をして出発しろ」
今日出発とかあまりにも急で休む時間が欲しいとサナエは思ったが、この押しだ。いまさら今日休みたいと言っても、なんやかんや

で休めない気がするので、ここは黙っておいた。

「はっはい了解です」

マルは一度団長に敬礼をし、走って役所を出て行った。家に帰り旅の支度をするようだ。

「さて、ところでお嬢さん」

「はっはい」

余りの勢いに、敬礼をしてしまうサナエ。なぜか敬礼をしないといけない気がした。

「マルは、女好きで信用が置けないですが、やる時はやる頼れる男なのでぜひぜひ、連れて行ってやってください。もし、何かしでかした場合は私が殺しに行くので、ぜひぜひ、あいつをよろしくお願いします。ぜひぜひ」

「はっはい分かりました」

団長のものすごい押しに思わずサナエは了承してしまった。人生で一度の会話でぜひぜひを3度も使われたのは初めてだった。

「ありがとう。そうだ、これを」

団長は胸ポケットからペンダントを取り出した。銀で作られた口ケツトがつけられている。

「これは？」

「これは、ラムダ警護団の特別対応顧客の証です。これがあれば各支部の団員がきつと力になってくれると思います」

「いいんですか、こんな高そうなもの」

「ええ、マルの引き取り料・・・げふごふ、いえ、私たちは弱い者の味方ですから」

確実に厄介払いだ。ポロッと本音が出しまった団長は、ものすごい苦笑い。先ほどまでの余裕をもった表情ではなくなっている。

「今引き取り料って」

「なんのことでしょう。まあとにかくそれがあれば、どこに行こうがラムダ警護団がある限り大丈夫です」

「ごまかしたな」

「・・・お茶でも飲みますか」

30分程してマルが息を切らし帰ってきた。大きめのリュックサックを持ち、旅に出る準備万端だ。

「よし、それじゃあさっさと行け」

「はっはい、いってまいります」

団長に尻を蹴られマルはイリアアの外に向かって歩き出した。リュックサックに入っている鍋やフライパンの当たる金属音が聞こえてくる。とにかく、目につく物を詰め込んできたようだ。

「それでは、頑張ってくださいね。サナエさん」

見る者を安心させる笑顔で団長が言った。長年組織の上に立っているでこういう笑顔が得意だった。

「はい、ありがとうございます。私、絶対に帰ってみせます」

「ええ、それでは」

サナエはもう一度頭を下げ、先に進んでいる重装備のマルの方に向かって歩き出した。

2人を見送る団長は不安と息子が旅立った親父の悲しさが混じり合っていた。

すこし歩いたところで、マルが口を開いた。

「おい。貴様」

「なんやねん」

「俺はお前のこと好きじゃない、むしろ嫌いだ。なんせあんなことやこんなこと色々なことをされたからな、はつきり言って良い印象は無い」

「私も、お前のこと嫌いじゃ。あんな粗末なもん見せやがってトラウマなったらどうすんねん、この時期の女の子の精神はデリケートやねんぞ」

「しかし、不本意だが一緒に旅をすることになった。だからこれだけ言っておく。これからしばらくよろしく頼む。サナエ」

マルが恥ずかしそうな顔で手を差し出した。サナエは差し出された

手とマルの顔を見比べた。そして、少し逡巡し

「よっ、よろしく」

頬を少し赤らめ差し出された手を握った。少しして2人は手を離れた。サナエは先ほど握手した右手を見つめ、それを、はいているズボンの方に持って行き、よく拭いた。

「拭くなよ」

マルがツツコんだ。

終わりが見えない旅へ（４）（後書き）

ようやく第１部終わりです。これからはオムニバス形式を目指して書いていきます。しかし、長かった。もう少し楽にかけると思っていたのですが、いかんせん飽き症なもんでなかなか進まず。さらに関西の人間にも関わらず、サナエの大阪弁にいつも、これで言い方あってんのかなと苦しめられています。

まあとにかく次回からはオムニバス形式なので数少ない読者の方応援お願いします。

そして、いつも通りレビュー感想待ってます。

囚われの花嫁（1）（前書き）

ようやく2章目です。

気軽に見てやってください

囚われの花嫁（1）

人間という生き物とは愛する者のためなら手段を選ばない生き物である。

召喚者を探す旅に出ているサナエとマル。2人はそのことを思い知らされる人物と出会った。

イリアリアを出てすぐ、2人は当てもなく歩いていた。いきなりほつぱり出されたので当然であるが。

「なあ、どこ行く。もちろんやけどこの辺のこと全然分かってへんから」

「うむ。そうだな、とりあえず、人の多い街に行つて役所で調べて後は聞き込みをするのがいいだろう」

「おお成程。それに人が多いつてことは結構栄えてんねんやろ。きつとおいしいもんがたくさんあるんやろうなあ」

「・・・邪な目的も混ざっているようだが、まあいいここから北にあるサリアドに向かうのがいいだろう」

「了解。さあ行くで・・・そう言えば北つてどっち？」

先に歩き出したサナエだが方角がさっぱり分からなかった。

「はあ、ついて来い」

雲一つない快晴の下、マルを先頭に2人は歩き始めた。

草原に囲まれ歩くところだけ草が刈られた道を歩いていると進行方向から逆走してくるカップルが1組。男が女の手を引いて走っている。女の足に合わせるためにそこまでスピードは出していない。

「なんやあれ」

「仲の良いカップルか？」

「その割には悲壮な表情やな。今にも死にそうな顔してんで」

「そうだな、おっ」

走っているカップルに続いて、カップルを追いかける男3人が目に入った。男3人組の速さはカップルを上回っており、ほどなくカップルに追いついた。女がいなければ男の方は逃げ切れたかもしれない。

「あつ、捕まった」

この時2人は展開についていけず立ち止まって見ている。こんな映画でしかないようなべたべたな展開であるため、最初映画の撮影かとサナエは思い、辺りに撮影班があるのかと見渡した。3人組がカップルを囲み1人が女を捕まえ、後の2人が彼氏の男を蹴飛ばして倒し、殴る蹴るの暴行を加え始めた。女を捕まえている男は、この暴行を見せないように女の顔を手で覆っている。女の捕まえ方も丁寧なので、女を取り返しに来た女の身内であると予測できた。

「これはやばいんちゃうん？ちよつとやりすぎやで」

「そうだな。おいお前ら」

マルが声をかけると、3人組は暴行をやめ、マル達を一瞥し女の腕を引き連れ去って行った。

「おい、大丈夫か」

3人組が見えなくなったところ、ようやく、倒れている男に近寄り声をかける。男はかなりやられたようで、頭部から出血している。しかし、意識があるようで、声に反応した。じつとしておいた方がいいとサナエが止めたのだが、男は構わず起き上った。

「うつつう、なっなんとか大丈夫・・・はっ、メグはメグはどこに」
自分の身の心配よりも連れて行かれた彼女の方を心配していた。

このことから男が、彼女のメグのことを本気で愛していることが分かった。これを見て、サナエの男への好感度が上がった。純真、純情、素直な男がサナエのタイプなのである。

「動くな、かなりやられているんだぞ」

「関係ない、俺はどうなってもいい、メグはメグはどこだ」

かなり、乱心しているようで男は、マルの言葉に耳を貸さなかった。しかし、このままでは埒があかない。そこで、サナエの出番で

ある。

「もうええ、マル。私に任せて」

そう言って、サナエは右手の指を親指から順に開いてき平手に変えた。そして、大きく振り上げ、怪我人である男にビンタを喰らわせた。

「痛っ」

「落ちついて、とりあえず話を聞いて」

サナエのビンタにより平常心を取り戻した男は、素直にサナエの言葉に耳を貸した。これは平常心による素直なのか恐怖による素直なのかは分からないが、とりあえず話を聞く体勢になっている。

「まず、あなたの言っているメグさんやけど、さっきの3人組に連れていかれたで。それも偉い丁寧に丁寧」

サナエの衝撃の告白に男はしばし固まり口を開いた。

「そんななんてことだ。くそっなぜ俺は・・・うっうっ」

相当シヨックを受けたのか男は下を向き泣き出した。

「いったい、何があつたのか聞かせてくれんか。少しばかり力になれるかもしれんぞ。俺は、ラムダ警護団の天才美剣士マル、こっちが」

「異世界をさ迷う薄幸の美少女サナエ」

「怪力暴力女だ」

「よし、マル、顔出せ」

「いやだ、殴るつもりだろ」

「分かってんなら早い。さあ出せ。優しくしてやるから」

「いやだっつてんだろ。殴る時点で優しくさもなくそもねえよ」

サナエは風を切る音を出す高速の右ストレートを繰り出す。それをマルは紙一重で避けた。しかし、それを読んでいたサナエは余った左で追撃をする。それをも見事に受け止め、2人は拮抗状態になった。その攻防を見ていた男が、中断するように口を開いた。

「あっ、あの、良いですか？俺はサライと申します。そして、連れて行かれたのが俺の愛しのメグです。俺とメグは半年前に知り合い

ました。一目会ったときから恋に落ち、私たちはそれから、ずっと一緒でした。しかし、彼女は俺たちの住むサリアドの貴族の娘、俺はしがない絵描き。当然2人の恋愛は反対され続けました。そして、彼女の父親が俺をメグから離すために、彼女を結婚させることを決めました。政略結婚という奴でしょうか。別の貴族の息子との結婚を決めました」

「なんてこった。そんな愛のない結婚なんて俺には真っ平ごめんだ」
昼ドラみたいな恋愛話を聞き、すっかりマルはその世界に入っていた。表には出さないがサナエも入り込んでいる。元々サナエは性格に似合わず、こういう恋愛話が大好きな、少女マンガを熟読する少女なのだ。

「それですね。そのあなたも分かりますが、自分の好きではない人と結婚するなんて耐えられないことですよね」

「うん。できれば、好きな人と結婚したいかな」

サナエは初恋の人と結婚したいと言う願望を抱いているので、意見には賛成である。

「そうだから、俺は一大決心して結婚式前日の今日、彼女との駆け落ちを図ったんです。しかし、結果はご覧のあり様、彼女は連れ去られ、私はボロボロ。このままだとメグは」

サライはすっかり意気消沈している。しかし、浮き沈みが激しい人である。興奮したり悲しみにくれたりと、情緒不安定な人間だ。

「・・・それで、お前はどうするつもりだ。メグさんのことを諦めそこでへたり込んでおくのか、それとも立ち上がり彼女を奪い返しに行くのか、どっちだ」

突然、口ぶりが変わり、マルの瞳の中に炎が灯った。どこか顔も昔の漫画のように太い線で描かれている。

「はっ・・・俺は・・・メグと一緒に居たい。だから、どんなことをしても、何があっても必ず奪い返しに行く」

マルにつられサライの瞳も点火した。

「よし、良く言った。俺はお前のそんなところが気に入った。どん

なことでも手伝ってやろう。さあ言え、何をすればいい」

「マルさん。あつありがとう」

「礼なんか必要ない。この今から俺とおまえは兄弟だ。兄弟に礼とさん付けなんかいらんだろ。気軽に兄貴って呼んでくれ」

「あつ兄貴！」

「弟よ」

むさ苦しい男同士が抱き合った。背景に炎が見える。

「ほんまこんなこと言えるくらい成長して、ちよつと前まであんなにちっちゃかったのに、ほんまに子供の成長は早いなあ。お母ちゃん感動や」

懷からハンカチを取り出し、涙を拭くサナエ。心なしか髪の毛が若干パンチパーマ気味になっている。そして、どこから取り出したエプロンを装着している。

「なんで、お前が母親役なんだ。そこは妹でいいだろ。それで、お兄ちゃん私も頑張るねって言って、瞳を昭和の漫画のようにキラキラさせるよ」

「ええやん、妹とかやるよりも母親の方がおもしろいもん」

少しコントを交え、無駄な時間を過ごした3人はサリアドに向かつて行った。

サリアド。貿易や商業が発達しているイリアリアと違い、住宅が密集している都市である。だたその住人のほとんどが富豪と呼ばれる者たちである。イリアリアで仕事をし、サリアドに帰るという循環が出来上がっている。

3人はサリアドに入り、メグの屋敷の前に来ていた。結婚式は、この屋敷内の教会で行われるからだ。下見ついでに来ていた。サナエは屋敷を見て口を開けていた。

「でかつ。でかすぎやろ。ほんまにこれが住宅なんかテーマパークやろ」

周辺の屋敷もかなり大きいのだが、メグの屋敷はそれらよりもは

るかに大きかった。なんせ、先ほど述べたように教会が屋敷内にあり、さらに、外からは見えないが、プールにゴルフ場、馬の厩舎がありと、とにかく巨大なのだ。屋敷が大きいだけ警備もとても厳重であった。至る所に警備員が立っている。

「警備隊長。蟻が侵入しようとしています」

足元の蟻を見つけた警備員が叫ぶ。傍から見ればボケているように見えるが彼は真剣だ。全員が真剣故に、ツツコミが無いことが悔やまれる。

「ただちに駆除せよいか何者も侵入させるな」

近くにいた上司と思われる男が、一切ツツコミ様子もなく淡々と指示を出した。

「ラジャー」

警備員の1人が、屋敷内に侵入しようとした巢内でナンバーワンの働き蟻オウキンを踏みつぶした。一度足を上げ、ぴくぴくしているオウキンにとどめを刺すべく、もう一度踏みしめた。体が支えきれない圧力を受けオウキンは潰れて死んだ。この多大なる被害報告は蟻の巢内に広まり、緊急対策本部が立てられていた。会議内容はこの復讐どのように遂げるかである。

警備員の行動を見ていた3人は、あまりの嚴重さに驚いていた。

「うむ。かなりの警備だな、まさか蟻をも敵と見なすとは。本当に蟻一匹通さないな」

「ええ、いつもより厳しいです。いつもはコオロギまでなんです、まさか蟻まで警備の網が広がっているとは」

普段コオロギにまで目を向けていることだけでも驚きだ。

「いやいや、用心すぎやろ。蟻ごときになんもできんやろ」

「なんだと、貴様、蟻を馬鹿にするな、やつらはやる時やるやつだぞ」

「なんで、キレてんねん。なんか蟻とあつたんかい」

2人のどうでもいい掛け合いが少し続き、この場ではどうしようもできないので一旦サライの家に行くことになった。

街の貧困層が暮らす地域にサライは住んでいた。サライの家は画家らしい家だった。室内には見たこともないような絵画用の道具がいくつもあり、絵も何枚か飾られている。そして、部屋中央にはメグの肖像画が飾られていた。

「へえ、サライさん、絵上手いなあ」

草原を走る馬の絵を見ながらサナエは感心していた。絵心が無いサナエは絵が描ける人が羨ましくて仕方がないのだ。以前、美術の授業で牛を描いたところ、カブトムシを描いたと間違えられ、勘違いした教師がカブトムシ絵画展に提出したところ、ユーモア賞を受賞した経験がある。すごいのかよくわからないが、とにかくサナエは絵が下手なのである。

「そりゃ、プロだからな。しかし、このメグさんの絵は完成度がすごいな、愛を感じる」

紅茶の入ったカップをサライが持ってきた。

「ええ、それは私の最高傑作です。今まで何枚も描いたメグの肖像画から学んだことの集大成といっても過言ではないです」

肖像画のメグは笑顔ではないが、なぜか、見る者を魅了する表情をしている。まるで、モナリザのようだ。

「さて、サライ。確か結婚式は明日だったな」

絵画を一通り眺め、テーブルで紅茶を堪能しているマル。横では紅茶とともに出されたクッキーを頬張っているサナエがいる。出されたナッツクッキーはサリアドの有名クッキー店の一番人気の商品でとにかくうまいと評判の品である。もちろんサナエもその味の虜になり、黙々とメグモグ食べていた。

「ええ、先ほどの教会で行われます」

「なるほどな、おそらくだが俺の考えでは、結婚式は警備が甘くなるだろう。なんせ、あんな柄の悪い警備員を配置しては外面が悪いからな。だから、攻めるなら明日だな」

「なるほど、確かにメグの父親は、世間体を気にしますからね。そ

ういったものを排除するかもしれませんね」

クッキーを紅茶で流しこんだサナエが話した。

「うんじゃあ、明日の結婚式の時に、式場に乱入して、花嫁を連れ去るって作戦でいい？」

「ああ、そうなるな」

「なんや、どつかの恋愛映画みたいやな」

サナエは昔見た映画を思い出した。確かあの作品は誓いの言葉を言う瞬間に式場に乗り込んで、花嫁を連れ去ったはずだ。しかし、そんなタイミング良く乱入できるのか、もし誓いの言葉を言ってしまった場合どうするんだ。それでも、花嫁は乱入してきた男についていくのか、誓いの言葉を言ってしまった手前気まずくないのか。そんなことをサナエは考え始めた。

「そして、俺たち2人が式場で軽く騒動を起こすから、その隙に連れ去ってくれ。ああ、後これを持っておけ」

そう言って、マルは背負ってきていたリュックからトゲトゲの棍棒を取り出した。明らかにリュックサックに入る高さを超えていると言つか棘が引っかかって破けないのか。

「よく、そのリュックに入っただな」

「俺に不可能はない。それで、この棍棒を持っておけ。何があるか分からんからな」

「はい。ありがとうございます」

サライはかなりの重量を感じる棍棒を手に持った。こんなので殴られたらひとたまりもないだろう。

「うむ。では俺たちは役所に行くとするか」

「あっそう言えば、目的はそれやったな。すっかり忘れてたわ」

「お前というやつは」

「役所でしたら、ここを出て右にまっすぐ行くとあります」

「ありがとう。それではまた明日会おう」

役所に行くため2人はサライ家を出た。その後、役所では見事に紋章は空振り、2人は落胆しつつ、本日の宿へとトボトボ歩いて

行
っ
た。
。

囚われの花嫁（1）（後書き）

第2シーズンです。

この話で、サナエとマルの性格を形成していきたいと考えています。未だにこいつらの性格が分かりません。

黒色の飴かと思ったら大量のアリだった。(2)(前書き)

卒論や、就職活動が忙しくて書くのが遅れました。後1話くらい
でこのシリーズは終わると思います。・・・たぶん

黒色の飴かと思ったら大量のアリだった。(2)

サリアドにはラムダ警護団の経営する宿屋があるので、2人はそこに宿泊することにした。

「だーから、俺はラムダ警護団のマルグロリアって言ってるだろ」
「・・・存じません」

「ほら、イリアリア支部で、屈指の最強剣士だ」

「存じません。何か証明できるものはないのですか」

宿屋の受付でマルと受付が口論をしていた。この宿屋は一般の客でも当然泊まることはできる。

しかも、ラムダ警護団の人間ならなんと9割引きで泊まること出来るのだ。その、割引を受けるために、なんとかラムダ警護団の人間であることを証明したいのだ。

しかし、マルは旅の準備をしてきたのだが、残念なことに自分がラムダ警護団である証明できる物を持ってきていないのだ。よって、このように口論になっているのだ。

「あのさ、これで無理なん」

サナエが出したのは、旅に出る前に団長からもらったペンダントであった。

「あつそれはイリアリア支部の団長さんのペンダントですね。それで十分の証明となります。それでは、鍵をどうぞ。両方とも2階の部屋で、階段を上がってすぐ左にあります」

ペンダントを見るや否や、宿屋の受付は、先ほどまでの頑固な表情を崩し、笑顔になった。そして、背後にかけられている鍵を取り、差し出してきた。

「おお、流石。引き取り料としてもらったただけあるなあ」

「なんだ、何を引き取ったんだ」

「うん？団長さんの粗大ごみ」

部屋を2部屋借りたのだが2人は同じ部屋に居た。これから、男女の関係になるわけではない、明日のサライの事とこれからのことを話すためだ。

部屋に入りベッドが目に入ると、サナエはあらん限りの力を足に込め、ダイビングを決めた。ダイビングの際に回転を入れ着地と同時に布団を巻き込み、いつでも眠れる体勢になった。

「うつひゃあ、ベッドや布団や、モフモフやあ。あかん、布団が私を誘惑する。もう、このまま布団にくるまれて死んでもいい。よう考えたら、この世界に来てから一度もちゃんと寝てへんかったもんなあ。今朝は今朝で命からがら、イリアリアに着いてやつと一休みできるって思ったら、いきなり旅立たされたもんなあ。あん時休みたいって言える雰囲気やなかったし」

「うむ。確かにそうだな。団長は明日できることは今日やろう。そして、今日できることは昨日のうちにしようって考えのお方だからな。それに、一度決めたら折れない人だからな。まあ、ペンダントのおかげで泊まれたからよしとしよう」

「ほんま、ちゃんと証明できるもん持っておけよなあマル」

「いや、ちゃんと用意しておいたんだけどな。確かに、リュックの底に入れたはずなんだが」

マルがリュックを探り直すと

「おつ、あった。・・・おい、なんだその顔、目が半開きになってきてるぞ。まだ寝るのか、それとも馬鹿にしてるのか。」

「えつとなあ8:2で呆れてる。まあ、良かったやん見つかった。これで、私と離れて迷子になっても1人で生きれるやん。」

「確かに、これがないと給料がもらえんからな」

「なんやえらい重要なものやってんな」

「それはもう、これがあれば必要最低限の生活はできるからな」

「それやのに無くしてえらいあつさりしとったな」

「いまま思ひ出したら冷や汗ものだな」

「ところでさ、明日どうすんの？」

「式が始まる前に教会の入り口で騒ぎを起こし、サライの侵入の手助けをする。後、作戦の成功を確認したら、すぐにここを離れるぞ。俺達がお尋ねものになったら後々面倒臭いからな」

「えらい簡単やな。騒ぎはどうやって起こすん？」

「うむ。その点は心配いらぬ。明日のお楽しみにとっておけ。さて、それじゃあ、これからのことについて話すか」

「うい」

返事が適当になってきているサナエは、確実に夢の世界へ歩を進めている。今彼女の頭の中では、時折夢がフラッシュバックしている。もう少しで眠ってしまうだろう。

「まあ、はつきり言っですることは今日の様に、街や国を巡って登録簿で探したり、人に見せて情報を得るってぐらいだがな。しかし、いつ終わるのか分からんな」

「ほんまや。ところで、こんないつ終わるかわからん旅に出るのに家族の人は何も言わんかったん、生きて帰ってくる保障の無い戦争に赴くようなもんやで」

「その点は大丈夫だ。俺には身内なんかないからな。両親は俺が物心つく前に居なくなっていたし。俺をここまで育てくれたのは団長だ。だから団長が身内なのかな。その身内が無理矢理ほっぱり出させたからな問題ないだろう。ああ変に気を使っやよ、気持ち悪いからな」

「うるさい、誰が気使うか。それで、ここ出てから当てはあるん？」

少しでも気を使おうとした自分が馬鹿に思えたサナエ。

「いや、まったく。ハッキリ言っでこの役所で見つかると思っでいたからな。とりあえず、人口が多い街や国を回るのが一番効率いいだろう」

「いやいや大変な放浪の旅やな」

「まったく。スナフキンの気分だな」

「なんでお前そーいうの知っでんねん」

さてさて、マルとの作戦会議も終わりこの世界に来てのはじめてのお風呂。

バナナで滑ったり、タライを頭で受けたり、いきなり見知らぬところにワープしたり、森の中で山族に襲われたり、マルと会ったり、崖から落ちたり、一晩中歩いたり、色々あったなあ。今まで一番長い1日やったなあ。うん1日？そーいや、この世界にきたのは夜やったからもしかしたら2日かも。まあええや。とにかく長かったなあ。

くうはああ。あつつあつのお湯が体の疲れを癒してくれる。

そう言えば、お母さんはどうしてるやろ。やっぱ心配してんのかな、搜索届を出してるのかな。ホンマに、帰られるんやろうか。あの時は弱気になっていて自分を见られるのが耻ずかしくて、気持ちを奮い立たせて決意したけど、今になって急に弱気になってしまふ。これから先どれくらい旅をしなければならんやろ。世界中を廻っても見つからなかったらどないしたらええんやろ。そんなときはこの世界で暮らすしかないんかな。一生帰らんかったらおかん、泣くんかなあ。このままやったら私は本当の親不孝者になってしまうなあ。いかん、ネガティブなことばかり考えていたら気持ちが落ち込んできた。あかん、泣きそうや。

「ふっふええ……ふっあつかん、止められん……ふええええ……ぐず、ずる」

自然と声が出てきて、鼻水も出てくる。声も涙も鼻水も止まらへん。隣の部屋に居るマルに聞かれたくない。

シャワーで音隠そう。

「っああああ」

出てきたのが水やった。心臓が止まりそうや。でもおかげで涙が止まった。このままお風呂に入ってたなら、また憂鬱になるかもしれんから、ちゃっっちゃお風呂上がって寝よ。うんで面白い夢でも見よ。

サナエの見た夢は、さんまの缶詰を食べようと開けたところ、実

はそれはビックリ箱で、中からばねで仕掛けられたピエロが出てきた。それが飛び出た瞬間、紫色の熊の着ぐるみを着た母親が、そのピエロを木製バットでホームラン。

「やった。サナエ見た？これで長年の夢やった甲子園に行けるな。」

よし、祝勝会や、口の中の水分を全部吸い取るこのパッサパサのバームクーヘンにイチゴジャム付けて一緒に食べよ」

ここで、サナエは目を覚ました。

「なんつう夢や」

外はまだ暗く、2時頃だ。

「・・・ツツコミどころ多すぎて何から手をつければええのかわからん。悪夢なんかどうかすらわからん。・・・とりあえず、寝よ」

サナエは再び眠りについた。

サナエは先ほどの夢の続きを見ていた。バームクーヘンが水分を吸い取り苦しんでいた。そんな夢を見ていた時、土中では蟻会議が開かれていた。会場には何千匹もの蟻が集まってる。動くこしあんに見える。こんなの見たらしばらくあんパンが食べなくなる。そのこしあんの中でリーダー格の蟻が前に出た。

「えー。すでに皆知っているかも知れんが、我々の食料調達第8部隊のエース、オウキンが人間に殺された」

ざわざわと蟻たちがざわめく。泣き出すもの、怒りに狂うものもいた。オウキンはそれほどの人気があった。

「静粛に。そこでだ、我々はオウキンの復讐をしたいと思います」

「やれー、人間なんかやつちまえ」

「では、皆どのような復讐をするのか意見を出してほしい」

「全員で身体中噛む」

「爪と指の隙間を噛みながら広げていく」

「体の内部に侵入し、じわじわと内部から破壊する」

等等と考えるとゾツとする案がいくつも挙げられている。

「いや、そこは、目玉をつぶすべきだ」

「耳から侵入して脳をだな」
会議はどんどん白熱し、どんどんグロイ方向に向かっていき、朝を迎えた。

サナエ、マルが帰った後のサライ家。サライは地下の一室にいた。その部屋一面に絵画が飾られている。どうやら、ギャラリーのようだ。しかし、違和感がある。すべての絵画が、メグなのである。食事をとっているメグ、花に水をやっているメグ、着替えをしているメグなんてものもある。

「はあはあ、メグもう少しだから待っていてね。絶対に2人で暮らせるようにするからね。絶対に絶対に」

サライは怪しい目付きで棍棒を見つめる。なにか危なっかしさを感じさせる。

「おい、起きろ。サライの家に行くぞ」
サナエの部屋の前でマルが声をかける。しかし、サナエから返事はない。

「おい、早くしないと結婚式が始まるぞ」
ノックをし、かける声を大きくするが、返事は返ってこない。軽くいらついてきている。マルは、団長の下規則正しく、そして、厳しく育てられてきたので、こういうサナエのような寝坊介は耐えられないのだ。

「おい」

マルはノブを掴み、力を入れ引いてみる。

「あつ、あいた」

なんとも不用心な女子高生だ。と普通の物語ならこう言った展開があるだろう。サナエは朝風呂に入っていて、マルの声が聞こえず返事が出来なかった。そして、お風呂からあがり着替えようとした時に、マルがドアを開く。そして、サナエは裸を見られ、かわいらしい悲鳴を上げる。マルは急いでドアを閉め、見ていないふりをする。

「見た？」

「いや、見てない見てない。縞柄のパンツを履こうとしているところなんて見ていない」

「見てるやないかい」

着替え終わったサナエに殴られるマル、頬を膨らまし赤らめるサナエ。

とこのように、マルにとっておいしいのかおいしくないのか分からない展開があった方が、なにかしら面白く、2人の関係も何かしら進展するかも知れない。しかし、現実はそのはいかない。

マルが施錠されていないドアを開くとそこには、名古屋城の天守の頂上に飾られている金の鯨銚しやほしを連想させるポーズを決めテーブルの上で眠っているサナエがいた。鼻には美しい真球の鼻ちようちんを作り、口から涎を流し、気持ち良さそうに眠っている。部屋の中は、それはもう凄惨なものだった。3つあった椅子は絶妙のバランスで積み重ねられ、2つあったベッドの1つがV字に折り曲げられ、壁には蹴りで開けたと思われる穴が開いていた。

「うっうおう」

あまりの衝撃的な光景にマルは息をのむ。人はここまで寝相で室内を破壊し、あのような幾何学的な格好ができるのか、とにかくすごい。生きていてこのような光景を見るのは初めてだ。もう少しこの光景を目に焼き付けていたかった。しかし、このままではこの物語は先に進まない。マルは気を取り直し、サナエの鼻ちようちんを恐る恐る指で割った。人生で初めて見る鼻ちようちん、起こすのならそれを割って見たいと言う衝動に駆られ行動を起こした。それと同時にサナエは目を覚ました。

「ぬはあ。お母さん。お願い、ちょっとでええからお水をちょうだい。水なしでバームクーヘンワンロールはキツイって・・・ふえっ？ああ、夢か」

起き上り、周りを見渡す。バームクーヘンを探しているようだが当然夢なので無い。それが分かるとホッと胸をなでおろした。

「よかったあ。もう口の中パサパサで一口も食えん状態やったからなあ」

「おはよう。なんかわからんが良かったな夢で」

「ほんま、助かったわ。バームクーヘン残したらお母さんにバットで殴られるところやったわ。ところで、こんな朝から、何の用？」

「見事に寝ぼけているサナエは前日の事をすっかり忘れていた。」

「何の用じゃないだろう、結婚式に行くんだろ」

「ああ、そういえばそうやったな」

「早くしろよ。外で待つてるから用意して来い」

「はい」

目をこすりサナエは大きく伸びをし、洗面所に向かって行った。

「やれやれ」

一度溜息をつきマルは部屋を一望してから出た。そこから、宿を出発するのに2時間もかかった。洗顔をしている途中サナエが二度寝をしたり、それを起こそうとしたマルに寝相で正中線5連突きをし、KOする。そして、その騒動に駆け付けた、勇者一行と1戦交え、お前のパンチ効いたぜなどの言葉を交わし、友情が芽生え、共に魔王を倒しに行きそうになったりと色々な騒動を起こしたためである。

黒色の飴かと思ったら大量のアリだった。(2)(後書き)

いきなりこの世界に送られてしまったサナエの内面を描いてみました。表では強く演じているんですが、内面は普通の女の子と書きたかったのです。

この章に終止符を打て、唸れサナエの必殺技(3)(前書き)

初の連チャン投稿です。良い区切り場所がなかったなので、今までとは違い、1話でかなりの文字数になっています。

この章に終止符を打て、唸れサナエの必殺技(3)

サライの家に着くと、サライは準備万端で待っていた。えらい大荷物である。また、正体がばれないように頭には帽子を被り、眼鏡をかけていた。

「どうしたんその荷物」

「とんでもない騒動を起こすので、もうこの街にはいられません。だから、必要最低限な物を詰め込んでいます。それでも、結構な量になりました。まあ、ほとんどが画材ですがね」

サライはメグを取り返した後サリアドを旅立つ決意をしていたのだ。しかし、今から暴れるのにその大荷物はどうか。

「うむ、サライ素晴らしい覚悟だ」

「ありがとうございます兄貴。俺、絶対にメグを奪い返します」
腰には、相手を倒すためだけに作られた棍棒がつられている。

教会に近づくにつれて人が増えていくのがわかる。皆、高そうな服を着ていて、安物の服に身を包む3人はその中で浮いている。また、そのため3人に対する警備の目も厳しくなっていた。視線が刺さるのが嫌でもわかる。

3人は、警備の目を掻い潜り、教会付近に居た。ここで、騒ぎを起こす予定だ。

「さて、では、俺たちがこの辺で騒動を起こす、その隙にお前は教会内に侵入しろ。そして、花嫁の控室に行き、メグさんを連れてこの街を離れる。そして2人で幸せに暮らせ」

「はい。兄貴。もう会う事はないかもしれませんが。今までありがとうございました」

「気にするな。俺とお前は、血は繋がっていないが立派な兄弟だ。それじゃあ、幸運を」

「サライさん頑張つてな」

「はい、あなたもサナエさんありがとう」

こうしてサライは2人に別れを告げ人ごみにまぎれて行った。

「成功すると思えな」

「ああ。絶対にミス出来んな」

2人は絶対にあの好青年のために成功させようと心に決めた。それほど2人はあのサライの男に惚れたのだ。あの一途な恋心、そしてあの誠実さに。

サライと別れたサナエ、マルは教会の入り口の真ん前に来ていた。辺りは招待客であふれかえっている。さすが、この街の貴族の結婚式である。見事に2人は場違いである。

「あのさ、騒動って一体どんななんするん？」

騒動を起こすことは知っていたが、どのようなことをするのか一切考えてもなく、前夜の説明も聞いていないサナエが質問した。興味の無いことは左の耳から右の耳に通り返けるようになっていたのだ。

「簡単だ。ここでお前が素っ裸になり大暴れすればいい」

昨夜散々話した作戦を無視されたマルが悪態をついた。あれほど散々説明したのにこの女は、一体頭の中どうなってるんだ。マルはあきれ返るばかりである。

「なんで私がせなあかんねん。そこはマルがママのことを愛している。世界で一番愛している。こんな僕、気持ち悪いですかって叫び続ければええんちゃうん、それやったら嫌でも注目を集めるわ」

「何故俺がそんなことを」

「それを言うんやったら私の素っ裸もおかしいやろ」

「なんだ、自分の裸に自信がないのか」

「何言うてんねん、空手によって鍛え上げられたナイスバティやぞ。ただ脱ぐのはいやや。最初に素肌を見られる異性は王子様って決めてんねん」

「はいはい。もういい。しょうがないから、事前に用意しておいたこの大量の花火を使うか」

マルはリュックから大量の花火を取り出した。しかし、色々入っているリュックである。サナエは棍棒の件以来、このリュックの事を四次元リュックと呼ぶようになった。

「あるんやったら初めからせえや」

「いや、第一候補はお前の素っ裸だったからな。これは第二候補だ」

「もうええから、はよ火つけ」

「たく、ガーガーうるさいやつだ」

懐から出した火打ち石型油着火器を取り出した。要するにライターだ。

「危ないから少し離れてろよ」

「うい」

去年のラムダ警護団主催の夏祭りの際に余った打ち上げ式の花火に火を点けた。少し時間が空き、盛大に花火が上がった。緑色の巨大な火が空に絵を描く。周りの人間が爆音に反応し一斉に空を見上げた。

「ほーこりやすばらしい」

「流石この辺りで一番のお金持ちの結婚式ね、やるのがすごいわね」

どうやら、結婚式の出し物の1つと思われているようだ。歓喜の声を上げている見物客たちだが、この後悲鳴をあげることになるとは思わなかっただろう。

「そろそろか」

マルは、周囲の状況を確認した。花火を見るために招待客が一か所に集まってきている。マルは、サナエに気をつけるよと言って、花火をこかした。花火の発射口が地面と平行になる。

「うわぁ、大変だ。花火がこけてしまった。逃げないと大変なことになるぞお。こんな大きな花火が当たると全身大火傷だ」

棒読みで危険を勧告するマル。どうやら、彼には演技の才能は無いようだ。花火を喰らうまいと、一斉に周囲の人間が蜘蛛の子を散らすように逃げていく。そして、花火は発射された。超低空で爆発

した花火から先ほどもまでの美しさは消え、恐ろしさしかない。爆発した火の粉は周りの人たちを襲い始める。それに当たるまいと周りの人々は我先に、他人を押しつけて逃げていく。女子供関係なく、とにかく全員が走って逃げる。

「なんかすごいことになったな」

サナエは自分達がしかした現状を見て、少し引いた。

「だがこれで、警備も乱れるだろう」

マルの言うとおり警備についていた屈強な男たちがこの騒動を止めようと集まってきた。

「さて、今のうちに」

「せやね」

警備が居なくなった入り口から易々と2人は侵入した。

「よし、それでは、オウキン弔い合戦の実行を白アリ部隊に任せてよろしいか」

長かった会議もようやく終わりを迎えようとしていた。数々の案が出ては却下され、参加蟻は皆くたくたになっている。そして、この長い話し合いで決定された復讐案が白アリによる作戦となった。

「それでは、貴様たち白アリにこの作戦を任せる。いいな、この作戦に失敗は許されない、全力でかかってくれ」

「イエッサー」

白アリ部隊の精鋭により構成された実行部隊が敬礼をした。彼らは死地に赴く戦士の顔をしている。これからの作戦の困難さを語っているようだ。

「時間がない、直ちに現場に向かってくれ」

「イエッサー」

白アリ部隊が結婚式の行われる教会に向かった。

サナエとマルが騒ぎを起こしたおかげでサライは楽々と侵入することができた。サライは人っ子1人居ない廊下を、棍棒を構え進む。

「よし。確か、ここを曲がれば控室のはずだ」

メグが居ると思われる控室の前に着いた。中に人の気配がするがとても静かだ。どうやら、中にいる人間は外の騒動に気付いていないようだ。

「こつ、ここだ。ここにメグが」

サライは、息を飲みドアノブに手をかける。静電気が手のひらを駆けるが、彼の行動を止めることはできない。気にも留めずサライはドアノブを引いた。

木製のドアがきしむ音を出し、少しずつ開けられていく。ドアが完全に開け放たれ、室内が完全に一望できるようになった。部屋の中にはウエディングドレスに身を包んだメグが立っていた。普段は化粧をしない彼女が、しっかりとメイクをし幼さがすっかり隠れている。

「きつきれいだ」

サライは心に思いついたことをそのまま口にした。いつも傍で見ていたメグとはまた違う美しさ、可愛さがそこにはあった。サライの声に反応し、メグはゆっくりと振り向きサライを見た。

「あっあなたは」

サライを見るや否やメグの瞳には涙があふれ出た。

「メグ、迎えにきたよ」

花火の鎮火に追われている警備員を尻目に教会に侵入していた2人。

「さて、侵入したは良いがどうする」

「せやな、もう仕事は終わったようなもんやろ」

そう、2人がすることはサライを教会内に侵入させることであり、それはもう終了してしまっている。流れで教会内に入ったのはいいがすることが無く途方に暮れていた。

「うむ。しかし、何があるか分からんからな、もしかしたら、まだ警備員がいるかもしれんからな。とりえあえず、この辺で警備員が

サライの方に行かないようにするか」

「いつまで？」

「うーん。考えてなかったな」

「あかんやん」

「そうだな。どうするか」

1手先しか読むことのできない馬鹿2人はますます途方にくれていた。もう、帰ってもいいんじゃないかと考えていた。しかし、せっかくここまで侵入したのだから、もったいないと、せめて、何かしたいと思っている。そんな時後ろから声がした。

「あなた方は確か昨日の」

2人がファイティングポーズを構え振り向く。そこには男が1人立っていた。男は、昨日サライからメグを連れ去った3人組のリーダー格の男だ。男はしっかりと正装していて、この結婚式の参列者の中にいても何1つおかしいことはない。

「昨日の男や」

「仕方ない。ここで足止めさせてもらうか」

「この騒ぎはあなた達の様子ですね。話を聞かせてもらいたいです。が。そういう状況ではないようですね」

「うむ。その通り。恨みはないが御覚悟を」

サナエ、マルが男に襲いかかる。突然の襲撃にも、男の表情は崩れない。

男の名前はブルート。メグの家に仕える執事である。主のことを崇拜し、主のためなら火の中、水の中、中年禿げオヤジだらけの異臭で満たされた満員電車の中だろうが構わず飛び込むこともいとわない。主に危害を加えようとするものなら、ドラゴンだろうが、顔面傷だらけの極道の方だろうが、口うるさい近所のおばちゃんだろうが関係なく、臆することなく立ち向かう忠誠心の塊の男なのだ。

「うりゃあああああ」

普段はサントフェを使うマルだが、抜刀することなく、素手で襲いかかる。今回は足止めすることが目的であり、相手を倒す必要は

ないのだ。ただし1つ、それはもう大きな問題があった。マルは、サンタフェを使えばかなりの強者になる。前回山賊に襲われた時も、全員とまではいかないが、半分は彼が絶命するまでに倒すことができるだろう。だが、彼は素手での喧嘩に関しては素人同然。そのため、彼がブルートに喰らわせようとしたパンチがド素人同然の大ぶりのテレフォンパンチなのだ。

「まったく、めでたい結婚式で、こんなことをするなんて、何を考えているんですか」

顔面に向けられ放たれたパンチを、体を半身ずらし避けるブルート。自分のパンチに振り回され体勢が整っていないマルに右ハイを食らわす。

「いっつあ」

強烈な蹴りを顔面に受けたマルは鼻血を出し倒れた。

「やつくに立たん男やな」

サナエは倒れたマルを踏み台にし跳躍する。

「喰らえええ。必殺飛翔龍脚ひつせつていしやうりゅうきゃく」

名前は大層だが、実際はただのとび蹴りである。

「くっ」

マルを攻撃し次に備えていなかったブルートは、サナエのとび蹴りを正面から腕で受けた。攻撃を受けた際、衝撃を最小限にするために後ろに飛んだ。

「やっるっ」

渾身の蹴りを受けられ、サナエはブルートの力量に驚いた。

「結構、手ごたえあってんけどなあ。立ってられるかあ、軽くシヨツク」

「いえいえ、とても良い蹴りでしたよ。メグ様と同じ年頃の女性とは思えません」

「そいつはどうも。それでも、小さいころから武術漬けやったからね」

サナエは足に力を加え、ブルートの懐に入りこんだ。そして、右

こぶしを放つ。一般人が受ければ一撃で失神するほどの威力を込められた攻撃である。ブルートはそれを払い、回転を加え肘打ちを放つが、サナエは体を曲げ、それをかわす。

「今や」

先ほどのブルートと同じく体を回転させ、蹴りを放つ。これはよけられなかったブルートはまともに蹴りを食らった。

「くっ」

「どうや、私がいる限りサライさんの所には行かせへんで」

サナエは一度距離を空け、いつでも迎撃できるように構える。しかし、予想と反しブルートは構えを解いた。

「サライ？今サライと言いましたか？」

「それがなんやねん」

戦闘中なので、他人に対しても若干言葉が厳しくなっているサナエの返答に驚きを隠せないブルート。先ほどまで鉄面皮だった彼の表情が変わった。

「サライが今メグ様のところに居ると言うのか」

「そうや。あんたらの思い通りにはいかせんで。サライさんはメグさんを連れて街を出ていくねん。こんな愛のない政略結婚なんかなくなってしまったらええねん」

「本当に、あなた達はなんてことを・・・早くメグ様のところに行かないと大変なことになる」

ブルートの動揺が見て取れる。

「あかん、何があるうと絶対に行かせへんで。たとえ何があるうと私はあんたから目を離さず、一挙一動見逃がさんで」

もはや、サナエはメグ家の警備員並に目を利かせている。今ならミジンコー匹通さないだろう。

「あつ、あそこに、舞台、父と母と時々カピバラでマグロ人間と異種格闘技戦をした、中華料理店店長役をしていたジョルジオ・マッキーニだ」

ブルートがいきなり明後日の方を指さす。

「えつどこどこ」

「今だ」

ブルートは視線を逸らしたサナエの隙を突き控室の方に走って行った。

「あああ！しまった。まさか、ジオルジオ・マッキーニって言うまったく知らん芸能人やのに騙された自分が悔しい。誰やねんジオルジオ・マッキーニって、てかどんな話やねん、その舞台。マグロ人間とか見てみたいうちゅうねん。ああもう、おいマルはよ、起き。追いかけるで」

倒れているマルを蹴り起こし、サナエと起きたマルはブルートを追い走り出した。

「サライ、早く、メグ様を離しなさい。もうここから出ることはできませんよ」

サナエ、マルがメグの控室に到着するとこのような状況になっていた。

控室の奥で、サライが、メグの首に腕をかけ羽交い絞めしている。そして、空いている手にはマルが渡した棍棒が握られている。

そして、そのサライに声をかけているのが入り口に居るブルード。どうやら、サライにこれ以上入ってくるなど言われたようで入口から一歩も動けないようだ。

状況が呑み込めない2人の頭の中にいくつもの疑問が渦巻く。なぜ、愛する女性に武器を突き付けているのか。なぜ、メグが泣き顔なのか。なぜ、サライの眼はあんなに座っているのか。

「うるさい。お前達が、俺とメグを引き裂こうとしているからこうなっただ」

「何を分けの分からんことを」

「黙れ。俺とメグは愛し合っているんだ。それなのにお前達が、メグをどうしようもない人間の屑に嫁がせようとするからだろ。なっメグ、あんなどうしようもない親の力でぬくぬくと育ってきた屑

よりも、俺の方が好きだよな、なっ」

「なっ、何言ってるんのよ。いったい誰なのよあなたは。昨日、さあメグこのままだと君は不幸になる俺と一緒に逃げようって言っているのに誘拐しようとするし、今日は今日で、私の大事な結婚式をめちゃくちゃにするし、いったいなんなのよ。後私はあの人のことが大好きなのよ。あんたのようなブ男なんか目じゃないわ」

メグの辛辣な言葉を聞きサライの表情が変わる。

「何を言っているんだメグ、無理に強いられた結婚で気が狂ってしまったのかい。俺達のあの衝撃な出会いを忘れたのかい、君が街に買い物に来ていた時、絵を売っていた俺を見て、目が合ったじゃないか。それでその時君は俺に微笑みかけてくれただろ。あの時2人は恋に落ちたじゃないか。それから、君が学校に行っている時も君がお風呂に入っている時も、君が友達と喧嘩して、枕をぬらしていた時も、ずっと一緒だったじゃないか。ずっとずっと俺は君のそばにいたじゃないか、君を傍で見守っていたじゃないか」

サライの言葉を聞き、サナエの全身に鳥肌が立つ。悪寒というやつだろう、それが全身を駆け巡りサナエの毛穴という毛穴を開く。

「・・・なるほど、ストーカーさんってことか」

サライの言葉に返したのはブルードであった。

「一緒に居たのは、あなたがずっとメグ様にずっと付きまとっていかからでしょう。私たちが何度も何度も追いつ返しても付きまとって、本当になんなんですか。しかも、この2人を騙して、こんな大騒動を起こして、何をしているか分かっているんですか」

ようやく状況を理解したマルは、ゆっくりとサナエの方に向き小さな声で話し始めた。

「おい、これはかなりまずい状況じゃないか」

「うん。まさか、ストーカーさんやったとは、どうする」

「正義の側の付くのはいいが、このままでは悪者だな。よし、シフト変更だ。今からメグ救出派に切り替えるぞ」

「うい」

「そして、作戦遂行次第、後々の事情聴取などが面倒だから全力で逃げるぞ」

「了解。でもどうする、このままやったら近づくこともできへんで」
「大丈夫。俺を誰だと思っている。ラムダ警護団の脳だぞ。もうすでに作戦は考えてある」

また、四次元リュックサックを探る。

「これでもない、あれでもない」

とにかく色々な物が出てくる。フライパン、猫じゃらし、アジの干物、藁人形、映画でパニックっているドラえもんのように色々出てくる。そして、ようやく発掘したものが先ほども使用した花火だ。
「これを噴射して、動揺した瞬間にガバツとメグさんをだな」

「なるほど、ほな早速・・・マル、やっちまいな」

「イエス、ボス・・・あっ」

「どうしたん？」

「リュックの中の炭酸水が漏れてて、花火が湿ってる」

花火を取り出し、舌をペロツと出しかわいらしい笑顔をして、てへっというマル。

「このぶあか！いったいどうすんねん」

先ほどのマルのウザいスマイルも相まってサナエのストレスが溜まる。

「うーん。お手上げだな」

どうでもいいことをやっている2人を尻目に、サライ、メグ、ブルートの3人には動きがあった。

「うるさいうるさいうるさいうるさい。俺のことが嫌いだって。そんな馬鹿なことがあるか、こんなに愛してるんだぞ。なあ嘘だろメグほら嘘って言って」

「嘘じゃないわよ。なんでこんなことして愛されていると思ってんのよ、バツカじゃないの、さっさと離しなさいよ」

「嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ。分かった。どうやら君と俺は今世では一緒に慣れない運命なんだね。そうだ、来世で

一緒になろう。うんそうだそうしよう。そうだ、始めからこうすればよかったんだ。じゃあ、メグすぐに追いかけるから先に行って待っててくれよ」

突然、サライは意味の分からないことを言い出し、この場にいるサライ以外の人間は一瞬理解できずにいた。メグに突きつけていた棍棒を振り上げた時に、全員が理解した。サライはメグを殺す気だ。「さあ、メグ痛くしないからね、一瞬で楽に逝けるようにしてあげるからね」

「何言ってるのよ。やめてよ、私まだ死にたくない。助けてブルート」

「暴れるな。うまい具合に当たらないじゃないか。いいのか苦しみを感じて死ぬことになるんだぞ」

「いやだいやだ、どっちもいや」

一撃でメグを仕留めるために頭部に攻撃を加えたいのだが、メグが暴れるせいで狙いが定まらないようだ。

「くっならば」

サライは暴れるメグを抑え込み馬乗りになり、手に持った棍棒を大きく振りかぶった。

「メグ様！」

今にも振りおろされそうな殺意を秘めた棍棒を止めるべく、2人が行動を起こした。

「やばい、いくぞ」

「もち」

サナエとマルは足に力をかけ、飛び出した。

「さあ、メグ先に行って待っててくれ」

「いやああああ」

あらん限りの力を込め駆けだすが2人の速さよりも棍棒の振りおろされるスピードの方が勝っている。

「あかん、間に合わん」

後数瞬もすれば、メグの頭部が棍棒で打ちのめされ目を覆いたく

なるような光景が広がると思われが、突然、地面が揺れた。とても大きな揺れで今にも建物が崩れそうだ。揺れのおかげでサライはバランスを崩し、振りおろされた棍棒はメグを逸れ、その衝撃によりサライはメグの上から転げ落ちた。なんとと言う偶然、なんとと言う奇跡、なんとと言うご都合主義。誰がなんと言おうが、こういうことが起きたのだ。とにかく、メグは助かったのだ。

「メグ様こちらへ」

その隙をつき、メグは建物が揺れる中、命からがらブルードの元へ駆け寄った。

揺れが起こる前の教会の軒下。時間で言うと、マルが花火に火をつけたころだ。サリアドの北西支部の蟻協会が誇るエリート部隊、白アリ隊が作戦を開始していた。

「いいか貴様ら、柱を削りすぎるなよ。このまま倒壊してしまえば我々も巻き込まれてしまうからな。いいか、なにか大きな衝撃を加えられたら倒壊するように調整しつつ削って行けよ」

「イエッサー」

白アリ部隊の部隊長の指示に従い、エリート達は柱を削り始めた。その速度は本当に早いもので5分もしない内に作戦は終了した。この仕事の速さは是非、社員に欲しいと地元の社長が言うだろう。

「よし、貴様らよくやった。この作戦に参加したことを誇つていい、貴様らはそれほどのことをした。後は作戦の成功を確認するために、この場を離れ、偵察所に移動するぞ」

「イエッサー」

白アリ部隊は、教会を一望できる偵察所へと移動していった。

「メグ、メグメグメグメグメグメグメグメグメグメグメグ。早くこっちに来て、殺してやるからさあ」俺から離れるな。早

完全にイってしまっているサライは棍棒を構え、揺れの中 balan

スを保ちながら、着実に1歩ずつ、ブルードに抱き抱えられているメグに近づいていく。ブルードはメグを抱き立ちあがろうとするが、バランスがとれず立ち上がることができずにいた。

「ええかげんにせえよ。このド変態が」

揺れをもとめせず、サナエは走りだし、飛翔龍脚つうちりゅうきゃくをサライに喰らわせた。今回は受けられることもなく、すべての衝撃がサライに伝わった。まともに喰らったサライは壁に叩きつけられた。

そして、叩きつけられた壁にひびが走り、少し遅れ大きな衝撃が建物内に走った。サナエは倒れたサライの前に仁王立ちをする。その顔は怒り狂った大魔神だ。今までに溜めに溜めた不満や、ストレス、不安が大爆発したようだ。

「ふっざけんな。最初は相手のことを一番に考える素晴らしい好青年やと思つて手伝つてやったのに、なんやこれ、ただの殺人未遂の現場やないか。お前のような自己中心的なゲス野郎を好きになる奴なんかあるか。どうせお前は友達もおらんねんやろうな、お前が同じクラスやったら一回も話さんと卒業できる自信があるわ。とりあえず、どうしてもあされたいと思うやつたら、一回、生まれ変わって小学校で道德の授業をまじめに受けて、通知表に5もらつてから出直してこい。それと、メグさんブルードさんごめんなさい。悪いのは全部こいつなんで、処罰は全部こいつにやっってくださいね、本当にごめんなさいね」

サライに対する説教の勢いに生じて、しっかりとこの事件の被害者2人に謝罪を入れた。

「うつうぐぐぐ、サナエお前おつおぼえ・・・」

サナエの強烈な蹴りにより、教会の柱とサライの意識はついに限界を迎えた。揺れは一段と大きくなり、そして、教会は倒壊を始めた。まず、部屋の壁が崩れ、そして、天井が落ちてきた。余りに突然のことで、その場にいた全員はなす術なく、倒壊に巻き込まれていった。

「ぬはあ」

自分の上にあつた瓦礫をどかし、マルが姿を見せた。これもまた奇跡的にほぼ無傷だ。

尻の下に何かを敷いている感触があつた。

「なんだ」

立ちあがり、自分の座つていた場所を見た。そこには、これもまたご都合主義、無傷で尻の下で気絶してるサナエが居た。

「おい、大丈夫か」

瓦礫から引つ張り出し、頬を数回叩くと、反射的にサナエから放たれた右ストレートがマルの頬に吸い込まれた。

「うん、なんとか大丈夫」

気がついたサナエが最初に目にしたのは、頬を押さえ涙目でこつちを見ているマルだった。

「どうしたん？」

「理不尽な攻撃がいきなりきたんです」

「そうか、それは大変やったな、てかなんで敬語なん？」

「いえ大丈夫・・・です」

すっかり、サナエ攻撃に怯えてしまい、悪態をつけなかったマルであつた。この右ストレートは半年ほどマルにトラウマとして付きまとうてくるのだ。

「ところで、動けるか」

「おう、どこも怪我してへんみたいや。奇跡としか言いようがないな」

「まいったくだ。それより周りを見てみる」

サナエがあたりを見渡すと教会の倒壊に気付き何事かと招待客が集まってきた。

「うわっ人一杯やな」

「教会が潰れるとはな、しかし、そのおかげで逃げやすくなったな。さあ、さっさと逃げるぞ。怖いお兄さん達がこつちに向かって走ってきているからな」

2人は、そそくさと荷物を集め、集まっていた人垣をスルスルと抜け、すたこらとサリアドの外に向かって走って行った。

後日、教会を急ピッチで建て直し、メグの結婚式は無事行われた。誰もが祝福する素晴らしいものとなったそうだ。

「無事終わって、本当によかったですなメグ様」

3枚目のハンカチをも涙でびちゃびちゃにしているブルードが祝いの言葉を述べた。彼にとって、メグは自分の娘のようなもので、娘を嫁にやる父親の心境であった。

「ありがとう。ブルード、あなたのおかげよ」

「いえ、しかし、サライが来なくてよかったですね」

「そうよね。あの事件から行方不明になっているから、もしかしたら、今日来るかと思っていただけ。取り越し苦労だったみたいね」

「ええ。色々とありましたが、おめでとうございます」

「うん。絶対に幸せになるからね」

サライの家にある肖像画には無い、笑顔をしたメグがそこには居た。

それはもう大変な逃走劇だった。襲いかかってくる屈強な警備員達の攻撃を退けながら、2人がサリアドを出るのに、教会倒壊の時から2時間もかかった。

まあ、それでも無事に脱出できた2人は次の街を目指して歩いていた。

「なあ、なんか視線を感じるんやけど」

「なんだ、また妄想の話か」

「ちやうわ。なんかサリアド出てからずっと見られているような感じが」

2人のはるか後方、岩陰に2人を見つめる男が居た。

「ふうふうふう。サナエ、かわいいなあ。サナエサナエサナエ」

そこにはサライが居た。どうやら彼はメグからサナエに乗り換え

たようである。

「あんなに、俺のことを叱ってくれた女は初めてだ。あの蹴り気持ちよかったなあ。ぜひもう一度蹴りたいものだ。はあはあはあ、サナエサナエサナエ」

彼は、もう少し2人に近づこうと歩を進めた。彼の出された右足が、カマキリの死骸を巣に運ぶ、蟻の集団を踏みつぶした。

「はあはあ、早く夜にならないかな、夜になればサナエを襲ってやるのに。とりあえずマルの兄貴が邪魔だから、寝静まったら、まず、この棍棒で兄貴を殺してから、それからだな、サナエをおいしくいただくのは。ふふふふ……！！？ なっなんだこれは」

彼は自分の体に異変を感じた。自分の右足が真っ黒になっているのだ。

「これは、蟻？」

大量の蟻が彼の右足を襲っていた。彼が踏みつぶしたのはサリアドの蟻たちとは違う種類の蟻である。しかし、この辺の蟻は性格が凶暴で、話し合いをすることもなく即座に復讐を行うのだ。足に纏わりつく蟻は一斉に噛みついた。

「ぐわああああああ」

あまりの激痛にサライはのたうちまわる。しかし、蟻は攻撃をやめない。次々と噛みつき、そして、少しずつ噛みつく範囲を広げていく。この後サライは死ぬことは無いが、3ヶ月ほどベッドで過ごすほどの損傷を負うことになる。

蟻によって助けられたことを、呑気に果ての無い旅をしている2人は知る由もなかった。

「しかしあつついな」

「そんな時はこれを使え」

マルがリュックから電池で動く小さな扇風機を取り出した。

「これはだな、このようにスイッチを押し顔の近くで微風を感じれる素晴らしいもののだ」

「いやいやいや、世界観無視しすぎやろ。どうなってんねんその四

次元リュックサックは、中見せて」

「だめだ。この中にはお前のような年代の子には少々刺激が強い者がたくさん入ってるからな。だめ、絶対だめ、もう、本当にダメ、そして、最後にこれだけ言わせてくれ、痴漢アカン」

「最後関係ないやろ」

「悪い、言いたかっただけだ」

いつか、リュックサックの中を見てやろうと考えるサナエであった。

この章に終止符を打て、唸れサナエの必殺技(3) (後書き)

なんとか、書き終えました。結構サナエが好戦的で扱いづらいかもw

主にマルが進行役を置って出ることが多くなりそうです。こいつは性格がコロコロ変わるから扱いやすい。

白い水着とニャーと鳴く生き物（前書き）

「夏のホラー2010 〜百鬼集帖〜」の方に作品を出しました。
そのため、かなり、こちらの方の更新が遅れてしまいました。
内容はまあ、いつも通りの駄文なので暇な方だけでどうぞ。

白い水着とニヤーと鳴く生き物

海から吹く潮風が、海独特の匂いを運んでくる。この匂いを嗅ぐと、海に来ていることを実感させられる。

今2人は海に面した街に来ていた。海水浴場が有名な街で、海水浴客で賑わっている。この街にいる人口の半分以上が海水浴客だから驚きだ。

では、なぜ2人はこの街にいるのだろうか。

「なんか、しみりしたいなあ。そうや、海が見たい」

突然、サナエがこんなことを言い出したのがきっかけでこの街に来ることになった。この発言には特に理由はなく、なんとなく海が見たかっただけである。

この街にも役所があるので一応訪れることに意味はあった。しかし、それは二の次で、マルがこの発言を受け入れた本当の理由は季節が夏だからである。

夏と言えば、あなたは何を想像するだろうか。夜店が並ぶ花火大会、浴衣姿のカップル、蝉がざわめく緑に染められた森を走りまわる少年達。

色々があるが、マルの頭に浮かんだのは、将来のお嫁様が、海で波に水着をさらわれるドキリわくわくポロリハプニングだ。彼の脳の35インチの妄想専用テレビに手ブラの女性が映った瞬間。

「行こう。今すぐに行こう。召喚者なんてどうでもいい。今すぐだ今すぐ」

と鼻息を荒げたマルはサナエの腕を掴み、男の夢を求め走り出した。

「いやっほおーうーみーやああ。」

太陽の光を反射する白のビキニを装着したサナエが海に向かって全力で走りだし、海に飛び込んだ。水しぶきが飛び、それが太陽の

光と調和し美しい虹を作りだす。

「うーみーはーひろいーなーおおきーなー」

ご陽気に歌を歌ってるサナエは自分に向けられる多数の好奇の視線に気づかず、平泳ぎをしている。視線を集めている理由は、サナエが歌っているからではない、まあそれでも視線を集めるには十分だが。好奇の視線の理由はサナエの持つボディラインのせいだ。

空手で鍛えられた体はモデルのように均整がとれている。胸が大きいわけではなく全体的に引き締まったスレンダーな体だ。その体は周りの水着ギャルの中でも異彩を放っていた。本人は気付いていないようだが、周りの男どもは皆頬を赤く染めており、女どもは嫉妬の眼で見ている。体は大人、頭は子供、逆コナンである。

「おい、あまり暴れるな、周りに迷惑だろ」

トランクスタイプの水着を着ているマルが注意をした。常識人のような行動を取っているが、彼はすでに、この短時間で30人もの水着ギャルに声をかけ粉砕している。決して顔も体形も悪くない彼だが、いかんせんしゃべり方が好みの女性の前になると馬鹿になっってしまう癖があった。今回もその癖が作動し、頬に平手の痕を残す結果となった。

やはり、第一声が

「俺の、未来のお嫁様あああ」

なのがいけないのだろ。頬をさすりながら、クロールで高波を作り周りの人間を吹き飛ばしているサナエを見つつ、もう帰りたいと思っていた。

「ピピピピッ。 8 4 6 0 8 5。 なかなかの数値だ。 まさかあいつがこれほどのスタイルをしているとは思わなかったな。・・・中身がなあ、もうすこし、素直でかわいらしいかったらなあ、もったいない。残念。ピピピピッ、むっあそこに9 5 6 2 8 8のグラマラスな女性が」

生まれながらに持っている女性の天敵になるであろう3サイズスカウターが作動した。意思とは関係なく、マルの足は、赤い水着を

着たボンキュッボンの女性のもとに走って行く。

マルが海に居た女性約100人に声をかけている間、サナエはずっと海で泳いでいた。

彼女の起こす高波で、溺れる者が続出しライフセーバーは大忙しだったようだ。

「いやー満喫満足、大満足やわ・・・ところで、顔どうしたん？」

心おきなく海を満喫し、海の家特製の、かき氷メロン味を楽しんでいるサナエは、マルの顔がえらく腫れていることに気がついた。

「・・・ドッジボールで6年生のボールが顔面に当たったんだよ」

ルール上顔面ならセーフであるが、マルの顔面のボロボロ具合はアウトである。

意味の分からない言い訳をするマル。

しかし、彼の顔の腫れ具合はその程度でできるものではない。いくら6年生のボールが速くても、ただか高学年である、それほどの威力があるとは到底思えない。顔の状態は、両目は腫れ上がりまったく開いていない。そして、頬は殴られた衝撃でへこみ、唇はたらこのようになっていた。

「アナゴさん・・・」

「違うわ、誰が27歳の老け顔の嫁の尻に敷かれているマスオさんの同僚だ」

「相変わらず、変な所に詳しいな。しかし、どうせその顔の傷はナンパした女にヤクザみたいな男がおって、その男に殴られそうになったから、走って逃げてんたら、走った先にはバナナの皮があつて、それを避けたら、5歳の女の子がおってその子にぶつかり、その保護者のお母さんにロリコン変態野郎に間違えられて弱パンチから始まるエアリアルを使ったコンボでやられたんやろ」

「見てたな」

「どこかの誰かさんが相手してくれへんかったから暇で暇で仕方なかったからなあ」

「うむ、すまん。どっかの洗濯板の誰かさんと違って胸の大きな
ナイスバディのお姉さま方がたくさん居たからな」

「ふーんそうですか・・・おい、受身取る準備しとけよ」

「へっ？」

サナエは軽いフットワークでマルの後ろに回り込みドラゴンスー
プレックスを決めた。鍛えられた腹筋と背筋により形成されたブリ
ッジはとても美しい。

この街の港で取れる巨大サザエが名産品であり、それを一度食べ
てみようと言う事で着替えた2人は港に来ていた。サザエが焼ける
のを待っている間2人はボーと海を眺めていた。

ニヤーニヤーニヤー。

「んあ、ウミネコや」

港の上空をウミネコが元氣よく飛んでいた。どうやら、漁師が捨
てる商品として扱えないキズ物の魚をもらおうとしているようだ。

「ウミネコ？なんだそれは」

「何って、あれやん」

サナエが空を旋回している鳥を指差した。

「あの鳥か、あれはウミネコと言う意味のわからん名前じゃないぞ」

「へっ？」

「あれはネコだ」

意味のわからないことを言い出すマル。

「どういう事？あれがネコやったらあれはなんやねん」

漁師にもらった小魚をはぐはぐ食べている子猫をサナエは指差し
た。しかし、その子猫はとても愛らしい顔をしていて、今すぐにモ
フモフしたい魅力を持っている。

「あれは、リクネコだ」

「リクネコ！？」

「ああ、空を飛んでいるのがネコで、あれは陸に居るからリクネコ
だ」

「なんでえ、ニヤーはネコ・・・ああややこしいからここはリクネコって言うとかわ、そのリクネコがニヤーって鳴く声に似ているから、飛んでるネコはウミネコって言ううんやろ」

「いや違うつて、最初に確認されたのがネコで、リクネコは後だ」

「ええ!？」

「知っているか、元々リクネコはニヤーじゃなかったらしいぞ」

「うええ!？」

新しい事実ばかりでサナエは軽く混乱している。

「なんでも、昔、海付近に住むリクネコは食糧不足で困っていたらしい。そこで、やつらが目をつけたのがあのネコだ。しかし、やつらは空を飛んでいて、近づくことが難しかった。そこで、リクネコはネコの仲間と惑わせるようにニヤーと鳴くようになったようだ」

「うん?つまり、仲間と思わせて油断したところをガバツと行くってこと?」

「そうそう。この世界はそう言う事が多いんだよ。例えば、港付近に住んでいた生き物で、これまた食糧不足で困っている生き物が居たんだ。そこでその生き物が目をつけたのはリクネコだ。それ以降、その生き物はリクネコ食いと呼ばれている」

そう言つて、マルは港の食料店の檻に入れ売られているワニを指差した。失敬、この世界ではワニではなくリクネコ食いだつた。指差されたリクネコ食いはニヤーと鳴いた。

「なんや、ややこしいなあ」

「うむ、つまり同じ鳴き声の生き物は何かしら食物連鎖の関係あるんだよ」

「へえ」

「1つ話をしてやろう」

マルは一息おいて、神妙な面持ちになった。

「話?」

「ああ、これは『ラムダ警護団夏のドキッ男だらけの水泳大会ポロリもあるよ』の時に宿で先輩から聞いた話だ」

筋肉隆々の男だらけのむさ苦しい見たくもない水泳大会だ。しかし、これはマルの話にはほとんど関係ないのでここではスルーさせてもらう。

「先輩の実体験なんだがな、昔その先輩は夜の山の見回りの任務に就いていたんだ。なんでも、山で遭難してしまった人がいたら助けたり、山賊を見つけたりするのが目的だったらしいんだ。その任務について2年目くらいかな、先輩がいつものように森を明かりを照らして歩いていると山の奥から声がするんだよ」

「ちよつちよつと、それって恐い話？」

「おーい、こつちだよーって声でしたらしいんだよ」

「無視かい、私そう言うん無理やって」

「まあ、いいから聞けって」

今にも逃げ出したそうな涙目のサナエをなんとか逃げ出させないように腕を掴み制止させる。

「それで、先輩は、もしかしたら遭難をした人が助けを求めているんじゃないかと思ったんだよ。それで、先輩は声のした方に走って行ったんだ」

ゴクツとサナエが生唾を飲む音がした。

今は時間で言う夕方でもまだ、周りに人が結構いて色々な音がするのだが、サナエとマルの耳には全く届いていないようだ。なんやかんやで、サナエも嫌だと言っているがマルの話に聞き入っているようだ。

「先輩が声のした場所に着くと誰もいなかったらしい。なんだ、空耳かと先輩は翌日に耳鼻科に行こうと考えていたら後ろに気配がしたんだ」

「けっ気配がして？」

「そこで、勇気を出して振り返ったら・・・顔面しわだらけの獣のような牙をもった老婆が立っていたんだ！」

「ひい」

それほど怖い話ではないのだが、サナエに恐怖を与えるには十分

だったようだ。

「先輩は無我夢中に走り出してなんとか、仲間の居る山小屋に逃げ込んだらしいんだ。そして、さっきした体験を話したらいいんだ。すると、先輩のさらに先輩がこういったらしいんだ。その老婆は幽霊じゃない、この山にする人間を喰らう魔物だって」

「魔物？」

「ああ、つまりだネコとリクネコと同じように、俺達を喰らうために俺達の言葉を使う生き物が居るってことだ。それら人間を喰らう生き物を総称して魔物って呼んでいるんだ。これからの、旅もしかしたら遭遇するかもしれないから気をつけろって話だ」

「よかった・・・幽霊やないんや、それなら実体あるから殴ることできるんやな。でも、しわだらけの老婆がいきなり後ろ立ってたらめちやくちゃ恐いな」

「ああ、考えただけでもぞつとする」

先ほどの話を自分が体験することを考え身震いする2人の、背後に人影が迫っていた。その人影はまだ、恐怖のさめていないサナエの肩を後ろから掴み

「あの・・・」

肩を掴まれ驚いたサナエはゆっくりと振り返った。そこには先ほどの話に出てきた老婆と同じようにしわくちやの白髪交じりの老婆が立っていた。

「いっいやああああああああ」

心拍数が一気に上昇し、恐怖ゲージが極限まで溜まったサナエは、正面に立っているマルに向き直り、マルの髪を掴み、全力で走り出した。

「いた、いたたたたた、痛いから、あの本当に禿げるからねえ、ちよつとああああああああ」

髪の毛が毛穴から抜ける音を聞かされながら、マルは改造モーターを搭載したミニ四駆のごとく疾走するサナエに引っ張られ、宿へと連れ去られていった。

「あの、お客さん、サザエ焼けたんだけど」

港の看板娘のトメさん87歳が焼けたアツアツのサザエを皿に乗せ、走り去っていく2人をただ茫然と見つめていた。

白い水着とニャーと鳴く生き物（後書き）

別にサナエを美少女キャラと設定しようと思っていらないです。まあ武術をしているのでボデイルインだけは良いかなと思ってそう書きました。

相変わらずマルが扱いやすいですね。

未完成のパン（前書き）

かなり間が空いての投稿です。卒論や就活で暇がなく。前回の投稿から一か月の時間が空いてようやくの投稿です。

未完成のパン

「その旅の方、パンはいかがですか」

サナエの右手に刻印された紋章を探す旅をしている2人に、男が声をかけた。男は、エプロン姿の中年オヤジ。とても人の良い笑顔をしている。

「へっ、パン？」

声をかけられた2人が足を止めた。

そういえば今日は何も食べていなく空腹を感じていた。そんな状態でパンはどうだと言われたのだ足を止めないわけがない。

「こんなところでパンが売っているなんてな。ご主人、こんなところで商売が成り立つのか、見たところ、このへんは人通りが少ないだろうに？」

確かにこの辺りは、山で囲まれていて、人通りは少ない。よつぼどの目的がない限りこの場所を通ることはないだろう。そんな場所でパンを売っているのである、マルが驚くのも無理はない。

「いえ、私は、ずっとここで売っているわけではなく、この車で各地を回ってパンを売っているんです。それで今日は、気分でこの場所にしよかなと思ひまして、どうですか、1つ。私の人生で1番おいしかったパンを模して作ったものです。かなりのおすすめですよ」

1つ補足しておこう。この世界は地域ごとで文明の発達や文化が全く違う。そして、車は、かなり高度の文明をもった地域にだけしか存在していない。かなりの高級品である。

「どうですか、このパン保温機に入れているのでほかほかですよ」

店主の男が取りだしたパンは美しい光沢をしているコッペパンであつた。表面に光が反射して、景色が映っている。

「これは、このまま食べてもおいしいんですが、この特製バターを塗ればさらにおいしくなるですよ」

そう言つて、店主の男は、パンとは別に保冷室からキンキンに冷えたバターを取り出した。このバターをホカホカのパンに載せるとろりと溶け、さぞおいしいだろう。

「このバターはね、ある地域にしかない、バター牛（バターを作ることには使えない牛乳を出す牛）の牛乳から作ったバターですよ。これが、このパンに合うんですよ。いかがですか？」

「ごくつ・・・マル、買つて」

「うむ。俺も食いたい、ご主人そのパンを2つくれなにか」

「はい、ありがとうございます」

店主はパンが売れたことに喜び、2つのパンを紙に包み2人に渡した。

「めっちゃ、ええ匂い」

サナエは、コッペパンを半分に千切る。ちぎられた面からは、パンの香ばしい臭いがあふれ出る、それにつられ、サナエの口内に唾液があふれ出る。そして、喉が鳴った。

「いったいただきます。あーん・・・んっ!？」

サナエは大きな1口でコッペパンにかぶりつく。

「んっ・・・んまーい。なんちゅう、うまさや。もう、不純な味なんか一切なく、パンの味しかないんやけど、そのパンの味が、今まで食べたパンよりもはるかに強くてめっちゃうまい。幸せ、毎日でもこのパン食べていたいわ。それで、このバター。これも、味が濃くておいしいんやけど、パンの味をつぶすことなく、2つの味がそれぞれを助けあつていて、めっちゃうますぎる」

あまりのパンの美味しさに、興奮が収まらないサナエは、あつという間に、付属のバターを使いコッペパンを胃の中に収めた。

「うむ。これはすごいな、ご主人」

マルも感動しているようだ。

「そうですか、喜んでもらえてよかったです」

「うん、ほんまにうまかった。これはパンの頂点に立つパンやわ、完璧なパンや。ハッキリ言つて軽く中毒や」

「・・・本当に完璧なパンだと思いますか？」

店主が、怪しい笑顔を作った。

「どうということ？」

「実はですね、それはまだ完全な味を再現したわけじゃないんですよ。実は、ある材料が欠けているんです」

「なっなんやて、こんなに美味しいパンが未完成品!？」

「なにっ、店主、その材料とは、こういったものなのだ」

「山塩です。ここから、少し行った所にソルト山という山があります。そして、その山頂にある、岩から取れる塩です。それが、あればこのパンは完成します。しかし、ソルト山はとても険しく、私のようなろくに運動もしていないオヤジにはとてもとても登れるようなものではないのです。」

見ると店主の体は、よく見かけるメタボの中年体型をしている。

50メートルも走れば、もう起き上がることができないだろう。

「だから、このパンを完成することは一生ないのです」

店主が悲しそうに俯く。本当に残念そうな顔をしている。

「・・・おじさん。大丈夫、私らが行って取ってきてあげるわ」

「へっ？」

店主が驚く前にマルが先に驚いた。この後、それは無念ですねと言ってこの場を去ろうと思っていたマルには予期できない言葉であった。

「こんな美味しいパンが未完成品なんやろ、これよりさらにおいしいパンが食べられるんやったら、どこへ行ったるわ」

「おお、ありがとうありがとう。よし、ここから、ソルト山までかなりかかるので、私の車で送っていきます。もし、山塩を取ってきてくれたら、完成版のパンを大量に御馳走しますよ」

「いよっしゃあああ、テンションあがってきた。善は急げ。さあ行こう、塩取りに行こう。あれっ、どうしたんマル」

肩を落しうなだれているマル。

「いいか、お前は、自分を召還した召喚者を探して、元の世界に帰

るんだろ。こんなところで道草食っていていいのか」

「うつさいな、道草は食うてへんわ、天然酵母のパン食うてんねん」
今のは道草とパン、天然とてんねんがかかっている二重ボケである。今の自分のボケの出来に満足したサナエはなぜか誇らしげにマルを見る。俗に言うドヤ顔だ。

「・・・はあ、その腹の立つ表情につっこむのが面倒くさいから無視するが、どうせここで俺が制止しても、力づくで行くんだろ。分かった。その代り店主大量にパンを御馳走してくれよ」

そう言つて車にマルは車に乗り込んだ。その後サナエも乗り込み、車はソルト山に向かって走り出した。

1時間ほど走り、車はソルト山に到着した。

「ここかあ、なんか塩の香りがするなあ」

車を降り、3人はソルト山を見上げた。

ソルト山は、標高500メートル程の山である。そして、名前の通り山頂で岩塩が多く取れる山なのだ。吹く風は塩を含んでいて海で吹く風のように、風に当たるだけで身体がべとべとになる。また、その風のせいで、植物はほとんどない岩だらけの山なのだ。

「早く行きましょう。山塩が私を待っています」

遂に念願の夢が叶うかもしれない店主はすっかり、興奮している。

「まあまあ、ご主人落ち着いて」

「早く早く、行こ、山塩を使ったパンが私を待ってんねん」

どうやら、サナエも興奮しているようだ。彼女の眼はすっかり中毒者のそれと同じようになっている。すっかりパンの虜だ。

「そつだそつだ塩が待っているんだ。早く行きましょうマルさん」

「そつそつ、落ち着いていられっかい、おじさん楽しみやね」

「ええ、山塩が手に入ったら、さらに料理の幅が広がりますからね」
舞い上がっている2人は手をつなぎスキップしながら、山に向かって行つた。

「いかん。俺だけでもしっかりしないと」

これから先の苦難、主に2人の世話を考えげっそりとするマルであつた。

山は、店主の言うほど険しいものではなかつた。確かに狼等の獣がいるのだが、何もしなければ、こちらに襲いかかってくる様子はない。

しかし、トラブルはあつた。店主が持ってきていたパンをサナエがむさぼり食い出し、それを止めようとしたマルが蹴りを食らい、その殺気を感じた狼が襲いかかつてきて、その狼にパンを奪われ、怒り狂つたサナエが狼に襲いかかったり、その大暴れの衝撃で岩が転げ落ちてきたりと、もうほとんど自分たちが起こしたようなものばかりだ。

「やつと着いた。しつかし色々あつたなあ、こんなところおじさん1人やつたら絶対に無理やつたな。私らと一緒に正解やな」

「お前がいなかったらもつと簡単に来れたと思うんだがな」

山を登り始めて5時間。ようやく3人は山塩の採れる頂上に到着していた。

「岩だらけやな。いったいどれが山塩の採れる岩石なんやろ」

緑色に発光している岩や、虫を取り込んでいる透明な岩など、多種多様な岩があたりにあつた。

たくさんの岩を前に迷っているサナエとは正反対に、店主は、一目散に一つの岩に向かつていった。

「これだ。これが山塩の採れる岩だ」

その岩は表面に細かい粒子を纏っていて太陽の光を反射し輝いていた。どうやら、表面の細かい粒子が山塩のようだ。

「えっほんまに、ちよい味見・・・ぬあ、これは程良いしょっぱさの影に隠れた甘さがあつてうんまいなあ。あのパンにこれが加われば・・・最強のパンが出来るな。と言うわけでおじさん早く降りてパン作るう」

塩を舐めその味に感銘を受けたサナエのテンションはマックスになり、疲れもすっかりとんだようだ。しかし、その眼は先ほど変わらず中毒者の目になっている。よほど、完成版パンが楽しみなのだろう。

「なあ、おじさん、はよ降りよ・・・おじさん？」

岩石の前に立ち、店主は動こうとしなかった。

「どうした、ご主人。あまりの感動に足が動かんか？」

「そりゃそうやろ、いよいよ自分の人生で最高のパンを作るんやから。感動しても不思議じゃないで。かく言う私も、楽しみで楽しみで手が震えてんねん」

「お前、それは、禁断症状だ」

さすがのマルもサナエの状態を心配し始めた。

「ふふ・・・ふははははははは・・・ぐほつぶふお、ゲホゲホ、ふはははははははは」

突然、店主は高笑いを始めた。慣れない笑い方のせいか、一度むせている。

「ななな、どうしたん。まさか、夢が叶う嬉しさから精神異常、それとも精神破綻!？」

危ない単語を放つサナエである。テレビなら間違いなくピーが入っている。

「こんな簡単に引っかけってくれるとはな。今までで一番簡単だったぞ。この馬鹿ども」

店主はゆっくりと振り向いた。そこには先ほどまでの温厚な仏の様な顔をしていた店主ではなくなっていた。頭には角が生え、口元には虎のように鋭い牙が伸び、皮膚の色も緑色に変色していた。そして、一番目を引くのが、研がれたナイフのように鋭い爪である。触れるだけで肉が切られそうだ。

「なあななな、なにい、へっ変身したあ！」

店主の変貌ぶりに動揺を隠せないサナエ。

「うむ。どうやら、人間ではなく魔物のようだな」

結構命の危機のはずなのに何故かマルは余裕があった。

「ふはははは、ぐほおぶほお、ふー、ふはははははは」

「おい、無茶な笑い方はやめろ。喉を傷めるぞ。とりあえずこの水を飲め」

「おお、すまん。やはり、悪者と言えばこのような悪意に満ちた笑い方が定番だと思ってな、無理してやっているんだが、どうかな」

「うむ。頑張ることはいいことだが、途中でむせてしまえば、威圧感もなくなるしなここは普通がいいだろう」

「そうか、なら、ふへへへへへへへ」

「おお、そっちの方が悪者っぽいぞ」

「そうか、ならこれからこれでいくか、ふへへへへへへ」

「よし、では再開だ」

「おう、ふへへへへへ、よくぞまあ、のこのことついてきてくれたものだ。おかげで楽しいディナーになりそうだ。なんせ、山塩は人間の肉によく合うからなあ。考えただけでよだねが」

「なるほど、俺達をおいしくいただくためにわざわざ、パンを餌にここまで連れてきたのか。見事に引っかけってしまったな。言うことは、山塩を持って帰ってもあのパンは完成版にならないんだな」
「ふへへへへ。その通りだ、まったくこの俺がパンなぞ作れるわけないだろう。あれは、有名なパン屋で買ってきただけだ。まさに、エビで鯛を釣るとはこのことだなあ」

今の状況をようやく読め、冷静になってきたサナエがその言葉に反応した。

「なんやて、ってことは何かい、山塩をせっかく採っても意味ないってことかい」

「ふはははは。そうだ、山塩など意味ないんだよ。山塩はな人間の肉に使うために存在しているんだよ。さあ、もういいだろう腹が鳴って仕方がない、さっさとその肉を食わせろ」

プチ。

サナエの頭の中の何かが切れた。

「いただきまああああす」

魔物が、その凶悪な爪を構えサナエに向かった。

「おい、魔物。何故俺がこんなにも余裕なのか教えてやろう」

「ああ？」

「それはな、うちのドラ娘の堪忍袋の緒が切れたからだ。もう、俺じゃ止められん。お前も見ただろう狼に襲いかかる悪鬼羅刹ぶりを。あの時は一度食べた事あるパンを奪われたただだから大魔神レベルは10段階中5だった。今回は、今日一日楽しみに楽しみにしたパンを奪われたんだ。どうなっても知らんぞ。俺は怖いから少し逃げさせてもらう」

怒りゲージがMAXになり全身が赤オーラで包まれ、いつでもサナエは超必殺技を発動させることができるようになっていた。

「うおおおおお、止まれ俺の腕。このままではヤバい気がする。止まれ止まれえええ」

サナエに振り下ろされようとしている魔物の腕は勢いがついてしまい、もう止めることは出来ない。

うつすらと背中中天という文字が見えるサナエは、触れれば肉を切り裂かれる爪に臆することなく、踏み込み紙一重で攻撃をかわし、魔物の懐に潜った。

「なあっ」

ジャブで魔物の眼を打ち、眼つぶしジャブをワンとし、ツーでストレートを魔物に撃つ。ストレートの衝撃で後ろに吹き飛ぶ魔物を同等の速さで追いかける。足を地面に着けなんとか体制を整えようとする魔物に下段弱キック、中段強パンチ、そして必殺のアップパーカット、浮き上がった魔物に向かい、溜まりに溜まった怒りゲージを使用し、波動拳コマンド×2強パンチの超必殺『自分の息が切れるか相手が事切れるまで、ひたすら目につくところを殴り続ける』と決める。

相手が普通の人間なら、確実に美しい河原でご先祖様に腕を引っ張られている幻覚を見せることができるほどの殺人コンボである。

頭、顔、首、肩、胸、腕、手、腹、腰、尻、腿、膝、脛、足をひたすら殴る殴る殴る殴る殴る殴る。殴り続けた。

「You win」

どこからか、サナエの勝ち名乗りをあげる声が聞こえた。それと同時にサナエは攻撃をやめた。

「うぬぬぬ」

さすがは人間を脅かす魔物だ。あのコンボと言う名のリンチをくらい意識がまだあった。どうやら今回は事切れる前にサナエの息が切れたようだ。

「おい、元おっさん」

「いいい、如何いたしましたか、サナエ様」

すっかりサナエに恐怖を抱いた魔物は人生で初めての尊敬語を使った。体は小刻みに震えチワワのようである。これで外見が可愛ければ某金融企業からCMのオファーがくるだろう。

「これぐらいで勘弁しといたるわ。ホンマやったらこの楽しみにしていたパンを奪われた怒りを再充電してもう一度さっきのコンボを決めるところやけど、それをやったら、元おっさんしゃべられへんようになつて聞きたいことが聞けなくなるからな」

「いいいいたい、なんでしょうか」

「・・・パンどこで売ってんの」

サナエの眼は中毒者のそれになっていた。

未完成のパン（後書き）

サナエが益々好戦的になってしまつて、本当に女？って書いていて思つてしまいます。この娘が女の子っぽくなることはあるのでしょうか。

髪が全部聖剣だったらハゲで悩まないのに(1)(前書き)

頑張りました。

学生で夏休みが多いので、最近はおっぱい本を読んで過ごします。そして、自分の文章力の無さに悲観しています。

髪が全部聖剣だったらハゲで悩まないのに(1)

「うむ。この先の街は、かの有名な聖剣の街だな」

道中の案内板を見てマルが言った。道に迷い、野垂れ死にする旅人が増えたことを機に、到る所に案内板は設置された。

「聖剣の街？なにそれ、いかにもファンタジーって感じ」

「なんでもな、この街には、はるか昔ドラゴンを退治したと言われる剣があるらしいんだ」

「ほおほお、どっかで見たことある設定やな」

サナエは昔やりこんだRPGを思い出した。

「そして、なぜだか知らんがその剣は地面に刺さっているそうだ」

「なんで？そんな強い剣やねんやから、ドラゴン倒した人持って帰つたらええのに」

「知らん。まあ、良くある話だが、その剣を抜いた者は選ばれし者として、名声を得るそうだ」

「選ばれし者やなかったら絶対に抜けへんの？」

「うむ。なんでも毎日何百人もの人間が挑戦しているらしいのだが、1人も抜いた者はいないそうだ」

「ほえー。抜くのが無理やったら、周りの土台を剣が刺さっている位置まで掘ってしまえば勝手に抜けるんじゃないの？」

「ずるがしこいやつだな。なんでも、剣が刺されている土台は、それはもう硬い物質らしくて剣よりも硬いらしい。なので、そんな作戦は出来ないらしいのだ」

「なんで、剣よりも硬いはずなのに刺さるん？」

「なんでってそりゃ、お前・・・そのあの・・・もういいじやんほつといてやれよ、きつと聖剣だから、なんか特別な力で刺さってんじやねえの。うんきつとそうだそうに違いない。いやそうにしておこう」

「ふーんっ。まあ、そう言うことにしといたろ」

何か腑に落ちないがサナエは無理やり納得して、歩きだした。

2人が歩いていると、進行方向に人と思われる物体が横たわっている。

「死んでいると思う？」

「分らん。おい、傍でしらべるコマンドをしろ。もしかしたら、へんじがない、ただのしかばねのようだと返ってくるかもしれないぞ」「いややつちゅうねん。どないすんねん。もし、いきなり襲いかかってきたって言うテロップやったら。サナエは完全に不意を突かれたって警告が出て、先制攻撃されて全滅で教会行きやわ」

「そうだな、先制されたなら回復魔法で、先制されなかったら補助魔法をかけるかな」

「安全第一の戦い方だな」

「所持金半分はかなりきつい罰だからな。たまに、金が足りなくて仲間を生き返らせることができなくて、つらい思いをすることになるからな」

「まあ、その場合、私は、確率50%の蘇生魔法を乱発するけどね」
無駄口をたたき、サナエ達が恐る恐る死体？の傍を通った時、死体がピクツと動いた。

「うわっ、生きてる」

「何で生きているほうに驚くんだよ。死んでいる方が怖いだろ。おい大丈夫か」

マルが元死体に近寄り、はなすコマンドを実行した。

「うっうっ、みっみず」

「うっわあ、どうしよっかなベタやけどやっておくべきかなあ。もう一生こういう機会はないやろうしなあ。よっしゃ。すべるかもしれないけど一丁やってみるか。ほい、ミミズ」

頭を抱え悩み抜いたサナエは、いつの間にか捕まえていたミミズを差し出した。誰もが一度はやってみたいボケであるが、やられた当人は死にかけているのにミミズなんか出されたらたまったもんじ

やない。なんとかして、目の前でミミズを差し出している奴を道連れにしようとかかしら画策をするだろう。

「悩んでいたことはそのことだったのか。よし、どっちがいいか選べ、俺に気持ちのこもっていない大爆笑をしてもらうか、憐憫の眼で見られるのが良いか」

「うーん。まだ心にダメージが少なそうな前者で」

「あっははははははは……どうだ」

口角だけを釣り上げた笑いをマルは見せた。眼は完璧に死んでい

「サンキュー。自責の念で一杯やわ」

「うっ、うっ、どっちでもええわ……ガクッ」

最後の力を振り絞り元死体はつつこみをいれ、気を失った。

「あつ忘れてた」

聖剣の街に着き、元死体を担いだマルとサナエは、元死体の希望により街で人気のレストランに入った。

「ぐあつがつつがつ、うつ・・・ゴクゴク、ぷはあー。ありがと
うございました。おかげで助かりました」

運ばれてくる料理を次々とその胃袋に収めていく元死体。よほど飢えていたようだ。彼の口にホースを装着すれば掃除機に見えるだろう。

「おおっ、すごい食べっぷりだな。よほど腹が減っていたんだな」

「はい、ありがとうございます。御2人が通りがかかっていないと私は死んでいるところでした。本当にありがとうございます」

「うむ、いいことをしたな。なっ」

「ムグムグ、ガツガツ、うんそうやな、ガツガツ、ゴクつ。お姉さん、このミートドリアとカルボナーラ、オムライス追加で」

フォークを二刀流で構え、あつという間に皿の上の料理を完食していくサナエの目の前には元死体の男よりも大量の空き皿が重ねられている。

「何故、彼女は空腹で死にかけていた私よりも食べているのですか。もしかしたら、彼女も私と同じような状態だったのですか？」

「いや、こいつは、2時間前に朝食3人前をペロッと平らげていたぞ。これが、この女のデフォなんだ」

「はあ、それなのにとてもスタイルがいいですね。まるでモデルのようですね」

「ガツガツ、そっそんな照れ、ムグムグ、ゴクツ、るなあ」

めったに起きない褒められると言うレアイベントよりも食欲を選ぶ健康優良児である。

「飲み込んでから、話せ。ところで、何故あんなところで行き倒れていたんだ」

たつぷりのミルクと砂糖の入られたコーヒー愛好家に殺されるようなくそ甘いコーヒーを食後においしそうに啜っているマルが質問した。

「実は、私は、ここから少し離れた街の武家一家の長男なんです。しかし、父が病に倒れ、兄が不祥事を起こし、すっかり私の家は名を落としてしまいました。そこで、この街の聖剣を抜けば、もう一度過去の栄華を取り戻せると思い、一念発起して、家を旅立つたわけなんです。しかし、道中、財布を落とし、そして、携帯していた食料も、狡猾な魔物に奪われてしまい。あそこで力尽きてしまったんです」

「踏んだり蹴ったりだな」

「ええ、どうも私は生来運が悪いようでして、小さい頃に集めていた希少切手も、祖母に全て使われて、また、婚約していた幼馴染も、私の家が落ちぶれると同時に婚約を解消して、別の名家の男と婚約するしと、私の人生ろくなことはありません」

「不憫な。よしわかった遠慮せずガンガン食べる。俺にできることはお前の食欲を満たすことだけだ」

「おう、ガツガツ、バクバク、ムシヤムシヤ、ゴクツ、任せて、この店のもん全部食べつくしたるわ」

「お前じゃねえよ」

店員にこれ以上食べられると本日のお店の経営が出来ないので、どうかその辺でご勘弁をお願いします。って言うか帰れ。と言われようやく3人は店を出た。

「うーん、腹6分目かなあ」

「最近どんどんお前は人間離れしていくな」

「照れるなあ」

「褒めてねえよ」

あんなに大量に食べたにもかかわらず、すでに消化しているようで、サナエのお腹はすっかりへこんでいた。

毎日マシガンのごとくしゃべり、小学生男子のように暴れまわることとは、かなりのエネルギーを使うようで、食べたものはサナエの体に肉として付かないらしい。食べても太らない体質のようで、ダイエツトに悩む女の敵である。

「さて、それじゃあ、キリヒトのお目当ての聖剣を見に行くか」

「えっいいんですか」

「おお、一度は有名な聖剣とやらを見てみたいしな。それに、キリヒトが行きたいと言っているんだし、うまいこと言ったら御家復興になるしな。そして、もし、俺が選ばれし者だったら、一気に有名になって、女の子にモテモテで、その女の子の中に俺の将来のお嫁さんがいるかもしれんしな」

「前者と後者本音はどっち？」

「0対10で後者」

自分の欲望に忠実なやつである。ちなみに、キリヒトとは元死体のことである。先ほどのレストランで自己紹介をしてもらったのだ。しかし、先ほどから思っていたのだが、なんなんだこの行列は「この街に入ってから、ずっと3人の視界の中には果ての知れない行列があった。並んでいるのは老若男女様々である。

「有名ラーメン屋の行列か、しかし、その割には時間帯も昼過ぎて

るしなあ」

行列に沿って歩いていると、ようやく最後尾に着いたようだ。最後尾に立っている男性がこちら聖剣の最後尾と書かれたプラカードを持っている。

「どうやら、聖剣の挑戦待ちの行列のようですね」

「・・・よし、帰るか」

「せやな」

2人は振り返り、今日の宿はどこにしようかと話しつつその場を去ろうとしていた。

「いやいや、せっかく来たんですから挑戦しようよ」

「ちやうねん、私は行列アレギーやねん。ほら、首が痒くて痒くて」

「ああ、おれもプラカード恐怖症なんだ。もうあの角度を見るだけでトラウマが」

適当な言い訳を見繕って何とかこの行列に並ぶことを避けようとしている。

「お願いします。1人で何時間も並べると思えないんです。どうか一緒にならんで話し相手になってください」

キリヒトは土下座を決めた。

「うおっ、そこまでされたら一緒に並ばないんが悪者みたいやん」

「分かった。分かったから、立ち上がってくれ」

さすがの2人もこの行為には折れ、長い長い行列に並ぶことにした。大人数が並びかなりの時間がかかると思われたが、ただ剣を引っ張るだけなので列はサクサクと進んで行った。日が沈む前に3人の順番が回ってきた。その間にサナエとマルの口論が幾度となく繰り返された。

聖剣は、確かに話通り地面に突き刺さっていた。剣の柄は金で作られ、その上に幾つもの種類の宝石で装飾されている。こんな剣実践で使えるのだろうか。すこし、手が汗で濡れれば簡単にすっぱ抜けそうだ。よく、こんな剣でドラゴンを倒したものだ。

「金持ちが遊びで作った剣としか思えんな」

「眩しすぎて目がチカチカするわ。大阪のおばちゃん喜ぶやろうなあ」

月と役割を交代しようと海の向こうに沈もうとしている太陽の光が、剣に装着されている宝石を輝かせる。その光の美しさから宝石が安物ではないことがわかる。

「よし、俺からいかせてもらおう」

台座に上がりマルは持ちづらい柄を握り締めた。

「よし、ふんぬぬぬぬぬぬぬうううううう」

力を込め、鼻の穴を広げ、鼻息を荒げるが聖剣はびくともしない。

「はあはあはあはあ、だめだ全然抜けん。くそっ、ハーレムがあああ」

「なんちゅう不純な動機や」

手に宝石の痕を残し、マルは抜くことをあきらめた。こんな中身の腐った人間が選ばれし者だったら、聖剣の目が腐っているところだったが、どうやらしつかりとした選別眼はあるようだ。

「はい、残念、交代。それじゃあ、次は私かなあ」

「いいんだよ、こんな使いづらい剣なんか、なんか、この剣掴んだら痛いんだよ。特にダイヤが。俺にはこの美しい刃を持つサンタフエがあるんだからな」

戦うことに特化した剣であるサンタフエをマルはいとおしくなでた。

「はいはい、負け惜しみ、負け惜しみ。はよどいて」

口を尖らせたマルとハイタッチをして、サナエは聖剣に向かった。「やっぱな思うんだやけどな、みんななっちゃいないわ。こんな持ちづらい柄を掴んでひっこ抜こうと思うんが間違いやねん。こういう時はやで、力を伝えやすいこの持ち方や、力やないねんここ、ここ」

頭を指さし、知恵で抜くのだと言うことを言ってサナエは腕まくりをした。そして、剣の柄をつかまずに、剣の前でしゃがみ込み、

両手で剣のつばをつかんだ。

「せえの・・・ふん、ぎぎぎぎ」

剣のつばを持ち上げるように腿の筋肉をフル稼働させる。しかし、まったく剣は動かない。この剣なら石の上にも300年はいることができるだろう。

「どうした、怪力女お前の力はその程度か、お前の取りえはその馬鹿力だけだろ・・・さっさとひっこ抜け、このゴリラ女」

「だがあれが、握力500キロじゃ。この野郎」

剣を離し、ゴリラ女はドシンドシンと足音を変え、マルに向かっていく。

「ちっ、怒りに任せて抜けるかと思ったが、まさか、その怒りの矛先がこの俺とはな、予想外だったぜ・・・ベイベー、ふぐあ」

一度ジャブのフェイントを入れ、それにつられたマルの隙をつき後ろに回ったサナエは、先ほどの剣をつかんだ時と同じ体制になりそのまま後ろに仰けぞり、変則式ジャーマンを決めた。

「だっ大丈夫ですか。ああ、頭をぶつけてしまっているじゃないですか、早く医者に連れていかないと」

初めて人が死ぬ様を見てしまったキリヒトはひどく動揺していた。しかし、それも無理はない、マルが地面に激突した瞬間10メートルがぶつかった衝撃音がしたのだから。

「大丈夫やって、見といてや。ほれマル、痛い痛いのとんでけー」

サナエは、地面に体をめり込ませたマルの横でしゃがみ、軽く手をかざした。そして、子どもの気を紛らわせる呪文を唱えた。

「そんなの効くか。たく、もう少しで重傷ものだぞ」

まるで何事もなかったかのようにマルは起き上がった。

「完全に重傷ものですよ。あんな音生まれて初めて聞きましたよ」

「うーん。どうやら、この女にやられすぎて回復力が強まったようだな」

「なんや、あんたも軽く人間離れしてるやん」

「俺は、好きでこんな体になったんじゃない」

「しゃあないな、責任取ったるか」

「それは、男のセリフだ」

完全に回復しているマルは、自分の容態よりも、サナエとの罵り合いに集中しているようだ。

「・・・大丈夫なようですな。それじゃあ、そろそろ私も」

「ああ、そうだったな。それが目的だったな」

「うん。次、マルにどんな技かけようか考えることに夢中になって完璧に忘れてたわ」

「できれば、俺はその思いついた技を完璧に忘れてほしいがな」

「次は、間接破壊系でいこかな」

「頼むから忘れてくれ」

この2人のコントに関わっていてもキリがないと感じたキリヒトは、何も言わずに聖剣に向かった。

その行動に気付いたのか2人はキリヒトの方に視線を向けた。

「がんばれよ。今まで不幸だったんだ。そろそろ、そのしわ寄せがきてもいいはずだ。それが今だ。お前なら抜ける」

その言葉に頷き、キリヒトは自分の掌を一度見つめ、剣の柄を握った。これから先の人生がかかった大事な一時だ。今キリヒトの心臓は普段の2倍で稼働していた。懸命に心臓が、過剰な血液を体中に循環させようとしている。それほどの血液が無いと緊張がピークになっているキリヒトの体を動かすことが出来ないのだろう。

「行きます。ふんっ」

キリヒトが剣を引つ張った瞬間。聖剣の刀身は光を放ち、辺りの人間の視力を奪った。

「なっなんや、この光は」

「まさか、キリヒトが選ばれし者」

光が収まりようやく全員に視力が戻ったとき、キリヒトの姿が見えた。

ドクンドクン

「サナエさん、マルさん」

ゴクッ

「ダメでした」

目の死んだ笑顔のキリヒトがいた。

髪が全部聖剣だったらハゲで悩まないのに(1)(後書き)

よく、ある選ばれし者しか抜けない伝説の剣を題材にしました。
それを自分ならどのように書くかと思って、考えながら書いています。

聖剣が抜けなくても勇者になれる(2) (前書き)

気がつけば前の更新から偉い日数経っていました。夏休みも終わり、相変わらず卒論と就活の日々です。感想、レビュー待ってます。

聖剣が抜けなくても勇者になれる(2)

「待て待て待て待て。こちら、台を蹴ろうとするな。なつとりあえず一回降りろってなあ、その物騒な輪っかに結ばれた木にかかっているロープを放せ」

「父さん母さん、そして、この街のみなさんさようなら」

聖剣が抜けず、これから先どうすることもできなくなり絶望してしまったキリヒトは、何故か常備していたロープを木に引っかけ、父親の生きている世界へ行こうとしていた。

「だあ、あかんで、ほら見て小さい子が見てるやろ。あんな子にこんな場面見せたら一生のトラウマになるから、せやから、一回やめよ。とりあえず人気のない所行こ」

キリヒトがGo to heavenしようとしている場所は聖剣からわずか5m離れた場所。この街唯一の観光名所である。当然人がたくさんいる。聖剣を抜きにきた勇者志望者、刊行に来ていた核家族、夢遊病でここまで歩いてきた聖剣中学3年のムルアカ君。

「死んだら、幼馴染と兄を恨み殺して見せます。御2人ともどうもありがとうございます。後日私の故郷に行ってみてください。兄と幼馴染が口にマグロを突き刺して死んでいるでしょう」

「だから、ちょっと待ってっ！」

キリヒトは自分の体を支えていた台座を蹴り飛ばした。ロープがキリヒトの首を重力の力を借り締めようとしていたが、間一髪サナエがキリヒトの体を抱き抱え、マルがサンタフェを抜き、くくりつけられているロープを切った。

「あつぶなかつたあ。あとちょっとでシャレならん状況になるところやったなあ。マグロが刺さってる死体なんてショッキングな物見たくないわ」

「・・・サンタフェの初めての獲物がロープとは・・・本当につまらん物を切った」

涙を流しマルはサントフェを鞘におさめた。悲しんでいるマルと同調して、サントフェが悲しそうに鈍く光った。

「頼む死なせてくれえ。もうだめだ。俺の人生終わりなんだ。頼む早く早く」

自殺を阻止され、混乱状態のキリヒトがサナエに抱かれながら暴れた。

「うおっ。こいつ舌嚙もうとしているぞ」

「なんやて、御覚悟を、そりゃ」

サナエ、手刀をキリヒトの首に食らわし気絶させた。

「よし、ここを離れるぞ」

「うすっ」

サナエが頭、マルが足を掲げその場を走り去って行った。

「全然、目覚ませへんな」

「手加減したのか」

「・・・てへっ」

「死んでるんじゃないか」

「んっ」

サナエが刑事さんこの右手が悪いんです。この右手が私の意志を聞かずに全力で、と取り調べを受けている犯人のコントを始めようとしていた時、首の後ろに青あざをつけたキリヒトが目を覚ました。

「よかった。生きとった。前科者にならんですんだ」

「うっうっ。なんか首が痛い」

「気のせい気のせい」

「・・・あっそう言えば私は首をつろうとしていたんだ」

「そうそう、ほんまに止めるの大変やったんやから」

「そうですか。大丈夫もう首をつろうとは思いません」

我に帰ったキリヒトから自殺願望はすっかり消えていた。剣が抜けなかったシヨックから来た一時的な錯乱だったようだ。

「そうかよかったよかった」

キリヒトのその言葉を聞いてほっとしたマルは何の気なしに窓の外を見た。

「ぬおっ」

窓の外を、1人の女性が歩いていた。女は手入れがされ背中まで伸びた黒髪、一般女性の平均を超えた大きさの胸、小動物のようなうるんだ瞳を持っていた。女の外見はマルの求める、守ってあげたくなるようなお姫様タイプであった。

「運命の女性だ」

マルはそう呟いた。

「へっ、今何て？」

マルのつぶやきは小さくよく聞き取れなかったサナエが聞き返した。
「運命の女性がいたんだよ。あとは任せたぞ。さらばだ」

「えっサラダバー？ちよっあんなにしてんねん」

サナエの聞き間違いボケを軽くスルーし、マルは3階にも関わらず窓に足をかけ飛び降りた。着地時は膝を曲げ、そのまま転がり自衛隊で採用されている五点着地で衝撃を分散させ、体へのダメージを減少させた。

「すげっ」

着地後、体をいったんほぐし、アキレス腱を伸ばし

「未来のお嫁様ああ！」

と叫びマルは女性に向かって走って行った。

「おーい、夕飯までには帰っておいでや」

「大丈夫なんですか？」

「んっ、うん、どうせ、半年間トラウマになるような罵詈雑言を言われて、泣きながら帰ってくるわ」

「その割には、顔怖いですよ」

「えっそんなことないよ」

サナエの意志とは違い、顔の筋肉は引きつっていた。

夕食が終わり、サナエはキリヒトとは別の部屋でお風呂の余韻に

浸っていた。

「ぶふー久しぶりのお風呂は気持ち良かったなあ」

体から湯気をたたせ、濡れた髪的水分を乱暴にタオルで拭き取っている。

「うわおおおおおおおい！」

宿中に響き渡る大声を上げ、息を切らせたマルがサナエのドアを開けた。何故か顔は紅く染まっていて、今までにないテンションである。

「うおっ、なんやねん。いきなり入ってくんな。もし私が着替え中やったらどうすんねん」

「安心しろ。今の俺にはそんなものは目に入らん、はつきり言ってお前の着替えなど今の俺にとっては、4つ葉を探している時の3つ葉のクローバー、そして、道端に落ちている片方だけの軍手だ」

「なんや、いきなり入ってきて、えらい失礼な事ほざくやんけ、この社会の底辺は。なんやねん、なんかあったんか？」

「おお、そうだそうだ。まず先にこれを言っておこう。すまんが、お前との旅はこの街で終りだ。短い間だったが楽しかったぞ」

突然、この物語の最終回を宣告するマル。いきなりの急展開で、打ち切り漫画のような終わり方になりそうである。

「ええっ、どういうことやねん。ラムダ警護団の仕事やねんやろ。」

ここで任務放棄したらクビやぞ。御給金もらえへんぞ、ニートやで。突然の告白に、サナエは動揺を隠せないようだ。

「まあ聞け。俺が未来のお嫁様を見つけたのは知っているよな」

「どうやら、窓から飛び降りた時のことを言っているようだ。」

「それでな、玉砕、粉碎覚悟でいつもどおり挑んだのだから」

「えらい後ろ向きな状態からの発進やな」

「当たり前だ。今までの経験から、どんな状況でもとにかく声をかけ続けねばならないことを学んだからな。なせば成る為さねばならぬ何事も」

「数打ちや当たるってこと？」

「ああ、皆から尊敬されラムダ警護団の銃身の曲がったマシンガンと呼ばれていたからな」

「もう、それただの悪口やろ」

「なにっ、そうだったのか。そう言えば、やつらがこのあだ名を呼ぶ時はいつも、ヘラヘラしていたな。よし、今から殺ってくる」

マルは、サンタフェを持ち、部屋を出ようとした。

「まあ、待てや。それより先に旅に付いてこられへん理由教えてや」

「ああ、そうだったな。まあ、その挑戦したお嬢様が見事に俺の実践では味方を殺す可能性の方が高いポンコツマシンガンの弾に当たってくれたのだ。お茶でもいかがと言ううとな。あら、お外の方は面白いのね、面識のない私をいきなりお茶に誘っていただけるなんて」

「へえ」

「しかも、そのお嬢様はこの街一番の名家の娘さんでな。結婚すれば玉の輿で一生遊んで暮らせるのだ。よって安月給重労働ブラック企業のラムダ警護団なぞどうでもいいのだ」

「へえ」

「だから、はつきり言ってお前と話している暇はない、俺は今から部屋に戻り、顔の手入れをして、3時間風呂に入り、ぐっすりと睡眠をとるのだ。それじゃあな」

マルは言いたいこと言って、呆然とするサナエを置いてさっさと部屋に戻って行った。

「………言いたいこと言って出てって行きやがった」

「これからどうするか考えた？」

「一度家に帰ろうと思います」

キリヒトと街を歩いているサナエがいた。聖剣が抜けず、自暴自棄になっていたキリヒトは、一度家に帰り進退を決めるとのことらしい。ちなみに、キリヒトが聖剣をつかんだ際に剣が発光したのは西日が宝石に反射したためである。

「そうかあ、つらいかもしれんけどがんばってな」

「はい、それよりも、サナエさんもこれから大変だと思えますけど、どうかくじけずに頑張ってくださいね。ところで、何故私たちはマルさんの後をつけているのですか？」

今、2人は、それじゃあ、新婚旅行前旅行に行ってくるよと言ってウキウキしながらアホ面で行ったマルの後をつけている。聖剣の前で歩を止めたマルは、手鏡を取り出し、身だしなみを整えた。「うわっ、普段ボサボサなのに、髪めっちゃピツチリしてるやん」マルの目につかないようにサナエとキリヒトは、聖剣の形を模した駄菓子で一財産を築いたお菓子屋の影に隠れた。駄菓子の甘い匂いが尾行をしている2人の鼻腔をくすぐる。

備考

これらは備考、鼻腔、尾行をかけた一世一代のダジャレである。

「あの、なぜ、つけているんですか」

「えっええ・・・そうそう、あいつがボロボロにされる無様な姿を見ようと思ったから。きつと私らが言われたら二度と立ち直れないような罵声を浴び去られ続けるんやで。こんなあいつを脅すのに使える武器を手に入れる機会はないからなあ。あつ」

服の埃をコロコロローラーで取っているマルの元に白いドレスを着たサナエと同じ年程の少女がやってきた。マルの話通り、いかにもお嬢様らしいオーラを出している。サナエとは対極の位置にいる人種だろう。そんな上品なお嬢様がチワワに本気で吠えられるマルに笑顔で話しかけたのだ。

「お待たせしてしまいましたか？」

「いえ、今来たところです」

「そうですかそれはよかった。男性の方と2人でお出かけするのが初めてですので、どのような格好がよいのか分からなくて迷ってしまいました。あの、この格好いかがでしょうか」

「完璧です」

グッと親指を立たせ、マルは泣いている。

「そうですか、よかったあ」

先ほどまでの緊張がほぐれたようで、お嬢様はふにやつと頬を緩め笑った。それが、益々マルのツボにはまったようで、敬礼をあさつての方向に向かって歩いている。

「さあさあ、それでは参りましょうぞ」

マルは上りに上がったテンションに身を任せお嬢様の腕を掴み、シヨッピング通りに向かって歩いて行つた。

「あつ、キリヒトさん行くで」

「はっはい」

サナエの鬼気迫るオーラに抵抗することもできず、キリヒトはこの尾行に付き合わされることになった。

買い物を終えた後、おしゃれなパスタ屋で昼食を終え、その後演劇を見た。そして今、知り合い以上恋人未満の2人は少し人気のない路地近くに居た。

どうやら、マルはここで人生の大成をかけた告白をするようだ。表情から緊張していることが伺える。なんせ右半分は笑顔で左半分がえらい男前だからだ。緊張の余り顔の筋肉の制御ができていないようだ。

「あああああ、あの」

どうやら声帯も制御できていないようだ。声をかける時は、呼吸と同じように難なくすることができなくせに愛を伝える時になると、まったくだめになるようだ。

「なんでしよう」

「あの、俺あなたの」

ゴミ箱に隠れていたサナエの体温が3度上がった。歯を食いしばり、今にも飛び出しそうになっている。

「あなたのことが、ぶほお」

ある程度の硬度を持った物質同士がぶつかり合う音が建物の壁を跳ね返り路地内に響き渡った。

「ふふふ、残念。そこまで」

角材を持った男がマルの脳天に角材を振り下ろしていた。どうや

ら先ほどの音は、男の持っている角材と使い道があまりなく無駄に硬いマルの頭の当たったときに発せられたもののようだ。どうやら、男の後ろにも4人いるようで、それぞれ武器を持っている。

「どなたですのあなた方は」

「お嬢様。おれたちはね誘拐犯なんですよ。あんたのお家のお金をいただきたいんですよ。あんまり手荒な真似はしたくないんで、おとなしくしてくださいねえ」

男がそういうとほかの面々がお嬢様を取り囲み今にも連れて行きそうになっている。

「いいやああ」

「おいおい、こりゃ、やばいんちゃうん。助けに行かないと」

サナエが飛び出そうとするのをキリヒトが制止した。

「女の人にそんな危ないことはさせられません。ここは私が行きます。おいその人間の屑ども、見たぞ。今すぐ警護団を呼んできてやる」

一気に飛び出しキリヒトはあたりに聞こえるようにあえて大声で叫んだ。

「おい」

それを阻止するべく、男たちがキリヒトに襲いかかる。人数の利があるが、ここは狭い路地一斉に襲いかかれる人数は良くても2人程。しかし、それでも向こうは武器を持っていてキリヒトにとってかなり不利な状況である。

「うおらあ」

振り下ろされた角材をよけることをせず、キリヒトは拳で角材をへし折る。そして、その男の喉を突き、500ポイントゲット。続けざまにへし折れた角材を奪い、投げた。怯んだ男たちに向いステップで近づく。的確に顎を狙い、フックを打ちこむ。脳を揺らし、また1人撃破。これで1000ポイント。残り3人。1人を掴み背負い投げ、投げる方向はもう1人へ5000ポイントゲット。背負い投げの巻き添えを食らった男を踏みつけ、10000ポイント。

「ぐぬ、おい、この女がどうなってもいいのか」

マルを殴った男がナイフを取り出し、お嬢様の首に当てている。

動揺する様子もなくキリヒトは左腕を目に映らない速さで動かした。

「うつ」

キリヒトの腕から放たれたのは先ほどの角材の破片。その破片が男の持つナイフを弾いたのだ。一瞬で間を詰め、キリヒトは男の両腕を押さえ込んでいた。

「私はね、これから先どうやって生きていこうか考えていたんですよ。家はもう潰れるだけで、まともな収入なんて望めないと思うんですよ。でもね、あなた方のように、か弱い女性を危険な目にあわせてお金を稼ごうなんて決して考えなかったですよ。一応人間としてのプライドがありますから」

状態を後ろに反らし、頭突きを喰らわせた。キリヒト0 ↓ 1機へワンナツプ。

そして、サナエが呼んできたラムダ警護団が駆けつけ誘拐犯5人は無事逮捕された。

「ふう。大丈夫ですか？」

「はい」

「キリヒトさん。めっちゃくちや強いやん」

「ええまあ、一応武家の人間ですから」

「それに比べてこのアホは。おい、生きてるか？」

サナエが蹴ると、アホは目を覚ました。

「うつうむ。なんとか、しかし頭が痛い。いったい何があったんだ。まさか、お前、嫉妬して俺にかかと落としをしたのではないだろうな」

「するか、そこのお嬢様を狙う悪漢たちにやられたんや」

「そうか、して、その悪漢たちは」

「キリヒトさんが始末した」

「そうか、はっそれよりお嬢様は？」

「無事無事」

「それは、よかった。では気を取りなおして。お嬢様」

「はい」

「おれあなたのことが一目見た時から好きでした。ぜひ俺と結婚を前提にお付き合いしてください」

サナエの表情が変わった。悲しそうで怒っているようなどこからやりきれない顔。マルは顔を伏せ、手を出しお嬢様の返事を待っている。

「ごめんなさい。私、今好きな方ができましたの。なのでマル様とはお付き合いできません」

「でいつ！？誰ですか」

「それは、その私を助けてくださった殿方です」

お嬢様が、マルの告白を聞き感動していたキリヒトに向いた。

「えっ私ですか？」

「はい、私の心はあなたに奪われてしまいました。ちなみに拒否権はありませんよ。これっ」

お嬢様が手を叩くとどこから屈強な男たちが数人現れた。

「その殿方を私のお家まで連れて行きなさい。私の将来の旦那様になる方です」

「「はっ」」

「えっいや、私はあのこれからお家を復興させなければならないのである」

「大丈夫です。私のお家の力を使えば簡単なことです。さあ連れて行きなさい」

屈強な男たちはあんなに強かったキリヒトを簡単に捕え、連れて行ってしまった。

「それでは、これからあの方の調教が待っていますので、ごきげんようマル様」

一度頭を下げ、お嬢様は去って行った。

「まあまあ、落ち込むなよ、マル」

「・・・うるさい。お前、笑いすぎだろ」

「ふふふ、へえ、だって、そりゃあんな面白いことがあったら」

「うるさいなあ。いいんだよ、もつといい女性を探してやるんだからな」

「さよか、でもさあ、あんなに強い男の人たちが隠れていたんやったら、誘拐犯倒してくれればよかったのにな」

「・・・本当だな」

「・・・もしかして、マルの試練やったのかも知れんな」

「俺が、彼女を守れたら婿として合格ってことか？」

「そう、だから、あれは全部仕込みやったとちゃうんかな」

「そうか」

「まあ、そのおかげでキリヒトさんがお家復興できてんやからOKとしよ」

「なんか、なあ。まるで俺が引き立て役みたいじゃないか」

「ええやんかそのおかげで、こうして旅が続けられるんやから」

「よくはないけどな。まあ、いい。仕方がないしばらく付き合ってやるよ」

「うん。それじゃあ、早く例のパン買いに行こ」

「そうだな」

旅が続けられるようになりサナエは笑っていた。

「町会長、聖剣、うまくいってますね。毎日すごいお客ですよ」

「ああ、しかし皆分らんものなんだな」

「ええ普通は分らないと思いますよ。まさか、土台と剣、合わせて1つの武器だって言うことなんか」

「そうだなあ。話によるとドラゴンの頭をあの硬い土台で殴り倒したらしいからな」

「もう聖剣じゃなくてハンマーですね」

「ああ、そうだな。なんでも鍛冶氏の嫌がらせで作った武器だったらしいからな。そりゃ置いていくよな」

聖剣が抜けなくても勇者になれる(2) (後書き)

読者の方の反応はどうか分かりませんが、実はこのオチ結構気に入っています。すいません自画自賛です。

まあ、これで一応キリヒトは幸せになると思います。

お怒りのマル様(1) (前書き)

この更新ペースを維持できればいいかと

今回は書き方を変えています。読みにくいかも知れないですけど
(元から文章下手で読みにくいか)寛大な心で読んでいただけたら
幸いです。

お怒りのマル様（１）

満天の星、真円の月、引き込まれそうな美しい夜空、歩けば気分良くなること間違いなしの状況で俺は１人イライラしていた。

このイライラの原因はあいつだ。あの女のせいだ。１ヶ月前に、俺の前に現れたあいつは、はぐれ召喚物らしい。そして、なし崩し的に俺は、あの女を元の世界に返すために旅に出なければならなくなってしまったのだ。

あいつ、一応名前があるのだが呼ぶのも癪なので、馬鹿女としておこう。その馬鹿女さえいなければ俺は、イリアリアで可愛い嫁さんと結婚してラブラブな新婚生活を送っていたはずなのに。まあ、今のは最高レベルの願望だが。

今、俺達が滞在している街は風俗店、いわゆる男の人が大好きなお店が名物となっている所である。だから、その中心街を歩いている俺はひっきりなしに声をかけ続けられている。金髪の化粧ばっちりの露出多めの服を着ているお姉様、黒髪を腰まで伸ばしたいかにも従順そうなメイド服を着た女の子、俺の母親といっても疑われなほどの年齢の婦人。この街はどんなニーズにも応えてくれる男の楽園だ。

普段の俺なら１人目の、気持ちいいマッサージするよー、と言ったチャイナ服の中華娘にノコノコ付いて行き。着いた部屋には強面のお兄さんが居て、軽い脅し文句を言われ、有り金全部奪われているところだが、今はどのようにしてあの怪力女をギャフンと言わせることができるのか考えていて、女どころではないのだ。まあ若干、いや滅茶苦茶、超絶、絶対に、ごっつい行きたいところなんだが、実際のところ、財布を持つてくるのを忘れたのだ。せつかく、風俗で有名な街に来たのに、本当に残念でならない。まあいいか、その分仕返しを考えることに集中できるってもんだ。

「すみません。1部屋しか空きがないんですが、よろしいでしょうか？」

宿に着き店主に言われた第一声だ。この街は、風俗店で1夜を過ごす客が多いので、宿がこの店1件しかないのだ。

「えー、じゃあマル、ほら」

いきなり馬鹿女は俺のリュックサックから寝袋を投げよこした。

言葉などいらぬ、この物体を見れば、馬鹿女が伝えたいことがよく分かる。まさに百聞は一見に如かずだ。

「おい、嫌に決まってるんだろ。寝袋で野宿なんて御免だ。」

「ちやうわ、外で寒そうにしている猫にその寝袋譲って、お前は人通りの多い通りで眠って、たくさんの人に踏まれてこいつてことや」

俺の想像をはるかに超えるものだった。やはり、言葉って重要だ。

「おい、馬鹿女、冗談はもういいだろう。店主によるとベッドは2つあるから、問題ないだろう。先行くぞ」

「あつちよつ」

馬鹿女が何か言おうとしたが、少し腹が立っていたので、さっさと荷物を持ち、部屋に向かった。

うん？何か足に違和感がある。疲れているからか？いや、どうやら、この街に来る前に襲ってきた狼から逃げた時に痛めたようだ。

しかし怖かった。あとちょっとで俺の息子が食いちぎられるところだった。

よし、嫌なことはさっさと寝て忘れろとするか。何事も寝ればスツキリするものだ。

シャワーを浴び、体が温まりホカホカしている。さあ、後はベッドに潜り寝るだけだ。なんて思っていたら、これだ。

「あのさ、新技考えたから試させて」

なんの前触れもなく死刑宣告だ。こいつは悪魔か。何で少し頬を染めてるんだよ。そんなかわい子ぶって言っても。

「絶対嫌だ」

「えー、大丈夫やって」

「嫌なもんは嫌なんだよ。もう疲れてるんだから寝かせてくれ」

「大丈夫、大丈夫」

「無理無理無理無理無理無理無理無理無理」

「10回も言わんでええやん。大丈夫すぐ終わるから」

「数えんなよ」

「ほら、もう諦めえや」

馬鹿女は俺の返事関係なしに無理矢理技をかけようとしてくる。

うつ伏せに眠る俺の上に乗っかり、足を掴んできた。

まずい、どうやら足の関節を破壊する技のようだ。これは、後々ダメージを残す技だ。ここで、痛みによる恐怖よりも、無理矢理俺に後遺症が残るであろう技をかけようとしているこの馬鹿女に対する怒りが湧いてきた。一度怒りが湧くと、今までのこいつにされた地獄の仕打ちが頭に浮かんでくる。フライングメイヤーからのギロチンドロップ。水面蹴りからのストンピングの嵐。

まあ、大体俺が悪口を言ったことが原因なのだが。それでも、何度も三途の川に行かされるほどのものでもないはずだ。なんで、悪口だけで三途の川行きの定期券を買わなきゃならんのだ。

いかん、初めてだ。今まで我慢していたものが噴き出してくる。

「もう嫌だ！やめる触るな」

鍛え上げられた背筋を稼働させ、上に乗っていた馬鹿女を吹き飛ばす。俺の突然の行動に驚いたようで啞然とした顔をしているが、そんなもん関係ない。

「お前がやると碌なことにならないんだよ。自分の怪力を自覚しろ。さんざん我慢してきたがもう限界だ。いいか、俺は技を練習するための人形じゃない、お前のストレス発散の道具でもないんだよ。もうたくさんだ。お前の言う通り、外で寝てきてやるよ。じゃあな」

思いつく限りの思いの丈を叫び、そして、俺は1秒も一緒に居たくない女が居る部屋から男を喜ばす女がいる街に出た。

お怒りのマル様（１）（後書き）

さあ、あえてマルの内面を描いてみました。マルが一体どんな風にサナエのことを見ているのか、分かるようにしています。こうやって見ると、この２人結構仲悪いのか？

ツンデレな2人(2) (前書き)

なんやかんやで13話目です。

ようやく、ほんの、少しだけ話が進展しました。

ツンデレな2人(2)

そして、今俺は街を歩いているのだ。

どうすれば、あの女に復讐できるだろうか。

まずは、そうだな。正攻法で、真正面から挑んでみるか。だめだ、マウントをとられボコボコにされている絵しか浮かばん。却下。

あいつが寝ている隙に襲いかかる。そう言えば、過去にあいつが寝ぼけて暴れまわっていたな。またあの五連突きされるのか。だめだ。却下。

そうだな、あいつに力で挑むのは無理だ。どんな作戦を考えても武力では勝てる気がしない。

どうするどうするどうするどうする。普段爆睡しているんだから、たまには全力で動け我が脳。

「お兄さん。いい薬あるよ」

どこに脳を動かすレバーがあるのか探していると路地から声がした。見てみると、いかにも怪しい格好をした、胡散臭い魔女のような格好をした老婆がいた。

「なんだ、ばあさん俺は現役だぞ。薬など借りなくても、いつでも90度だ」

「へえへえへえ、お兄さん、90度だと使い物にならんでしょ。あたしの薬はそう言った手助けする物じゃないんだよ」

「うむ、ではどういった物だ。透明になる薬かそれともホレ薬か？」

「どれも外れじゃ。ホレ薬は惜しいかのう。あたしが売っているのは自白剤よ」

老婆が懷から透明なパツと見、水のような液体が入った瓶を取り出した。

「自白剤？」

「ふむ。この薬を飲んだ者は、1時間の飲ませた者の質問になんでも答えるのじゃ。しかも、薬の効果が効いていた間の記憶が一切

無いのじゃ。本人からしたら1時間眠っていた気分になるのじゃ」

「なんと、便利な薬だ」

こんなに、デメリットのない薬があるだろうか。これさえあれば、この世から拷問と言うものがなくなるのではないか。

「どうじゃ、買わんか？」

「買うに決まってるだろ」

ポケットにあつた小銭で事足りたので助かった。こんな良い薬がジュース1本分なんて老婆は生計が成り立つのだろうか。

さてこの手に入れた素晴らしい薬をどう使おう。

手に入れたのは良いが用途が思いつかない。

そうだ。あの馬鹿女に飲ませて、秘密を手に入れて、それをネタに主従関係を作ってやる。

早くこの薬を試してみたくて仕方ない。まるで、おもちゃ屋帰りの子供の気分だ。

「人間の屑マルグロリア、只今帰還しました」

鬼になっているであろう馬鹿女の部屋に恐る恐る帰った。予想通り部屋の中は鬼気で満ちていた。首筋に刃物を当てられているようだ。

「なんやねん。1秒も一緒にいたくなかったんちゃうんかい」

「いやあの、勢いで出たのは良いんですが、お金も寝る場所も無くて、すいませんがここで一夜を過ごさせてもらってもよろしいでしょうか」

ペコペコするのもこの時間限りだ。あと1時間もすれば、関係は逆になっているからな。楽しみで仕方がない。

「ふんっ、まあええわ」

馬鹿女は一度鼻を鳴らすと、俺に背を向け布団にもぐった。

「あの、それですね。ジュース買ってきたんですが。いかがですか？」

今ここで寝てもらっちゃ困る。この自白剤入りのジュースを飲ん

でもらわなくちゃな。

「えー、果汁100%やんか。私30%が好きなのに」

「まあ、そう言わずどうぞ。なんでもこの街の特産品らしいですよ」
嘘である。超大手の企業の稼ぎ頭の全国で広く売られているジュースである。今まで、旅して分かったのだが、この女は街々の名産品や特産品を口にするのが好きらしいのだ。そして、案の定このジュースを特産品と言うと

「ほんまに、こりゃ舌にブツブツできるの我慢してでも飲むしかないな」

見事に食いついた。どうやら、たんぱく質分解酵素に弱いらしい。
「そうですね。是非どうぞ」

自白剤入りとも知らず、馬鹿女は馬鹿な表情で馬鹿みたいに自白剤入りオレンジジュースを一気飲みした。

「すつぷあ、やつぱ100%はきつついわ、すつぱすぎ・・・んっ」

馬鹿女は、ジュースの感想を言った後、急に静かになった。先ほどまでと違い目が濁っている。どうやら、薬が効いているようだ。

「よし・・・試しに、お前の名前は？」

俺の言葉に反応し、馬鹿女は口を開いた。

「水本 サナエ」

どうやら、薬は効いているようだ。よし、それじゃあ、この1時間たっぷりと質問させていただくか。

「・・・8歳のころの夏休み」

馬鹿女は、最後におねしょをした歳を話した。この薬は本当にすごいものだ。ただこちらの質問に機械的に答えるのではない。例えば、恥ずかしいことなら、恥じらいながら答えたり、悲しいことなら少し俯き答える。

なかなか、面白い薬である。

さて、今まで、最後におねしょをした年齢、ここ最近恥を聞いたこと、最近悲しかったこと、誰にも言えない趣味などを聞いたのだ

が、いかんせんこいつを脅す道具にはならない。

どうするかなあ。

質問が思いつくまでどうするか。薬を飲まず前に質問をもっと考えておくべきだった。

そうだ。思いつくまで、今日のことを聞いてみるか。表面的には許してくれたような感じだが、本心はどう思っているのだろうか。

「今日、俺がお前にキレた時、どう感じた？」

「人の好意を踏みにじりやがって、帰って来てたら殺人プロレス技のフルコースを味あわせてやる」

本当にこの薬があつてよかった。もし、ジュースに薬を入れていなかったら、今頃俺の四肢の関節はすべて逆に曲がっていたことだろう。

しかし、1つ疑問が残る。人の好意とはなんだ。あの時こいつが俺にしようとしたことは、足に対する新技のはずだ。もし、それが好意と言うのなら、こいつは根っからの鬼畜だ。

「人の好意とは一体何だ？」

俺が質問すると、馬鹿女は俯き、頬を赤らめ、ゆっくりと答え始めた。

「あの・・・マルが狼に襲われた時に、足痛めていたみたいやから、その、新技をかけるって言うていで、足のマッサージをしてあげようと思って」

おいおいおいおい、ここでいきなりのツンデレかよ。ちょっとそんな心の準備していなかったから、なんかキュンキュンするじゃないか。

口は悪いが実は、とても素直な良い子って言う設定ができていないか。いかん、落ち着け、もしかしたら気の迷いかも、知れんしな。

なんせ、こいつは俺のことを嫌っているんだからな。ここで、この胸のキュンキュンをなくすために

「お前はマルグロリアのことをどう思っている」

どうだ。どう返してくる。

「・・・マルグロリア、誰？」

なるほど、この返しは予想外だ。

「だから、俺だよマルグロリア」

「知らん」

「・・・マルのことはどう思っている？」

「えっと」

マルなら反応するんかい。

馬鹿女は、俯き話し始めた。

「マルは、女たらし、口だけの男、剣を持たなければただの雑魚、ビビリ、しゃべり方がいちいちうざい、たまに期待通りのツッコミをしてくれない、手軽に技をかけることのできる人物、考え方が人間の屑」

うん。思った通りだ。あれっ目に涙が。違う、これは悲しくって泣いたんじゃないからね。オレンジジュースの酸味が目に染みただけなんだから。このキツイ答えは予想通りなんだから。

しかし、ここで墓穴を掘ったことを感じた。こんな答えを聞いて果たして俺は笑顔でこいつと旅をすることができののだろうか。たとえ、こいつが表面で俺と仲良しを繕っても、内心俺のことを嫌っていることを嫌っていることを知っている。絶対に今までのように、遠慮なしに付き合うことは難しい気がする。

どうしよう。今後気まずくて仕方ない。そうだ、逃げよう、もういいだろう。こいつも余所余所しく接してくる奴と旅するよりも1人のほうがいいだろう。

荷物を整理しようと思いい立ち上がった時。

「・・・こんなに悪いところが多くて碌でもない奴やけど・・・嫌いじゃないかな」

馬鹿女は紅葉のような色をした頬を少し釣り上げ、はにかんだ。

「んっ。うーん、寝ちゃってたか」

馬鹿女は、ベッドから起き上がり背筋を伸ばした。ばあさんの言った通り1時間経つと薬の効能が切れ、眠っていたと錯覚しているようだ。

「おはよう」

「んっ、ああ、どれくらい寝てた？」

「1時間くらい。あのさ」

「なに？」

「お願いがあるんだけどさ」

「なんやねん、はよ言いや」

俺はベッドにうつ伏せに寝転がった。

「新技をかけてもらっていいかな。サナエ」

サナエは、笑顔になった。母親に褒められて嬉しくなった子供のような無邪気な屈託のない笑顔だ。

「初めて私の名前呼んだやんか、もう、なんやねんお前ツンデレか、気色悪いな」

ツンデレはお前だ。

「しゃあないなあ、やったるわ。ほら力抜きや」

サナエは俺に跨り、足を掴み、揉みほぐし始めた。

「なあ、サナエ」

「なんやねん。呼ばれ慣れてないからなんかこしょばいな」

「俺の足を握る力強すぎないか」

ボキッと心地よい快音を鳴らし、サナエの怪力を込められた右手は俺の足を握りつぶした。少しでもこの馬鹿女を信用した俺が馬鹿だった。

ツンデレな2人(2) (後書き)

連載して結構経ちますが、この話で初めてマルがサナエのことを名前で呼びます。少なくとも2人が嫌い同士ではないと言うことが確定しました。以降、もうちょっと仲が良い描写をしたいと思います。

ガチャパン（1）（前書き）

次の話の前フリです。

ガチャパン（１）

「ぬはー、これこれ、この味。これを私の舌は待っている」

遂に辿りついたパンの街。その街は、ごくごく普通の特に変わったところがない街。１つ変わったところと言えば、一軒のパン屋に行列があるくらい。その行列に並び、サナエはようやく、お目当てのパンを食べることができた。

「これで買えるだけのパン頂戴」

今自分が持っているお小遣い全てで買えるだけのパンを買い、サナエは貪り食っていった。プレーン味以外にもチョコ味、抹茶味があるため、その味の違いがますます、サナエの無限とも言える食欲を増進させた。

「ぬはー、まただ。これで６個目だ。いったいどうなっているんだ、絶対この呆れ顔の羽根人間ベムラリオンがこの中の８割を占めているだろ。もうベムラリオンはいらないんだよ。頼むから、洗いたてのＴシャツの匂い星人でてくれよ」

子どもに大人気のヒーロー漫画『あれ、正義の味方が変身とか名乗り上げている時って隙だらけじゃね？』略して、『あれ隙』のガチャポンの前でマルは、おもちゃ業界のあくどい商法に怒っていた。あれ隙は２ヶ月のペースで主人公の悪たれ小僧マサヒロのコスチュームと敵組織が変わるため、すぐにグッズが新しくなるのだ。よって男の子を持つ家庭から良く苦情がくるらしい。

「まだまだ、これからだ。とりあえず、おばちゃんこれ崩して」
マルは財布から札を出し、両替を求めた。

自由行動も終わり２人は集合場所に集まった。

サナエは両手に大量のパンが入った紙袋を、マルは洗いたてのＴシャツの匂い星人以外がそろったフィギュアが入った袋を持っている

た。ちなみに、ベムラリオンは21個入っている。これほどの数のベムラリオンがいれば、悪たれ小僧マサヒロもかなわないだろう。

「うっはあ」

2人が2人とも相手の持つている袋の膨らみ具合を見て引いた。これがオタクっていう人種か。私こんなやつと旅してたんかあとサナエ。

こいつ、食い過ぎで死ぬつもりか、まあ、死んでくれた方がこの旅が終わるからありがたいけどとマル。

「なにそれ？その量。てか、このいかにも体に悪そうなことしてる人形はなんや？」

袋から、シーチキンの油を飲む怪人ジャンクフーダーが顔を出して憐憫の眼差しをサナエに送っている。

「見て分らんか、あれ隙のガチャポンフィギュアだ」

「何個こうたん？」

「30個先からは覚えていない。それよりもお前、それはなんだ」「パン」

「分かっている。なんだその量はと言っただ」

紙袋から、カメパンがマルを見つめている。

「こんなん、夕飯前のおやつや」

小学生1クラス分のパンをおやつと言うのだから恐ろしい。

「たくっ、無駄遣いしやがって」

「お前もやる。これ何に使うねん。私のは食べられるけど、お前の食べても栄養にならんやろ」

サナエは巨乳のオカンプリンプリンを袋から取り出しまじまじと見つめた。

「バカ野郎。見つめることによって目の栄養になるんだよ。とくにそのプリンプリンは激レアなんだぞ」

「女にはわからん世界やわ。こんなフィクション！」

サナエの手の中でプリンプリンが砕けた。

「うおーい！！」

ガチャパン（1）（後書き）

僕も、収集癖があるのでマルの気持ちがよく分かります。

ご利用は計画的に（2）（前書き）

継続させるために小出しで投稿することにしました。

これも続かなくなったら一体どれくらい間が空くのだろうか。

ストーリー評価と文章評価を受けて、読者の方がちゃんといてる
ことが再認識できて、やる気のエンジンがかかっています。

なんとかこれを維持していきたいです。

「利用は計画的に（２）」

背中に収まるほどの大きさのリュックサック。この中にマルの荷物が全部入っている。

着替え、日用品、携帯食糧、医療品各種、多種多様な武器暗器等が入っている。もちろん、あれ隙のフィギュアも入っている。リュックサックの容積に比べはるかに中身の方が大きいのだが、なぜか全てきれいにおさまっている。そのため、陰ではサナエの胃袋と呼ばれている。

「うーむ。重い」

リュックサックを背負い直し、マルがつぶやく。

「ほんなら、いらんもん捨てえな。例えば、さっき買ったフィギュアとか」

「絶対嫌だ。これを捨てるのなら、俺はサントファエを捨てるのを選ぶ」

「騎士の魂、安つ。なら頑張つて運び」

「うむ。早く宿に言つてこの荷物を置いて、ゆっくりしたいものだ」
「今日はどこで泊るん？」

「この街はラムダ警護団が関わっていないから今から探す」

ラムダ警護団も万能ではない。この街のように配備が間に合わない所も多々ある。

「じゃあ、団員割引はきかへんねな」

「そうだな。やれやれ、金がかかる・・・あつ」

財布を取り出し、マルがしまったと言った顔をした。

「どうしたん？舌出してもかわかないで」

「・・・金がない。はっ、そうか。あれ隙のフィギュアを買ったからか、うーむ、さすがあれ隙、気が付いたら財布の中身が空っぽになっっているとは恐れ入る。そう言えば、お前にも金を渡していたよ

な」

名案を閃いたと思ったマルだったが、サナエが両手に抱える大量のパンが目に入った。

「あっはははは、そのお金は全部・・・これ」

パンをマルの方に差し出した。作られて大分時間が経つのだが、それでもパンはその香りを失ってはいなかった。食欲をそそる香りに誘われ、マルは1つパンを取りかぶりついた。

「もぐもぐくっ、うんまあ・・・、なあーにい！？どうすんだよ。俺達無一文ってことだぞ」

「切羽詰まってる割にはしっかり噛んでしっかり感想言ってるやん。大丈夫やろ、また、お給金もらいに行けば」

2人の旅の資金は全てラムダ警護団が賄っているのだ。マルの給料と、特別手当を含んだ金額を与えられている。よって、2人は街に着くと最初に役所に行き、その後給料をもらいに行くといった行動をとる。

「馬鹿。さっき言っただろ。ここはラムダが関わっていないって。だから、金をもらいに行くことはできないんだよ」

「とすると・・・まずいことになってるんちゃうん？」

「ああ、とんでもなく、まずいことになっている。この街の周辺でラムダが関係しているのは、歩いて1日かかる街だけだ」

空では夕日が2人を力強く照らしている。今にも夕日は沈もうとしている。

「もう日も暮れそうやのに、どうすんの、この街に来るのに結構無茶してきたから、もうくたくたやで」

この街は人間を食らう獣や山賊がうようよしている森に囲まれていた。2人は山賊を3度しばき回し、今後、山賊活動をさせないため、正座をさせ、小1時間説教をおこなったため、かなりの疲労を感じていた。

よって、体はくたくた。今すぐ風呂に入り、布団にもぐりたかった。

「・・・金を作るしかないだろう。俺だつてくたくただ。野宿なんかごめんだ。熱いシャワーを浴びてふかふかのベッドで眠りたい」
こうして、2人は今日の情眠のために金を作ることにした。

背中に収まるほどの大きさのリュックサック。この中にマルの荷物が全部入っている。

着替え、日用品、携帯食糧、医療品各種、多種多様な武器暗器等が入っている。もちろん、あれ隙のフィギュアも入っている。リュックサックの容積に比べはるかに中身の方が大きいのだが、なぜか全てきれいにおさまっている。そのため、陰ではサナエの胃袋と呼ばれている。

「うーむ。重い」

リュックサックを背負い直し、マルがつぶやく。

「ほんなら、いらんもん捨てえな。例えば、さっき買ったフィギュアとか」

「絶対嫌だ。これを捨てるのなら、俺はサントフェを捨てるのを選ぶ」

「騎士の魂、安つ。なら頑張つて運び」

「うむ。早く宿に言つてこの荷物を置いて、ゆっくりしたいものだ」
「今日はどこで泊るん？」

「この街はラムダ警護団が関わっていないから今から探す」

ラムダ警護団も万能ではない。この街のように配備が間に合わない所も多々ある。

「じゃあ、団員割引はきかへんねな」

「そうだな。やれやれ、金がかかる・・・あつ」

財布を取り出し、マルがしまったと言った顔をした。

「どうしたん？舌出してもかわいくないで」

「・・・金がない。はっ、そうか。あれ隙のフィギュアを買ったからか、うーむ、さすがあれ隙、気が付いたら財布の中身が空っぽになつているとは恐れ入る。そう言えば、お前にも金を渡していたよ

な」

名案を閃いたと思ったマルだったが、サナエが両手に抱える大量のパンが目に入った。

「あっはははは、そのお金は全部・・・これ」

パンをマルの方に差し出した。作られて大分時間が経つのだが、それでもパンはその香りを失ってはいなかった。食欲をそそる香りに誘われ、マルは1つパンを取りかぶりついた。

「もぐもぐくっ、うんまあ・・・、なあーにい！？どうすんだよ。俺達無一文ってことだぞ」

「切羽詰まってる割にはしっかり噛んでしっかり感想言ってるやん。大丈夫やろ、また、お給金もらいに行けば」

2人の旅の資金は全てラムダ警護団が賄っているのだ。マルの給料と、特別手当を含んだ金額を与えられている。よって、2人は街に着くと最初に役所に行き、その後給料をもらいに行くといった行動をとる。

「馬鹿。さっき言っただろ。ここはラムダが関わっていないって。だから、金をもらいに行くことはできないんだよ」

「とすると・・・まずいことになってるんちゃうん？」

「ああ、とんでもなく、まずいことになっている。この街の周辺でラムダが関係しているのは、歩いて1日かかる街だけだ」

空では夕日が2人を力強く照らしている。今にも夕日は沈もうとしている。

「もう日も暮れそうやのに、どうすんの、この街に来るのに結構無茶してきたから、もうくたくたやで」

この街は人間を食らう獣や山賊がうようよしている森に囲まれていた。2人は山賊を3度しばき回し、今後、山賊活動をさせないため、正座をさせ、小1時間説教をおこなったため、かなりの疲労を感じていた。

よって、体はくたくた。今すぐ風呂に入り、布団にもぐりたかった。

「・・・金を作るしかないだろう。俺だつてくたくただ。野宿なんかごめんだ。熱いシャワーを浴びてふかふかのベッドで眠りたい」
こうして、2人は本日の快樂のために金を作ることにした。

ご利用は計画的に(2)(後書き)

今週中には続きを

趣味は金に換えるといくらになるのか(3)(前書き)

前に1週間以内に続編を出すと豪語したのですが、ごらんのとおり無理でした。すみません。
てか、誰も待っていないか

趣味は金に換えるといくらになるのか(3)

「だめだめ、たった3時間とか雇えるわけないでしょ。ほらっ仕事の邪魔だからどっか行つてよ」

新鮮な無農薬野菜を提供することをモットーとしている、ウルチ野菜店の雇われ店長は、今日1日閉店まで雇えと言ってくる、怪しい旅人の申し出を断った。

「むーやっぱ、無理かあ。これで8件目やなあ」

超ド短期バイトを断られたサナエは、途方に暮れていた。今日の宿代だけでも稼ごうと奔走しているのだが、やはり思い通りにはいかなかった。

「マルはどうしてんかなあ。このままやったらほんまに野宿やわ」
薄月が浮かぶ空をサナエは見上げた。

サナエとは別行動をしていたマルはリュックサックを探っていた。どうやら、売れそうな物を探しているようだ。

「うーむ、改めて見てみると、碌な物が入つとらんな。なんで俺は、便座カバーや分度器なぞ入れとるんだ」

リュックサックの中の8割が旅に不必要なものであったことが判明し、その中から売れそうな物を見つくり、この街一番のデイスカウントショップへと足を運んだ。

「うーん。そうですねえ、これらの品全部合わせても」

店員の手から、現在発行されている硬貨の中で下から2番目の価値しかない硬貨が、チャリンとカウンターのの上に置かれた。

「うえ?!」

確かにいらぬ物であるが、総重量35キロもある数々の物品が、たったの小銭1枚と査定されたのだ。マルの驚きは計り知れない。

「なんで?」

「だって、基本的に全て開封されている物だし、なぜか全て少し汚

れているし、便座カバーに至っては、茶色い物が付いているので。そうですね、そちらのリュックの中に見えるあれ隙のフィギュアですか？今ちようどその買い取りを行っているのですが、よかつたらどうでしょう？」

「うーむ、よし、背に腹は代えられんよろしく頼む」

マルはリュックの中にある、あれ隙フィギュアを全てカウンターの上に出した。

まず、店員が起こした行動はカウンターの上有るフィギュアの半分を占めるベムラリオンを全て端っこに寄せた。店の張り紙にベムラリオンはもういりませんと書かれていた。そして、残ったフィギュアを査定し始めて行った。

「どう？」

「そうですねえ」

店員は少し考え、レジから札の一番貨幣価値の低い、大物海賊を退治した偉人が書かれているお札を出した。

「なんで？」

「いや、だって、ほとんどノーマルだし。それに唯一のレア物のプリンも大破しているし。むしろ出した方だと思いますよ」

「うーむ。背に腹は代えられん。分かつたこれで手を打とう」

「はい、毎度」

苦楽を共にしてきた愛剣サントフェよりも大事な物と豪語したコレクションを、はした金に交換したマルは肩を落とし、店の出口に向かった。店頭に張られている只今絵画買い取り中強化中と言う張り紙を目にして

マルを見送った店員は、買い取ったフィギュアの中からいくつか取り出し、それらに買い取り額よりはるかに高い値段が書かれたタグを取り付けた。

日が沈みあたりはすっかり黒に染まっている。人工の明かりを出す街灯が辺りを照らしている。その街灯の下、金集めのために走り

回った2人がいた。

「どうやった？」

「んっ」

マルは1枚の紙幣と貨幣を差し出した。

「お前は？」

「んっ」

サナエはポケットを探り、火種には最適のポケットの中のごみを取り出した。

「稼げなかったら無理してなんか出さなくてもいいぞ。役立たず」

2人の手元にあるのは夕食代くらい、もちろん宿に泊まれるわけがない。

「むー、困ったなあ。元の世界のお金やったら少しあるのになあ」

サナエは財布を取り出し、元いた世界の紙幣を取り出した。高校生なので、さほど額は入っていないく、紙幣が3枚ほど入っているだけであった。

「・・・っ!？」

サナエの取り出した紙幣を見て、マルは何かひらめいた表情をした。

「そうだ、おい、サナエそれ、1枚くれ」

「はっ!？」

サナエの返事を聞かず、マルは紙幣を1枚奪い取り、先ほどの店へと走った。

店に入り、マルは勢いよく店員に紙幣を見せた。途中に自分が売ったフィギュアが高値で売られているのを目にしたが、今はそれどころではないと自分に言い聞かしレジまで来たのだ。

「どうだ。確か、今絵画を買い取っているんだろ？見てみるこれを、この絵画を、両面に絵が描かれているんだぞ」

この世界の紙幣と同じサイズなのだが、とにかくクオリティがまったく違った。サナエの世界の紙幣は機械で大量に製造されるのに

対して、この国の紙幣は違った。この国では国選印刷師と呼ばれる人間が、監視の元、版画を使い1枚1枚作っていくのだ。そのため、同一の出来の紙幣はなく、歪んだり、滲んだりしている。

なので、サナエの世界の紙幣を見て、紙幣とは思わないのである。「こっこれは、すごい。ぜっ是非買い取らせてください」

店員は、レジからありったけの紙幣を出した。それはかなりの額で、この街の高級ホテルで連泊できるほどの金額であった。

「売った」

即決で売買契約は成り立った。

大金を手にホクホクしながら、マルは店を出た。

「よしよし、これで、一丁豪華なホテルで一泊するか、はっそう言えばサナエに了承取らずに来てしまったが、まあ、この大金を見せれば大丈夫か」

サナエに怒られることを心配しながらマルはおそらくサナエが待つであろう先ほどの集合場所に向かった。

マルが店を出たあと、店員は通信機器を取り出し、どこかに電話をかけた。

「もしもし、あの素晴らしい絵画が手に入ったのですが、いかがでしょうか・・・あっそうですか、ではその額でお取り置きしておきます」

マルに払った金額に0をあと2つつけた額でサナエの世界では最低金額の紙幣が売れた。

趣味は金に換えるといくらになるのか(3)(後書き)

どうもネタが思いつかないです。

究極の2択（前書き）

思いついたのでエンジンがかかっている今書きました。

究極の2択

雲1つない青天の空の下、私の心は曇っていた。

私の住むこの街は、1人の独裁者に支配されていた。

その独裁者は、大変凄惨で残虐で惨たらしい性格をしていて、少しでも気に食わない者が居れば、すぐにその一族郎党全員処刑する男であった。しかもただ、殺すわけではなかった。ある一族は、徐々に温度の上がる鉄板の上でゆっくりと焼き殺された。またある一族は、1時間に1本ずつ剣を刺され殺された。こんな状況なら革命が起ってもおかしくないのだが、独裁者は強力な軍隊と我々から巻き上げた大金を持っていて、幾度となく革命は阻止されてきた。子供は教育で独裁者が神であり、全てであると刷り込まされ、従順な兵士として育てられている。また大人も何度も革命の失敗ですつかりと意欲をなくしてしまっていた。

そんなこんなで、この街は地獄と化している。

私は、独裁者の側近で、10年間仕事の手伝いをしてきた。その間、何度も気に食わないと言う理由で殺された同僚を見てきた。いつ予先が私に向けられるのか不安だった10年間であつた。なんとか独裁者の目に留まらないように生きてきたのだが、ついにその日がやってきてしまった。

独裁者が提案した増税に意見をしたのがいけなかった。しかし、これ以上増税をしても民衆は払うことはできない。もう今がギリギリなのである。だから、私は意見したのだ。

私の意見が癪に障り、凶悪な予先は私に向けられた。

「お前は、私のそばで10年間働いてきた。そこでチャンスをやろう。ここに毒を塗ったナイフがある。少しでも傷つけばあつという間に命を奪う毒だ。お前には両親がいただろう。父と母どちらか1

人を殺してこい。さすれば、お前を助けてやろう。期限は3日。できなければ、3人とも殺す。あとそうだな、証拠として殺したほうの首を持ってこい。ちなみに逃げようとしても無駄だからな。お前の両親に監視をつけておくからな」

と言う、まるで、うんこ味のカレーとカレー味のうんこどちらを食べるといった究極の選択を与えられたのだ。

両親にこのことを話すと、双方共が、自分が犠牲になると言うのだ。本当に泣かせる家族愛である。

しかし、そんなことを言われると益々決めることが難しく、気がつけば約束の期限が迫っていた。

あと1時間。私はどうすることもできないでいた。

そんな時であった。視界の端に2人組が通った。

「あのっ」

私が声をかけると、2人組が振り返った。急に声を出したので声が裏返り本当に聞こえたのか少し不安であった。

1人は、茶髪のショートカットの女の子、そしてもう1人は剣を腰に携えた青年男子であった。女の子の方は人に好まれそうな笑顔をし、青年男子の方は勝手に見知らぬ男である私に無防備に近づこうとしている女の子をいさめようと少々怪訝な表情である。

私は、この時どうかしていたのかもしれない、よほど精神が参っていったのだろう。

「あの、今悩んでいる問題があるんですが聞いてもらっていいでしょうか」

そう言う2人はいいですよと返答してくれた。この街では考えられない行動であった。いつ何時他人に襲われるかわかったもんじやないほどこの街は腐っていた。にもかかわらずこの行動だ。少し泣きそうになった。

「もし、あなたが、ナイフ1本手渡され、父親か母親を殺せと言われたらどうします？」

こういうと男性の方がブツブツ言いながら考え出した。

こんな考えることも嫌な意味のわからない2択問題を本気で考えてくれるとは本当にこの男女は人がいいのだろう。

「うーむ、難しい問題だな」

「私なら」

「？」

女の子の方が口を開いた。

「こんな胸糞悪くなることを命じた奴を殺すわ」

第3の選択肢が出てきた。

「ばかつ、これはそういう問題じゃないんだよ。きっと問題文のどこにおかしなところがあるんだよ」

「えっ、そんなとんちの利いた問題なん？」

2人が何かを話しているが私の耳には届いていなかった。それがあつたか。

「ありがとう」

私は、新しい選択肢を提示してくれた2人に礼を言って立ち上がる。もう見ることもないかもしれない青い空を見上げ、震える手でナイフを持ち父と母が待つ家とは逆の方向に向かい走った。

究極の2択（後書き）

不定期すぎる自分に嫌悪感

平和を守りし者と乱す者（前書き）

約1カ月ぶりです。ネタが無さ過ぎてピンチです。

平和を守りし者と乱す者

酪農が盛んな町。サナエとマルが草の上に寝転がっている。

「あゝ平和やなあ」

仰向けに寝そべり、輪郭がはっきりと見える雲を眺めていたサナエが、呟く。

「うむ。平和だ」

サナエの横で同じように仰向けで、目を閉じ風と草の匂いを感じているマルが同意した。

ここ最近は何々と事件があり、気が休まる暇がなかった2人は、ここぞとばかりに、だらけた。

「あゝ一生このままでええわ」

「俺も」

サンサンと太陽が2人を照らした。

日向ぼっこに勤しんでいる2人の500m後方。この街最大の牧場にて、事件は起きていた。

「ふっはっはっはっはっは。おとなしくしろ。私は、ブラックダーカースのエッグ男爵だ。この牧場は我々が頂く」

世界征服を企む、悪の組織ブラックダーカースの幹部エッグ男爵が、部下の量産型戦闘員クログロを複数人連れて、牧場に入り込んできたのだ。

「ブラックダーカースだって、一体何でこんな田舎町に!？」

牧場主の、ジョージは、ブラックダーカースの名前を聞いただけで震え、腰が抜け座り込んでしまった。

「ふっはっはっはっはっは。この牧場を我々の支部とし、この地域の支配のための基地とさせてもらう。そして、お前が丹念に育てた動物たちを改造し、我々の怪人にしてやろう。ありがたく思え人間よ」

「そっそんなあんまりだ」

頭に目と鼻と口をマジックで書かれた巨大な卵に乗せたエッグ男爵はマントを一度翻し、恰好をつけ、ジョージに剣を突き付けた。

最新最先端技術で作られた、エッグ男爵の剣は、1秒間に千回振動を起こし、どんなものでも簡単に裁断してしまう恐ろしい剣である。エッグ男爵はその剣を器用に扱い、ジョージが5年間丹精をこめて蓄えた髭を全て剃っていく。

「どうだ、すばらしい剣だろ。抵抗したらお前自身に喰らわしてやる」

「ぐぐつ」

「ふふふ、はっはっはっはっは。それではクログロども、牧場に居る動物共を、連れて行き、怪人に改造するのだ！」

「クログログロ」

クログロ達は大きく返事をした。

「ああー、花子に菊子、春子、夏子、冬子、秋子、そして太郎に次郎に三郎に……（300頭の動物の名前を言っている）。

「ああああああ！誰かつ、誰か助けてください」

「ふははははは、いくら助けを呼ぼうが無駄だ。ついでだ、貴様も改造人間にしてやろう。そして、わが組織に忠誠を誓い、我々のために働くがいい」

「うわー」

エッグ男爵は懷から怪人の細胞をいれたアンプルを取り出した。

「そんなことはさせないぞ！」

エッグ男爵の後方で声がした。

「誰だ！？」

振り向くとそこには、

「空に輝く太陽の化身……この世の全てを照らしたず、レッド！」
「少しかだけデコレーションされた全身タイツを着た男がポーズを決めた。」

普通に見れば大爆笑してしまう場面であるが誰も笑わず、真剣な

顔をしている。

「愛。世界中を愛で包んで平和にして見せる。ピンク！」

次に、ピンクの全身タイツを着た人間が現れた。タイツにより強調される体のラインからして女であることが分かる。

「夜は我に任せる。漆黒の闇を照らしたす星・・・ブラック」

全身黒タイツの男も現れた。黒色のためクログロとかぶっている。クログロのリーダーと言われても普通に納得してしまうほどかぶっている。

「俺達3人合わせて」

レッドが言くと3人は集合した。

「・・・空想妄想戦隊・・・エスエフレンジャー・・・」

チュドーン。

ポーズを決めたエスエフレンジャーの後ろで爆発が起こった。

「そこまでだ。エッグ男爵。この牧場をお前たちの好きにはさせないぞ」

リーダーであるレッドが前に一歩出て、エッグ男爵を指さした。

「エスエフレンジャーだと・・・小癪な。我々の邪魔する者は誰でもあろうと容赦はせん。クログロ共やつてしまえ」

「・・・クログロー・・・」

全身黒タイツのクログロ総勢20人が、サーベルを持ちエスエフレンジャーの面々に襲いかかる。

「みんな行くぞ」

無駄なデコレーションを施された非常に扱いづらそうな赤い色の剣を構えレッドがほかの2人に声をかける。

「・・・おう！・・・」

2人が返事をし、自分たちのおよそ7倍の数のクログロを迎え撃つ。

質より量と言われるが、個々の力の差が赤ん坊と大人ぐらい離れていると、いくら数に差があっても無駄であると思われる。その答えが今、牧場内で起きている。

クログロの攻撃を軽やかにかわし、斬撃を食らわし、クログロを戦闘不能にしていくレッド。

愛の力で、クログロをメロメロにし、同志討ちをさせていく、あの意味最強のピンク。

プロレス技で、一タフォールを決めクログロを倒していくブラック。

5分も経てば、動けるクログロは1人も居なくなっていた。

「さあ、後はお前だけだ。エッグ男爵。覚悟しろ」

「うぬぬぬ。使えぬ雑魚共が、いいだろう私が直々に相手してくれよう」

「行くぞ。エッグ男爵！」

「かかってこい！」

レッドとエッグ男爵の剣がぶつかる。流石正義の味方の剣である。どんなものでも裁断すると言われていたエッグ男爵の剣を受けても斬られることはなかった。

デスクワーク派のエッグ男爵では、剣術に長けたレッドとは技術に差があった。剣での有利もなくなり、さらに3対1である。

横から時たま攻撃してくるブラック、操る者が無くなり手持無沙汰になり仕方なく応援しているピンク。それにより着実にエッグ男爵は追い込まれていった。

「うぬぬ。ならばこれでどうだ」

エッグ男爵は一度レッド達から距離を取った。そして、腰下につけていたホルダーから卵を取り出した。

「くらえ、電子レンジで温めた生卵攻撃」

マイク口波により熱せられた卵を投げた。

「無駄だ」

それを剣でレッドが斬った。いや、剣が触れた瞬間卵は盛大に破裂したのだ。熱々の、半生卵が飛び散り、エスエフレンジャーを襲った。

「うわー、あつつあつつ」

「いやー」

「ぬわー」

3人は余りの熱さにのたうち回った。

「ふははは。どうだどうだ。どんどんいくぞ」

次々と卵を取り出し投げていくエッグ男爵。

卵はタイミング良くエスエフレンジャーの近くで爆発し、エスエフレンジャーを弱らせていった。

「勝った。これで、私の出世は約束されたな・・・ふふふっはっはははははは」

卵を手に持ったままエッグ男爵は高笑いを始めた。

「くつくそう、一瞬でも隙があればなんとかなるのに」

タイトの隙間に入ってきた卵をかきだし、レッドが叫ぶ。

「無駄だ。隙なんぞ絶対に見せんぞ絶対だ」

エッグ男爵の手に力がこもった。

その時、手に持っていた卵に圧力が加わり、卵が爆発した。

「うわあっちいいいい」

至近距離で爆発を浴びたエッグ男爵は、思いつきり隙を見せた。

「今だ」

ここぞと言わんばかりに3人はフォーメーションを組んだ。

「「「エスエフビーム」」」

レッドがどこからか巨大なビーム兵器を取り出し、3人で協力し構えた。

「エネルギー充電率85・・・90・・・95・・・100。第一第二第三砲門開放。冷却機エラーなし。ロックオン完了・・・レッド撃てます」

ピンクが言った。

「よし、発射」

レッドが保護カバーを開き、発射ボタンを押した。

ビーム兵器の発射口付近の時空がねじ曲がった。そして、超強力最大最高激震のビームが飛んだ。

「しっしまったあああああ！！！」

ビームをまともに浴びたエッグ男爵は、跡形もなくこの世から消え去ってしまった。

「この世界の平和は俺達を守る」

「俺達・・・エスエフレンジャーが！！！！」

3人はそう言って去って行った。

「ありがとうよ。エスエフレンジャー。おかげで牧場は守られたよ」
エスエフレンジャーに礼を言い、ジョージは愛しの動物たちの様子を窺いに行った。

「・・・あつ」

ジョージは自分が作り上げた牧場を見て声を失った。クログ口達によって柵が破壊されていた。そして、その壊れた柵から大量の動物たちが逃げていた。通常時なら、おとなしい動物ばかりなので逃げるようなことは無いのだが、先の戦いの音や振動。そして、エスエフビームの余りの凄さに、興奮し、全頭逃げてしまったのだ。

「あああああああ！！！！」

ジョージの声が牧場内にこだました。

「あーほんまに平和やなあ」

「ああ、本当に平和だ」

平穏を噛みしめる2人は、500m後方から300頭の動物が自分たちの方向、目がけて爆走していること、そして、後数十秒で、この平穏が終わることを知らない。

平和を守りし者と乱す者（後書き）

次の投稿はいつになることやら。

暗闇からの来訪者（前書き）

話が進むごとに投稿ペースが遅くなってきました。なんとかしないといと・・・

暗闇からの来訪者

いつ終わるのか分からない旅を続けるサナエとマルを見つめる影があった。

身の丈は150？代後半、背中まで伸びた黒髪が夜の闇と同化している。腰には短刀を2本備え、さらにナイフを1本鞘に収め、付けている。右手には1枚の写真を持ち、森の中で焚き火を囲むサナエとマルを眺めていた。その瞳は焚き火の光を反射させ怪しく光った。

「見つけた」

少女のような高い声が影から発せられた。影は、写真を懷に仕舞い、音を立てずに歩きだした。影が仕舞った写真には、アホ面で大あくびをするサナエが映っていた。

焚き火の熱がサナエの頬に当り、ヒリヒリとさせる。携帯食糧を調理し食べ、食後のデザートである焼きマシユマロを作っているところである。3人前も食べたにもかかわらず、マシユマロ一袋全部を串に刺し、平らげようとするのは流石である。

「これはなあ、なかなか、火の当て方が難しくてなあ。当てすぎたら焦げるし、チキンになったらおいしい熱の通り方はせえへんねん。外はカリカリ、中はふつくらやで。それによって、マシユマロ本来の柔らかさと焦げにより作られたパリツと感、この二つの食感が同時に味わえて最高のスイーツになるんや」

うまい具合にマシユマロの刺さった串を回していく。熱せられたマシユマロは外皮を焦がされ、食欲をそそる匂いを出している。匂いにつられ周りに動物が寄って来ているようで、物音が辺りからした。しかし、火におびえ姿を現すことない。火におびえているのか、それとも、サナエのオーラに怯えているのかは分からない。

「今日の夕食は、適当に食材を選び、適当に味付けをして、適当に

盛った奴のするマメな行動ではないな」

野菜炒めを、焼き魚の上にかけて、その上に、パスタを乗せた、ごちゃ混ぜ料理のことをマルは、思い出した。不味くはなかったが、やはり料理とは外見も重要であると言うことを認識させられるものであった。

「私は、無駄な所に労力を使う主義やの」

サナエはマシユマロから目を離さず答えた。確かにサナエは言うとおり無駄に細かいことに気を使うタイプであり、割り箸を丁寧に真つ二つに割ることに集中したり、プリントを全て均一にまっすぐホッチキスで止めるために神経をすり減らしたりと、変なところだけ神経質なのであった。

「上司だったら使いづらい部下だろうな」

「今この時はそんなもん考えたくもないわ。私は、今は、おいしい焼きマシユマロを作ることだけに専念したいの」

やれやれと、マルは呆れ、その場で横になった。時間ももう遅いし、明日もこの森の中を歩くのだから、早く寝ようと考えていた。

そんなマルを尻目に、サナエはさらにマシユマロに集中した。そんな焚き火の煙がサナエの鼻へと吸い込まれていった。そして、煙が鼻孔内を暴れ回りくすぐる。

「むう、へっ、へっくしゅん」

盛大なくしゃみを決めたサナエ、飛び散った光るよだれ。そして、その頭があつた場所を風を切り通り過ぎ、食べごろになっていたマシユマロ串を一刀両断し、怪しく光るナイフ。

「ナツナイフ!？」

先ほどまで、マシユマロがあつた場所でナイフが焚き火に温められていた。

「伏せる」

起き上がり、マルはサントフェに手をかけしゃがみこんだ。そして、ナイフの飛んできた方向に目をくばせ、第二撃を防ぐために焚き火を消した。

焚き火と言う光源が消え、辺りは暗闇と化した。視界が奪われたマルの耳が鋭敏化し、木々に潜む、刺客の音を拾うために動いた。聞こえるのは、自分の呼吸の音、焚き木の燃え尽きる音、一斉に異変を感じ逃げだした動物たちの音。その中から、刺客の音を探る。

「きやつ、一体なんなん!？」

マルの言うことを聞き、伏せていたサナエが空気を読まず、まるで映画のヒロインのように黄色い悲鳴を上げ、マルに今の状況を問いただした。

「良いから黙っている。場所がばれる。理由はわからんが、どうやら何者かに襲われているようだ」

マルは、事態を把握しきれしていないサナエの手を取り、森の中を走った。元居た場所に居れば必ず、刺客は来る。居場所を知っている分だけ、刺客が有利であった。だから、マルは条件をイーブンにするため走った。そして、途中で、適当な場所で足を止め、息をひそめ隠れた。

「ちよつ、なんでいきなりナイフが飛んでくんの」

マルにしか聞こえない、小声でしゃべりかけた。

「分からん、いいか、声を出すな。まったく敵の場所が分からんだ。辺りが明るくなるまでここで待つぞ。恐らく、敵も目が見えていないはずだ。しかも俺達を狙っているのであれば、絶対にさっきの場所から動くはずだ。その隙をつき荷物を取る。そしてその後」

「その後、叩く?」

「いや、怖いから逃げる」

「賛成」

それから2人はじっと息を殺し辺りの気配を窺いつつ隠れた。

暗闇からの来訪者（後書き）

続きをもう書いている最中なので最速だと明日中には

暗闇からの来訪者（2）（前書き）

連日投稿です。

読んでやってください。

暗闇からの来訪者（２）

時間が経ち、日が昇り始めた。光が木々の間を縫い、周りを光で照らし始める。

マルたちが潜んでいる間、敵が攻撃してくることは無かった。また、敵の気配を感じ取れることも無かった。ただ、緊張が続き疲れただけだった。

「よし、見えるようになってきた。まだいるかも知れんから警戒しろよ」

「うん。分かった」

マルは立ち上がり、サンタフェを構え、ゆっくりと前進を始めた。その後をサナエは追いかける。緊迫している２人とは対照的に、森は平和な雰囲気で包まれている。朝を迎え、動物たちが行動を始めたようで、森中から鳴き声が聞こえた。

マルの後ろのサナエが息を止めて歩く。どうやら、呼吸音すら鳴らさないようにしているようだ。しかし、１分もすると、足りなくなつた酸素を得るため大きな音を出し深呼吸をしていた。

「意味ねえな」

見ずにマルが呟く。

元居た場所に戻ると、荷物はそのままであった。焚き火もマルが消したまま、散らばっていた。唯一変わったことと言えば、ナイフが無くなっているということだけだ。

「うむ。最初は山賊かと思ったが、どうやら物盗りの仕業ではないようだな」

リュックサックの中身を確認していたマルが推理した。中身は全て無事であった。

「じゃあ、初めから命だけ狙ってたってこと？」

刺客により地面に落されたマシユマロの、土の付いている部分を筆っているサナエがしゃべった。

「ああ、そうなるな、おい、汚いぞ」

「それはもう、かなりまずいことやんな、あんむ（マシユマロを食べる音）。このマシユマロも焦げてすっかり不味くなっているわ」

「ああ、大変まずいことだ」

マルは焦っていた。このサナエのしょうもない意地汚いシヤレで作りに出された絶対零度の空気と自分たちを襲ってきた敵の強さに。

最初の攻撃の時、まったく気配を感じ取れなかった。そして、隠れている間も気配を探っていたが、一切気配を掴むことができなかった。それほど、相手は強いと言うことがマルには分かっていった。

「どないしょ」

くだらないことばかりしているがサナエは動揺を隠せないでいた。奇行は動揺を隠そうとするための苦し紛れの行動であったようだ。

これまで何度か似たような襲撃があった。主に、金目の物目当ての山賊であった。しかし、それは正面から襲ってくるある意味素直な敵ばかりであり、大体の者の實力は素人に毛が生えたような者であり、2人の敵ではなかった。しかし、今回は今までとは違うと言うことはサナエも分かっていた。

「お前何をしたんだ。ナイフはお前を狙っていたぞ。いったいどこで命を狙われるほどの恨みを買ってきたんだ」

「うーん」

街中で暴れ回りぶつかってき、さらにババアと言う罵声を浴びせてきた子供に対し、鬼のような形相で脅し文句を言い泣かせたこと。老人を轢きかけ、謝ることなく罵声を浴びせ逃げて行った馬に乗った若者を引きずり降りし老人の前で土下座させたこと。癪に障る行動を起こすマルを半死まで追い込んだことを思い出した。

「うーん。これと言って命を狙われるようなことをした記憶がないなあ」

「うむ。俺がもう少し強くて忍耐力があったら迷わず命を狙っているな。しかし、命を狙われていることは変わりない。問答する暇があったら、さっさとここを離れよう。また戻ってくるかも知れんか

らな」

「うん。さつさと行こ」

荷物を持ちそそくさと2人は森の住人である動物たちに見送られながら森を突っ切っていった。

日が差し刺客の姿がはつきりと映った。眠たげな灰色の瞳を持ち、瞳と同じ色の髪を縛りポニーテールのようにしている少女がいた。歳はサナエと同じ程で、まだあどけなさが残っている。しかし、表情には感情がなく、表情から何を考えているか読むことはできない。「荷物が無くなっている」

辺りの搜索を行い帰ってきた刺客はサナエ達の荷物が無くなっているのを見つけた。周囲に付けられた足跡がまだ新しいことを確認した。

「まだ、遠くに行っていない。おそらく、この先の街」

刺客は、この付近にある街に向かい森の中を走った。そこは、サナエ、マルが向かっている街であった。

到着した街は街と言えるほどの大きさではなく、どちらかと言うと村であった。人工密度も低い、ほのぼのとした所だった。湖にはアヒルの親子が列を成して日光浴を楽しんでいる。

「うむ、ここまで来れば大丈夫かな。流石に街中では襲ってこないだろう」

「せやな、しかし、たまったもんじゃないわ。私が何したって言うねん」

「まったく、巻き込まれる方の方になつてくれ」

「私も巻き込まれた方や」

村の役所に向かい歩いているところ、村唯一の書店で学校帰りの少年達が、本日発売の少年誌を立ち読みしていた。極々ありふれた景色である。しかし、1つだけ異様な所があった。

「月刊少年ダンシングはおもしろーな」

「うんうん。ただよお一カ月つてのが長いよな。続きが気になって仕方ねえもん」

「いいじゃんか、その分こんなにぶ厚いんだから」

少年達を読んでいるダンシングは60個もの漫画が連載されている全2000ページを超える超特大月刊誌なのである。余りの重さに、世界一立ち読みしづらい少年誌とされている。

そのダンシングを談笑しながら読んでいる少年達。その腕はダンシングの重さに対応できるように、少年達の体には不釣り合いな筋肉をまとっていた。少年達を進化させてまで夢中にさせるダンシングとはどれだけ面白いものなのか。

「やっぱ、ファイトガールアサミはバトルが迫力あっておもしろえ」「そうだよな。憧れるよなあ」

「うん。こんな女子がクラスに居たら一発で好きになるよ」

少年達は、ダンシングの中で人気上位に位置するタイトル通りの格闘漫画を食い入って読んでいる。現実ではありえない超人的アクションを夢見ているようだ。

「なんなんあれ、辞書？」

少年達が持っているダンシングの厚さを見てサナエが言った。

「漫画」

「うそつ、全然お手軽に読めないやん」

「ああ、読むのが遅い奴なら読み終わる頃には、次のダンシングが発売されているくらいだからな」

「本屋は発売日置き場所に困る大きさやな」

「ああ、俺が本屋のバイトなら絶対に入荷日にはバイトを休む」

「ほな、私が店長なら、お前をその日にしかシフト入れんようにする」

「月一か!？」

そして、2人はいつも通り役所でがつくり肩をうなだれ、本日の宿へと向かうのであった。

「それじゃあ、明日取り壊しを行いますね」

「はいはい、それでよろしく願います」

住人が死去し誰も住むことが無くなったボロボロの家屋の前で、業者の人間と役所の人間が取り壊しについて話し合っていた。倒壊事故が起きてはいけけないので取り壊すことになったのだ。家屋は、侵入を防ぐために、正門の入口以外、人が入れそうな場所全て、木を打ち付け閉鎖されていた。

「しかし、ここまでよくボロボロになりましたね」

「ええ、この村で一番古い家でしたからね。確か築150年くらいらしいです」

「はあ、そんな古いんですか。流石ですね、ちよつとでも強い衝撃が加わればあつと言う間に倒壊してしまうほどですよ」

「そんなにですか。少しもつたいないですけど、仕方ないですね。事故が起きたらいけないですし」

役所の人間が少し悲しそうな顔をして俯いた。それを察し、業者の人間が話しかけた。

「何か思い出でも」

「ええ、昔よく、ここ前の住人の方にお世話になっていました。どんどん、村が変化していつて、子供のころの思い出が無くなってしまうのはつらいことですね」

役所の人間が、子供のころ遊んだ公園は今では、古い遊具は危険だということで撤去され、ただの空き地となっていた。唯一残された、馬の置物の瞳はどこか寂しげであった。

「・・・そうですね」

業者の人間もなぜか申し訳なさそうに俯いた。彼も、この家には少なからず思い出があるようだ。

「くー、涙線のダムが決壊しそうや」

「ああ、雨が降ってきたのかな」

会話を盗み聞きしていたマルとサナエの頬に水が流れていた。

暗闇からの来訪者（2）（後書き）

とりあえず、このシリーズを早いうちに完結させたいです。

暗闇からの来訪者（3）（前書き）

やる気が持続しております。

暗闇からの来訪者（3）

「むっ、あれは！？」

村のもつとも人通りが多い場所に着くと、マルが急に立ち止まり声をあげた。

「どうしてん」

「あれは、この村の名物競豚じゃないか」

マルが指さした方向には大きな看板に『かわいい豚達が、自分の体重を、膝を顧みず頑張つてゴールを目指して走るそれが、男のロマン、夢Ⅱ競豚』と書かれている。キャッチコピーの横には豚が舌を出し笑顔で、顔の横に吹き出しを付け、楽しいよと言っているフアンシーな感じに作られている。一瞬テーマパークかと錯覚しそうなほどである。しかしその下にいるのは煙草の煙を口から吐き出し、片手にワンカップを持ち、レース前の豚と新聞を食い入るように見つめる中年男性しかない。

「うわっ、なんか鉄火場みたいな空気」

「すまん。と言う訳で行ってくる」

マルはサナエに一瞥くれると早歩きで競豚場に向かった。

「どういう訳やねん・・・あれっあいつどこ行つた？」

競豚場に近づくにつれ、ゆっくりと周りの人間と同じ空気を纏い、自然とカメレオンのように溶け込んでいった。マルが中年集団の中に入り込むころには、サナエには見分けがつかないほどであった。

1人残されたサナエ。溜息をつき、一度大きく背伸びをする。

「うーん。まっ、ええか。あいつが終わるまでこの村の観光でもするかなあ。やっぱ、名産品食い漁るかな、確かパンフレットにいくつあったはず」

先ほど役所で手に入れたこの村のパンフレットを取り出し、食べ歩きへと出かけた。

6 件目の甘い餅の中に、唐辛子の粉末が入っている甘辛餅と言う物をサナエは食べていた。

「うんうん、ほどよいまるで粉雪のように優しい甘さの中に、味覚を破壊するほどの辛さが入っていてうまい具合に中和し合っていて、美味」

何を食ってももうまいと言えるのだから彼女はとても幸せ者である。

8 個入りの 7 個目をほおばっていた時

「・・・見つけた」

背後で声がした。

「んっ？」

振り向くとサナエの瞳に、短剣を 2 本構えているポニーテールの刺客の少女が立っていた。

「お命頂戴」

刺客の少女はそう言うと、右手に持つ短剣を振ってきた。風を切り短剣がサナエに向かってくる。

「あぶなあっ!？」

頭に向かって振られた短剣を、状態をかがめ避け、バックステッブで距離を取る。

「ななななんやねん」

「・・・避けられた」

避けられた短剣を不思議そうに見つめた、後に刺客の少女は再び構えた。

「・・・避けられた。ちゃうわ、誰やねん、あんたいきなり危ないなあ」

「もう死ぬ人に語る名前は無い」

「かつこいいなあ・・・はっ、あれかお前は、昨日のナイフ投げてきた奴か」

見覚えのあるナイフが刺客の少女の腰に備えられていた。

「そっ、だから、死んで」

「いやじゃ、お前のせいで、マシユマロが食べられなくなったんや、

代わりにこれでも喰らえ」

サナエは残り1つの甘辛餅を刺客の少女に向かい投げた。

「無駄」

刺客の少女は、投げられた甘辛餅を切り伏せた。真つ二つにされた甘辛餅は中に詰められた唐辛子粉を撒き散らし、宙を舞う。

「むっ、ゲホゲホゲホ辛い・・・痛い」

唐辛子粉は風に乗り、刺客の少女の目や鼻、口などの粘膜を襲った。

「今だ」

サナエは攻めようと試みたが、それを察した刺客の少女は大きく後退し、短剣を構えなおした。半目ながらもその瞳はしっかりと襲いかかるうとしているサナエを見据えていた。流石のサナエも、攻めることはできずその場で止まってしまった。

「ちっ」

昨夜から分かるように自分と、刺客とではかなりの実力差があることは分かっていた。倒すには、奇襲しかない、しかし、それも防がれた。ならばすることは、逃げることに。一瞬でそれを悟ったサナエは体重を後ろに移動させ逃げる用意をした。

敵の間合いから離れるまで後ろ走りをし、十分な距離がとれた所で背を向け走り出した。

「逃がさない」

目と鼻と喉の痛みがようやくとれた刺客の少女は、遠くに見えるサナエの背中を追いかけて走り出した。

「うわっ、めっちゃ早い。あかんこりや追いつかれる」

走っている際に後ろを何度か確認すると、どんどん刺客の少女との距離が縮まっていくことが分かる。サナエも速い方なのだが、刺客の少女は常人の速さを超えていた。

「あかん、迎え撃つしかないか」

先ほどの本屋の前で向きを変えサナエは構えた。体全体は恐怖と緊張で震え、うまく動かすことができないことに気付いた。刺客の

少女が発する雰囲気のにまれているようだ。

「ビビるな、震えるな。後で好きなだけ、怖かったって泣いても良いから、今は、目の前に迫ってくる敵を倒すために、集中しろ」

震えた膝を叩き、サナエは眼前に迫ってくる敵を見据えた。不思議と、体の震えは止まり、体の芯がまっすぐになった。

「逃げることを諦めたの？」

ほどなくして、刺客の少女は追いついていた。息切れしているサナエに対し、刺客の少女は、先ほどまで休んでいたのかと思うほど、息が整い、落ち着いていた。

「うん。面倒くさくなつたからな」

もちろん強がりである。

「生きるのが？」

刺客の少女が懐の双剣を抜いた。

「違う、逃げるのが面倒くさくなつたんや。それに、よくよく考えたらぶん殴って倒した方が早いつてことが分かつたから」

刺客の少女が構えると同時にサナエも構えた。相手が武器を持っているため、いつもと構えが違い、左手を前に長く出し、武器攻撃を警戒した。

「そう。追いかける手間が省けて助かる」

「どういたしまして」

暗闇からの来訪者（3）（後書き）

タイピングしすぎて左手が痛いです。

暗闇からの来訪者（4）（前書き）

続きです。

暗闇からの来訪者（４）

ダンシングを読む手を止め、この驚きの展開を少年達は茫然と見つめていた。その少年達の前で、やる気いっぱい２人は攻め時を探っていた。

はるかに、相手の方が場数を踏んでいて、戦い慣れしている。そして、おそらく身体能力でも負けている。さらに、触れれば確実に傷を負う、武器を持っている。この３つから自分が勝つことは、ほぼ０と言っても良いことがサナエには分かっていた。

「それじゃあ、行く」

刺客の少女は一度、了解を取り、地面を蹴りサナエに襲いかかった。両手に持つ短剣を、リズム良く振ってくる。その攻撃の一刀一刀が風を切り、余りの速さに、少年達の目にはただの線に映っていた。

髪や服を切られながらも、ギリギリでサナエは、その猛攻を避ける避ける避ける。バックステップ、ダッキング、スウェー、その他諸々の持てるディフェンス技術を駆使した。そして、攻撃の機会をうかがっていた。しかし、間髪いれずの攻撃のため、まったく隙がなく、防戦一方になっていた。

（くっ。せめて、短剣が１本やったら攻撃に移れるのに、二刀流はきつい）

サナエが考えを張り巡らせている時、急に、猛攻が途切れた。刺客の少女が後ろに跳び距離を取ったのだ。

「よく避ける」

先ほどから何度も自信のあるこれは絶対に当ると思った攻撃が次々と避けられたことに、刺客の少女は感動を覚えていた。

「結構今までの攻撃自信があつたのに、全部避けられた」

「昔から痛いのは嫌いやったから、こういうことの練習を頑張ってきたんや」

褒められたため、サナエは緊張しながらも照れていた。普段褒められることがないため、かなり嬉しいようだ。張りつめていた緊張がゆるんでしまった。

「分かった。じゃあこれは？」

刺客の少女は右の剣を逆手に持ちかえた。そして、右手を前に出し、左手を後ろに下げた。先ほどまでの威圧感がさらに上がっている。

「うはっ、なんか益々怖くなってきた」

これから来る攻撃を避けることの難しさを感じていた。そのおかげで、再び緊張の糸がピンと張った。

「それじゃあ、行く」

「来い！」

先ほど違うパターンの攻撃が続いた。右手の不規則な動きが読めずに、避けることがかなり困難であった。

「すっげえな」

ダンシングなどすっかり忘れ、目の前の攻防に見入っている少年が呟いた。

「うんうん」

もう1人の少年が頷いた。

しかし、流石はサナエである。最初は、避けることに精一杯であったが、少しずつ、相手の隙を探すことに気を向けることができるようになって来ていた。

左手の振り上げ攻撃の後、右手の薙ぎ払いがくるとき、わき腹が空いている。

受ければ必ず致命傷になる攻撃の嵐の中、サナエは刺客の少女の隙を発見した。

人間と言うものは、ある程度の時間、同じ動きをすると、傍から見るとランダムに見える動きも実はいくつかのパターンが重なってできた動きであることがある。例えば、じゃんけんを連続ですると最初はランダムになるのだが、速度が上がってくると自然とグーチョ

キパーと順番に出すようになることが多い。まさに今、攻撃だけに専念している刺客の少女はそれに当てはまっていた。動きがパターン化してきているのだ。

もう一回あの攻撃があれば、攻められる。サナエは、ひたすら攻撃を避け、そのパターンが来るのを待った。

それは、ほどなくしてきた。右手の振り下ろしを避けた直後、待望の左手振り上げが来た。

来た。サナエは、ついに来た攻撃の機会に頬が緩み、勝利を確信した表情を作った。待望の攻撃を避け、空いたわき腹に相手を一撃で倒せる攻撃を放つために初めて距離を詰めた。右手に力を込め、この一撃に全体重を乗せる。

サナエの右こぶしがわき腹に吸い込まれそうになっていたその時、刺客の少女が小さく笑った。サナエと同じように勝利を確信した笑顔であった。

攻撃に向かい体重を前に向けたサナエの右側頭部に衝撃が走った。
「ぐっ」

衝撃を受けた右手側を見ると、刺客の少女の足の甲があった。

刺客の少女は、わざと隙を作ったのだ。このままだと戦いが長引いてしまう。時間をかければ、いずれサナエのスタミナが切れ攻撃を食らわすことができるのだが、ラムダ警護団が来てしまうと面倒であった。そこで、防御に専念するサナエの気を変えさせたのだ。

サナエの実力を測り、どの程度の間なら故意に作ったものであるとばれないのか考え戦っていた。そして、サナエが見事釣り針に引っかかり、防御を失念したところでできた本物の隙に、相手を一撃で卒倒させる蹴りを放ったのだ。

蹴りの衝撃を受けサナエは勢いよく飛ばされた。いや、攻撃を食らった瞬間、足に力を込め、蹴りの力も借りて大きく飛んだのだ。あの場所で足を止めてしまうと必殺の一撃が飛んでくるのが目に見ていたからだ。その予感通り、サナエが居た場所に短剣の軌跡が走っていた。

「なかなかやる」

放った右手の振り下ろしを避けられた刺客の少女は、なかなかやられない獲物のしぶとさに感心していた。しかし、致命の一撃は避けられたが、状況はさして変わらないでいる。まともに、頭部に攻撃を食らい、サナエの足は言うことを聞かず、ストライキを起こしていた。立てないでいるサナエの目の前には刺客の少女が立っていた。

「なかなか、楽しかった」

「そりやどうも」

腕の力でなんとか立ち上がろうとしたが、目の前で、刺客の少女が短剣を振り上げていた。

「さようなら」

別れの言葉を告げ、右手が振り下ろされた。

刺客の少女の手には想像と違った感触が伝わった。いつもの、皮、肉、骨を切る感触ではなかったのだ。感触の違いを感じてすぐ、刺客の少女は自分の振り下ろした短剣の先を見た。

「なっ」

刺客の少女の短剣は、月刊ダンシングに食い込んでいた。流石は激厚のダンシングである。骨をも両断する攻撃を受け止めるとは。

サナエが飛んだ場所は、立ち読み少年達が居る場所であった。

「うしっ」

ダンシングの中腹まで食い込んだ短剣を挟み込み捻る。力自慢のサナエの両手と細身の刺客の少女の片手の力比べである。簡単に、少女は短剣から手を離されてしまったのだ。そして、サナエの力に抵抗してしまった刺客の少女は、短剣越しに力が伝わり、バランスを崩してしまっていた。その隙をつき、サナエは前蹴りを食らわした。座った状態であるのでさして威力は無いが、距離を空けるのに十分であった。

「よっしゃ、これで、大分戦えるな」

短剣を挟み込んだダンシングを、本屋の屋上に投げ込んだ。二刀

流だと、攻撃の勢いの強さに攻撃する隙がなかったが、一刀流なら避けやすくなり攻撃の機会も生まれる。そうサナエは考えていた。「本当にしつこい。初めて」

「そうやる、そうやる。私はそんじょそこの奴とは違うからな。うんでどうすんの諦める？できれば、このまま帰ってほしいねんど」

「残念。私は仕事を完遂する」

刺客の少女は、腰に手をやりナイフを取り出した。長さは先ほどの短剣ほどないのだが、十分命を取れる長さは持っている。

「あれっ・・・二刀流やん」

「ふふっ。どうする？」

構えた獲物を一度振り、ナイフに変わったことによる重心の調整を行った。

「・・・ずつずるいぞお！」

せつかく、脅威の1つを取り除いたのに、あつと言う間にその脅威の息子がやってきたのだ。たまったもんじゃない。

大きく後ろに跳び、サナエはこの場を離れ、敵に背を向け走り出した。武士なら罵倒されている所である。

「また逃げる」

「うるさい、こんなしんどい戦いやつてられるか。くそ、勝てると思ったけど、絶対無理や。強すぎるわ、どうしょ・・・あー頭痛い」

現状では絶対に勝てないことが先ほどの戦いで身に染みたサナエは、何か道中で使える物、また助けてくれそうな強いお方が居ないのか探すことにした。

「無駄なのに」

刺客の少女は、再び逃走を図ったサナエの後を追う。はるかにサナエより早い動きである。

残された少年達は、先ほどまで夢中になっていたダンシングを放り出し、高速で走っていた2人を目で追った。

「すっすげえ」

現実では考えられない、漫画だけの世界だと思っていた人間離れした2人の攻防に感動を覚えていた。

「うん。まるでアサミみたいだった」

「俺、ファンになりそう」

「俺も」

2人の理想の女性像が大きく変わった瞬間であった。

暗闇からの来訪者（4）（後書き）

続き頑張って早いうちにします。

暗闇からの来訪者（5）（前書き）

一週間ぶりです。

以前に書いた話をところどころ加筆修正しています。暇つぶしに
もう一度読み返ししてみてください。

暗闇からの来訪者（5）

サナエが逃げ込んだのは明日取り壊される予定の廃屋であった。1つだけしかない出入り口に入り建物中に避難していたのだ。廃屋に入ったサナエを確認し、刺客の少女は後を追いかけて、廃屋の前に立っていた。

このままドアを開け、待ち伏せての一撃があるかもしれない、いや絶対にあると確信していた。サナエが自分を倒すには奇襲しか残っていないはずだからである。だからするとしたら今しかない。廃屋のドアは手前に引くタイプであった。刺客の少女には好都合である。自分が建物の中に入ってしまう押すタイプではなく、中と距離を取ることができる引くタイプは奇襲に備えることができるのである。

刺客の少女は備えてあったワイヤーを取り出しドアノブにかけ、そして、両手に剣を構えた。ドアから距離を取り、ゆっくりとワイヤーを引く。木で造られたドアは軋む音を鳴らし開かれた。ドアの前には人影はなく、ドア付近の気配を探ったがサナエが隠れている様子はなかった。慎重に歩を進め、廃屋に入っていく。中は、テーブルや椅子、タンスなどといった家具がそのまま残っていて、暮らしていた人間の生活が一目で分かる。タンスの上には、住んでいた人であろう人物の写真が立てかけられていた。ある程度、廃屋の中に入っていくと視界の端に、人影が映った。サナエである。

「こんな、逃げ場のない場所に来てどうするつもり？」

剣を構え、サナエに問う。

「うるさい、なんも考えてへんわ！」

やけくそなのかなぜかサナエはキレていた。長州力以上にキレていた。

「そう。この中だと柱とかが邪魔で剣が振れないから、それを考えて入ったのかと思った」

「えっ、あっそうか……ふははははは、その通りだよ、明智君。名推理だ。さあどうする。この不利な状況の中、君はどうするのだね」

「私の名前は明智じゃない」

サナエの窮地にも関わらず放った渾身の冗談も軽く流された。どうやら、刺客の少女は、この小説では珍しい、ノリの悪い人種のようだ。非常に扱いにくいキャラである。

「それに、こんな状況不利でも何でもない」

刺客の少女は剣の持ち方を変えた。先ほどまでは切ることを主とした構えであったが、切っ先をサナエに向ける構えに変え、突きを主体とした攻撃スタイルに変えたのだ。

「さあ、どうする？」

「どうするもこうするも、なんとかやるさ」

攻撃が面積の小さい突きが変わったことにより、避けることが比較的楽になったことは間違いない。しかしそれでも、実力差が埋まったわけではない。現に、攻撃スタイルが変わってもサナエは防戦一方を強いられていた。

腕が2本以上あるのではないかと思われるほどの早い突き、剣先は肉眼ではとらえることができないほどであった。相手の腕の動きだけを見て、サナエはなんとか避け続けていた。フットワークを使い巧みに避けていく。2人は攻防しつつ、大きく円を描きぐるっと180度回ったのだろうか。先ほどまで、サナエが家の奥に居たのだが、今は入口を背に向けて立っている。

いったん大きくバックステップをし、サナエは距離を取った。

「ちよっと待った。話がぁんねん」

手を出し、今にも襲いかかってきそうな刺客の少女を制止した。

「何。今さら命乞い？」

予想外の動きのため、刺客の少女は何かあるのではないか、例えばこの家の中で武器を見つけそれを隠し持っているのではないかと考えた。それを警戒し、刺客の少女は動きを止め、サナエの話を聞

くことにした。

「あのさ、この家がどういうもんか知ってる？」

「ん？」

突然の話で刺客の少女は、遂に恐怖でサナエがイカれたのかと思っ
った。

「この家はな、この村で一番古い、確か築150年の家らしいんや。そんで、明日に取り壊すらしいわ。ほら、窓とか封鎖されているや。古すぎて倒壊する可能性があるから、誰も入らんようにしてるらしいわ。まあ、私は入口のカギ壊して入ったけど」

サナエは入る時思いつきドアを引き、カギを破壊していた。

「それが何？」

「だから、ちよつとした衝撃が加わると簡単に倒壊するらしいわ」「！？」

説明を終えると同時にサナエは腰を捻り、あらん限りの体重を乗せ、この家を支える柱に回し蹴りを食らわした。渾身の蹴りを食らった柱はへし折れ、破片が刺客の少女の方へと飛んだ。それをたたき落とし、サナエの方を見るとサナエは1つしかない出口から外へと出て行くところであつた。

「じゃあな、早くなんとかせんと巻き込まれることになるで」

一度、刺客の少女の方に振り向き、サナエは手を振って脱出した。全体を支える大黒柱が無くなり家は崩壊を始めていた。大きく揺れ、今にも屋根が落ちそうになっている。崩壊を察し、最後の住人であつたネズミが壁に空いた小さな穴から急の引っ越しを始めていた。

「まずい」

このままでは巻き込まれてしまう。

刺客の少女は、走った。落ちてくる木片を切り払い、進路上にある机は蹴飛ばし、刺客の少女は最短距離で出口へと走った。閉められていたドアを蹴り飛ばし開く。そして、そのまま体を外へ出した。「危なかった」

危機を脱し刺客の少女は、ほっとした。しかし、一息ついたのもつかの間、刺客の少女の顎に向かい飛んでくる拳があった。

「残念、本当に危ないんはこれや」

「しまっ・・・」

サナエが勝つには奇襲しかない。そのことを分かっていた刺客の少女は、常に奇襲を警戒していた。しかし、自分に迫る危機から脱する、この時完全にそのことが頭から抜けていた。

サナエの渾身の突きが、刺客の少女の顎を貫いた。強力な一撃により脳が揺らされ、刺客の少女は一瞬で意識を失い、その場に倒れた。示し合わせたかのように刺客の少女が倒れると同時に家屋は倒壊した。

「ふっ、安心しな峰打ちや」

拳に息を吹きかけ火を消すようなしぐさをした。ちなみに、拳なので峰打ちはおかしいと思われるのかもしれないが、サナエが本気で手刀をするのと角材くらいなら一刀両断できるのである。なので、峰打ちと言う表現はあながち間違いではないのだ。

倒れこんだ刺客の少女に近寄り、サナエは一度突っついてみた。特に反応は無く、完全に意識が飛んでいるようだ。それを確認すると。

「いよっしやああああああ！勝った勝った勝った勝った勝った！あつぶなかったあああ。久しぶりやでこの空気。ずっとシリアスで命の奪い合いしてたんやもん。うおっ、今更足の震えがきた。やばっ止まらん。でもよかった死なんで。ほんまにこの作品はこう言う真面目な話やったらかんて、表情の作り方が分からんもん」

何やら、訳のわからないことをほざいているようだ、とにかく勝って嬉しいのだろう。ずっと、両手を肩にまで上げ、力こぶしを作るような格好で左右にステップを踏み、勝った勝った勝った勝ったと懐かしい股間に葉っぱを付けているキャラクターのもののまねをしている。

「しっかし、どうするかなこれ」

いったん冷静になり、サナエは目の前にある倒壊した家屋と、卒倒している刺客の少女を交互に見つめた。

暗闇からの来訪者―番外編―（前書き）

読まなくても、本編に何の支障ありません。

ただ単に、書きたかった自己満足の話です。時間がなく、こんな奴の自己満に付き合う暇はないと言う方以外は読んでみてください。

暗闇からの来訪者―番外編―

サナエが戦っていたところ、別の戦いが繰り広げられていた。

場所は、競豚場。9レース目が開催されていた。多くの観衆の中、その中にマルがいた。

「・・・ああ、どうするどうする」

なにやら茫然としているようだ。口は半開き、目はうつろになっている。

「もうこれだけしか残っていない、このままでは、無一文だ」

マルが財布を開くと、紙幣が一枚しかなかった。それも一番価値の低い紙幣である。

マルが競豚に参加したのは、3レース目からである。そして、これまでの戦績は6戦6敗と散々な結果である。まあ、この結果は仕方ないことである。ギャンブル素人のマルは、効率の良い買い方をしていないのである。1レースにいくつかの通りを買っているのだが、オッズをちゃんと見ないので、当たってもトリガミが起きているため、トータルでマイナスになっているのである。そして、今、本日の最終でメインレースが始まるうとしていた。

「どうするどうするどうする。どの豚を買えばいいんだ。はっそうだ。確かオッズがあったはず」

8レース目からオッズの見方を覚えていたのだが、それにより欲が出て8レース目は大穴ばかり買って玉砕していた。それに懲りず、マルは一発取り返そうとオッズ票を見に向かった。

「なんとか、この金を元に戻さないと、サナエに殺される」

2人はラムダ警護団からもらった給料を自由に使える金つまりおこづかいと、旅費に分けていた。そして、マルは自分のお小遣いをすっかり使い果たし、次の街までの旅費に手を出していたのだ。そんなことサナエに知れてしまった日にゃ、四肢の自由を奪われ磔にされ、超近距離ノックを1000本食らうのは確定である。ボール

より先にバットが当たるほどの近距離である。

怯えた目でマルは、常に変化するオッズ票を見つめた。一発で負けを取り返そうとする行動は、ギャンブルを知らない、夢を見る素人の行動であり、マルの行動は見事にそれに当てはまっていた。人気の豚を見ずに、人気のない豚のオッズを食い入るように見つめている。その中で単勝（1匹豚を選び、その豚が1着になれば当たりの買い方）で、高倍率の豚を探した。3匹を豚だけにビッグアップした。その3匹の豚の情報を新聞で読みとる。過去の戦績、体重、血統、時計、短評、ありとあらゆる新聞に活字で書かれている情報を読んでいく。そして、

「これだ。この豚だ。マイネルピッガーだ」

オッズと新聞を照らし合わせ、マルは1匹の豚を選んだ。

暗闇からの来訪者―番外編―（2）（前書き）

番外編第2話めです。

暗闇からの来訪者―番外編―（２）

場所は変わりレースに参加する豚達の待機場所。次にレースを控えた豚達が英気を養っていた。その中にマイネルピッガーがいた。
「よう、坊主久しぶりだな」

隅っこの方で寝転がるマイネルピッガーに話しかける豚がいた。

「あつ、ホットランナーさん」

ホットランナー。この競豚で史上最強と呼ばれた豚である。過去に幾度となく記録を作り、今なお５０連勝と言う記録は破られていない。全盛期は常に単勝オッズが１．０倍であった。しかし、現在は歳のせいかな身体能力が落ち、碌な成績を残せていなかった。

「浮かない顔してどうした。俺の方がしたいぞそんな顔」

「ああ、そうでしたね、ホットランナーさん今日が引退レースでしたね」

「早いものだ。生まれて３年でこの競豚に参加して、最強の豚と呼ばれて、気がつけば力が落ちて引退だ。一生なんてあつという間だな。ところでどうしたせつかくの重賞なの」

自分のことよりも相手のことを気にかける所からベテランの優しさが出がえる。

「ええ、その俺の成績知ってます？」

「ああ、知っているそれが？」

「それがつて、１９戦１８敗ですよ。しかも、唯一勝ったのは、トップ集団が転んだからです。俺が、この由緒正しき冬季記念に出られるわけないでしょ。多分、親父がホットランナーさんの唯一のライバルだったマイネルサンダーだからでしょ。だから俺が出られただ」

マイネルピッガーが今日出場する冬季記念とはこの競豚では最も大きな重賞レースとされている。出場する１６匹の内１匹だけ成績に関係なく人気投票で決定されるのだ。それが、マイネルピッガー

だったのだ。

「マイネルサンダーか。あいつは強かったなあ。俺の51勝目を止めたのはあいつだったな。あいつの追い込み脚は凄かった。あの怪我がなければ史上最強って呼ばれてたのはあいつだったかもな」

マイネルサンダーは成績こそ、それほどであったが、ここぞと言う時には絶対に逆転勝利する豚であった。堅実に勝利するホットレーサーと違い、常に見る者を魅了する華があった。

「そんな親父を持って俺は大変ですよ」

マイネルピッガーが初出走する時、観客はマイネルサンダーの子供と言うことで、期待を込め皆マイネルピッガーの豚券を買った。そのおかげでオッズは新豚（レース初出走の豚のこと）にもかかわらず1・0倍を記録した。しかし、結果は散々8匹中7位と言う成績であった。ダントツの1番人気の豚が負けたことにより、このレースは新豚戦史上もつと高値の豚券が出たレースと呼ばれるようになった。その後もマイネルピッガーは人気があるのだが成績が奮わなかった。

「しかし、皆がお前を応援するってことはお前が何か持っていると思っただけだ。応援しているんじゃないのか？」

「応援に心えたいと思いますよ。でも、だめなんですよ。追い込みの時に脚が動かないんですよ。親父が追い込みの時に脚をやったでしょ。あれを見たせいなのか追い込みの時になると怖くなって」

マイネルサンダーが脚を怪我したのは、夏季記念の時であった。ホットレーサーの連勝を止めた次のレースであった。このレースもホットレーサーが出場していた。観客は、ホットレーサーのリベンジとマイネルサンダーの連勝と両方を望んでいた。

レース終盤。トップに立っていたのはホットレーサーであった。そして、それを追いかけるのがマイネルサンダー。着実に2匹の距離は縮み、マイネルサンダーがホットレーサーを差せるかとなっていた。ホットレーサーも懸命の走るが、確実に追い詰められ、ゴール1メートル前2匹は同位置にいた。そして、ゴール。結果は写真

判定へともつれた。全員が結果を待っている中、レースを終えたマイネルサンダーが大きく転げたのだ。最後の追い込みの時、マイネルサンダーは脚を故障していたのだった。このレースを最後にマイネルサンダーは競豚から姿を消した。

「あのレースが原因か。確かにつらかったな。俺が連敗したのは後にも先にもあの時だけだったな。しかし、それでもお前は競豚なんだ。なんとかしないとスーパースペシャルの特売コーナーに並んじまうぞ」

能力不脚人気不脚、また故障などの競豚は殺され食品として売られることが基本であった。ホットレーサーはその実績を買われ種豚として生きていく予定である。ふつうは引退してから子供を作るのだが、マイネルサンダーは夜中にこっそり飛びだし、同じ牧場に居た雌豚に手を出したのだ。そして、それがマイネルピッガーとなった。

「うつ、そうですよね。なんとかこのレースで結果を残して、それだけは回避したいですよ」

「はっはっはっその意気だ。命がかかれば恐怖もなくなるだろ」

「やあホットレーサーさん」

2匹の豚に近づいてくる豚達がいた。

「んっ、ああダレンシアンじゃないか」

ここ最近若手豚の中で台頭しているのがこのダレンシアンである。今が、全盛期ではないとは言え、ホットレーサーに勝ち越している豚である。このレースの大本命とされている。その横に居る2匹もかなりの有名豚である。

「今日のレース、僕が1番人気ですって。ホットレーサーさんを差し置いてくださいね」

「ああ、気にするな。俺は時代遅れの豚だからな」

「そうですね。何度も僕が勝ってますもんね。そう言えば今日で引退でしたね。すいませんね最後のレースなのに花を持たせられなくて」

嫌味なまでに嫌味な奴である。こんなやつ同級生なら絶対にぶん

殴っているタイプである。ダレンシアンはホットレーサーの前の世代に力を発揮していた超名豚の血を持つエリートである。ようするに実力のあるジャイアンの居ないスネオである。

「おやつ、そこに居るのは、確かマイネルサンダーの・・・ああ、そうだ思い出した。七光りでこのレースに参加できた場違いのマイネルピッガー君」

見つからないようにホットレーサーの影に隠れていたのだが簡単に見つかってしまった。

「やつやあ、久しぶりだね。ダレンシアン」

「ああ、2歳のころの養成所以来だね」

「うん、・・・そうだね」

競豚の豚達は2歳になると養成所に1年間入ることになる。そこでレースの基礎を学ぶのだ。マイネルピッガーとダレンシアンはこの同級生であった。ダレンシアンは超優等生、マイネルピッガーは劣等生であった。そのため、マイネルピッガーはダレンシアンが苦手であった。

「ところで、聞きたいんだが、今どいういう気持ち？」

「えっ？」

「いや何、実力を持ち合わせていないただ、父親の知名度だけで生きてきている君がだよ、こんな大舞台に出て、当然の最下位を取り大恥をかく気持ちだよ。僕なら死にたいけどね」

「えっうん、嫌だよ」

痛いところを突かれて碌な事を返せないでいた。

「はははっ、偉く弱気だね。まあ、こけて僕の邪魔だけはしないでくれよ。じゃあね」

言いたいことを言ってダレンシアンは子分である豚を引き連れてパドックの方へ歩いて行った。

「どうだ？」

ダレンシアンに散々言い負かされて俯いているマイネルピッガーにホットレーサーが話しかけた。

「どうだつて」

「悔しくないのか？俺は、悔しいぞ。あんな若造に馬鹿にされることだな。後、俺のライバルであったマイネルサンダーの子供であるお前が馬鹿にされることもな」

「悔しいですよ。でも、俺じゃあいつには」

「情けない。それでも男か」

「すいません」

「・・・親父があので悲しむぞ」

「そうですね」

ただひたすら弱気になってしまったマイネルピッガーに呆れホットレーサーもパドックへと向かった。

「俺の最後のレースだ。不甲斐ない戦い方はするなよ」

「・・・はい」

その後ホットレーサーに続きマイネルピッガーもパドックへと入って行った。

暗闇からの来訪者―番外編―（3）（前書き）

話の本筋と全く関係ない自己満作品3話目です。
あと少しだけタイトル変わりました。

暗闇からの来訪者―番外編―（3）

大衆に紛れてパドックを見つめるマルが居た。新聞とオッズで選んだマイネルピッガーを見るためだ。

「うむ・・・なんだあの豚。頭は垂れているし、尻尾に元気もない、何より目が死んでいる」

パドックに入ってきたマイネルピッガーの目はうつろになっていた。レースに集中できていない。外から見ても分かるくらいである。周りからも、マイネルピッガーはやっぱりだめだ、もう終わりだなどの声が飛んだ。

そんなマイネルピッガーの前にいたダレンシアンが話しかけた。

「なんだい、やる前からやる気がないじゃないか。一生こんな機会がないんだからやる気出してよ。そうじゃないと、僕の栄光のレースに泥がつくじゃないか。息子の君がそんなんってことは、もしかしたら君のお父さんは大したことなかったんじゃないのかい。あの老^{ホット}豚もあの頃も結構な歳だったから偶然勝てたんじゃないのかな。それなのに持ち上げられて簡単に故障しちゃって。実は雑魚だったんじゃないの？」

「親父が雑魚？」

頭を上げた。

「うん。昔のレースを見たことあったけど今の僕の方が数倍強いよ。あんな力に見合ってない走りするから簡単に故障するんだよ。雑魚豚は雑魚豚らしく、コソコソと最下位にならないように頑張って走ればよかったのね。あつそうだ君の愚かな父親と同じように無謀な追い込みをして故障しないようにね。完走できるようにがんばりなよ。ふふふふふ」

それだけ言うとダレンシアンは前に向き直った。その表情は勝ち誇ったように見えた。

「親父が雑魚・・・プチッ」

マイネルピッガーの頭の中の何かが切れた。尻尾を激しく動かし、大きく開かれた瞳は充血している。

「むお、なんだあの豚急にやる気を出したな。しかし、あの目何かを決心した目だ。うん、やっぱりあいつで決定だ」

マルは残りの金全部をマイネルピッガーの単勝に金と今後の人生を賭けた。

なけなしの金を持ち販売所に賭け音だ。買う際に一度受付の女性に、「本当に本当にマイネルピッガーの単勝でいいんですね、本当に本当に、ねえ、本当に、クレームとか受け付けないですけど、あなたずっと負けてるでしょ。本当に本当に本当にほんーとーにいいんですね!？」

と粘り強く確認された時はとても不安になったが自分の決断を信じ購入に踏み切った。後ろに並んでいたおっさんにも嘲笑された。よっぽど皆マイネルピッガーが来ないと考えているのだろう。

「大丈夫、いつも信じている俺の目を信じろ俺。信じ続ける」

やっぱり手堅くダレンシアンを買って少しでも稼いでおくべきだったかなと少し後悔していた。あの時あしておけばと後悔しだすと、どんどん考えが迷宮入りしていき、今では競豚なんかせずに、サナエと食べ歩きをしておけばよかったと考えるほどになっていた。

重賞レースだけのことがあり、気がつくと会場は人でいっぱいになっていた。360度全てが人で構成されている。皆この冬季記念を見に来ている客である。遊びで来ている者、のめりこみ素人よりもかける金額が違う競豚好き、マルと同じように目を血走らせ人生をこのレースにかけている者。多種多様な人間がそれぞれの事情を持ちこのレースが始まるのを待っていた。これだけの人がいると、このレースで言いたいだけの金が動くのだろうか。マルには一生かかっても手に入らない金額であることは間違いない。将来生まれ変わったら競豚場を経営する人間になりたいとマルは思った。

大金で雇われたプロのオーケストラによるファンファーレが会場中に鳴り響いた。レースが始まる合図である。レースに参加する豚

達が1匹ずつスタートゲートに入って行く。

その際、ホットレーサーはマイネルピッガーの方を窺った。パドックに出る前に冷たくしてしまい、落ち込んでいるのではないだろうかと心配したからだ。

「大人げなかったな。せつかくの最期のレースなのに気の悪いことをしてしまった。あいつは大丈夫だろうか・・・んっ？」

先ほどのマイネルピッガーはそこにはいなかった。ハの字眉毛がVに変わっている。そして、全身の毛が逆立っていた。

「・・・何があったか知らんが、どうやらいらん心配だったな」

頭を切り替え、ホットレーサーは後悔がないように自身最後のレースに向かった。

暗闇からの来訪者―番外編―（4）（前書き）

あとちよつとでこの自己満番外編も終了です。

暗闇からの来訪者―番外編―（４）

全ての豚がスタートゲートに入った。そして、機を見てゲートが開放された。レースが始まった。

一斉に１６匹が飛び出した。飛び出しは全匹同位置であったが、少しすると前集団と後ろ集団に分かれた。前集団は最初に飛び出し逃げ切りを図る走法、そして、後ろの集団はゴール直前で溜めていた脚を一気に爆発させ追い込みをかける走法。主にこの２つに分かれるのだ。トップ集団にはホットレーサー、中盤にダレンシアン、そして、最後尾にマイネルピッガーがついていた。ダレンシアンも追い込み豚であり、ここ最近のレースでは逃げ切りを図るホットレーサーを何度も差し、逆転勝ちを収めていた。そのため、この展開になった瞬間誰もが、ダレンシアンの勝利を予感していた。

「はあっはあっはあっ、今日は調子がいい。全盛期のころのようだ。脚が思った通り動く」

ホットレーサーはいつもと調子が違う脚に驚いていた。ここ最近、水の中を走っているような重さを脚に感じていたが、今日は違う。とても軽く疲れを感じない、非常に良い状態である。

勝てる。ホットレーサーは確信していた。

「くっ、なんだ年寄りめ。いつもならこの辺でペースが落ちてくるはずなのに、落ちるところか速さが増しているじゃないか。くっ計算が狂った。このままじゃ差し切れない」

いつものホットレーサーを想定して走っていたため、中盤を走るダレンシアンは困っていた。２匹の間にかかなりの距離が空き、ゴールまでの残りの距離を考えると追い抜くのは難しい。

「くっ、仕方ないおいつ」

ダレンシアンは並走する子分豚２匹に声をかけた。

「へい、了解です」

何か耳打ちされた子分豚２匹はペースを上げた。

「んっ、なんだ今何したんだ」

後方でダレンシ안의不審な動きにマイネルピッガーは気付いた。レースの勝利を無視した体力の限界までペースを上げた子分豚2匹はホットレーサーの横に付き挟み込んだ。

「なんだこいつら、勝つ気ないのか」

2匹の走りに不信感を感じたホットレーサーであったが、久しぶりの絶好調に酔いしれ、一瞬注意しただけでまたレースに戻った。しかし、これがいけなかった。子分豚2匹はゆっくりとホットレーサーとの間隔を狭めていく。

「よし今だ」

子分豚2匹は大きくホットレーサーに飛び込んだ。

「なっ」

両側から体当たりされホットレーサーは大きくバランスを崩した。踏みとどまろうとするホットレーサー。しかし、さらに2匹は追い打ちをかけた。1匹が前脚にもう1匹が後ろ脚に体当たりをした。

「くそっ」

走行妨害によりホットレーサーは子分豚に巻き込まれ転倒した。それに巻き込まれ先頭集団のほとんどが転倒した。中盤のダルメシアンはこの状態のことを想定していたので他の豚とは違い、巧みにこのトラブルを回避した。また後方のマイネルピッガーは離れていたため巻き込まれることは無かった。

「ホットレーサーさん！？あいつらやりやがった」

子分豚2匹が妨害をしていたのを見ていたマイネルピッガーが叫んだ。視線をその奥に移すとダレンシアンが大きく笑っていた。

「あっははは。じゃあな老豚。1位は僕のもんだ」

「あいつが仕向けたのか」

心にある何かの2本目が切れた。マイネルピッガーのスピードが上がった。前方で転がっている集団を抜く瞬間、ホットレーサーと目があつた。

「ホットレーサーさん！」

「マイネルピッガー。すまない。俺はもう駄目だ。後は任せたぞ頼む仇を取ってくれ。お前の脚をこの俺に、最後にこのレース上で見せてくれ」

「はい」

最後の3本目が切れたマイネルピッガーはさらに脚の回転を速めた。

レースは終盤に差し掛かっていた。最終コーナーを曲がり、残すは直線だけになっていた。ここからが追い込み豚達の本領発揮場所である。

中盤集団であったダレンシアンはスピードを上げ後続豚に1匹差をつけ単独1位になっていた。

「よし、もらった。ここから僕を抜ける豚はいない」

ダレンシアンは勝利を確信していた。彼の頭に今あることはどれだけ差をつけて勝つかということである。大差をつけ後世に残るレースにしてやろうと考えていた。独走態勢のダレンシアンは後方を見る余裕もあった。後続豚はあの転倒により冷静さをなくしていた。

「よしよし、大丈夫だな」

ダレンシアンは振り向き直った。

ダレンシアンが再び正面を向いた瞬間マイネルピッガーがダレンシアンの後方で2着に躍り出た。他の豚が転倒騒ぎに驚き脚を抑えたため、抜き去ることができたのだ。

「今だ」

後ろを向き少しスピードを落としたダレンシアンを見た瞬間、マイネルピッガーは溜めに溜めた脚を爆発させようとした。

その時だった。脳裏にマイネルサンダーのあの日のレースがよぎった。力を出し切り、脚を故障し2度とレースに出られなくなった父。それが頭に浮かび、脚が言うことを聞かないでいた。

「なんでだ。なんでだ。走れ。走るんだよ」

しかし、脚は言うことを聞かない。それどころか減速しようとしている。頭には常に倒れた父親が浮かんでいた。そして、落ち着き

を取り戻した後続の豚達が追いついてきていた。

「くそ、追いつかれる」

マイネルピッガーも後ろを向いた。

あるものが弱気な豚の視界に入った。

転倒したホットレーサーがずっと後方で走っていたのだ。速くは無いが、なんとか追いつこうと右後ろ脚を引きずり走っていた。

「お前の脚を見せてくれ」

この言葉通りマイネルピッガーの脚を見るためホットレーサーは怪我をしてもなお立ち上がり走り出していた。

「・・・うん。いけるよな。いや行け、俺の脚、限界を出し切れ！」

マイネルピッガーに搭載されていたハイパワーエンジンが高速で起動し始めた。地面にめり込む脚が深くなり、蹴り飛ばす土の量が増えた。それにより一歩一歩の距離が大きくなる。それに加え、脚の回転数も増える。マイネルサンダーを彷彿させる追い込み脚が爆発した。

先ほども追いつこうとしていた後続豚を大きく引き離し始める。最高速度なぞ存在しないのではないかと思えるほどマイネルピッガーは加速し続けた。あつという間に、につくきダレンシアンに並走した。

「なんなんだよ。なんでお前がここに居るんだよ・・・マイネルピッガー！」

並走したのは一瞬だった。油断したダレンシアン、底力を出したマイネルピッガー、2匹のスピードの差は歴然であった。マイネルピッガーの頭がダレンシアンより前に出た。そのまま抜き去り。ゴール前ではマイネルピッガーの独走態勢になっていた。

「ああ、それだ。それが、俺の見たかった脚だ。あの時、敵でありながら俺を魅了した脚だ。最後に見られてよかったありがとうよ。

マイネルピッガー」

気力だけで走っていたホットレーサーはマイネルピッガーの走りを見て笑い、そして、倒れた。

ゴールラインを切ったマイネルピッガーは大歓声を体に受け、優勝の感動を噛みしめた。

「勝った。俺が・・・この俺が。はっホットレーサーさん」

倒れたホットレーサーの方を見るとすでに人間に運ばれレース場にはいなかった。

「・・・ホットレーサーさん。ありがとうございました」

空を仰ぎ呟いた。

「なんでだよなんでこの僕が、負けるんだよ」

辛酸を飲まされたダレンシアンは怒りに狂っていた。格下の豚に負けたことが信じられないのだ。

「なんでだ・・・」

その元にマイネルピッガーが近寄った。

「簡単だよ。お前が・・・雑魚っ！だからだよ・・・あっははははははじゃあな雑魚」

ここで、称えるセリフを言うのが正道であり王道かもしれないがマイネルピッガーは自分に正直な奴であった。

そして、その後だが、ホットレーサーは種馬となり雌馬にモテモテの幸せな人生を送るようになる。ホットレーサーはこう語る。

「現役だったころは魅了されたのはマイネル親子の2度だけだったけど、今は毎日魅了されっぱなしだ」

すっかり腑抜けになっている。

屈辱の敗北を喫したダレンシアンは来年の冬季記念でリベンジするために特訓の日々を送ることになる。歴史に残るレースをしたマイネルピッガーは重賞だけに強い、無駄に勝負強い目立ちたがり豚となるのであった。

「ああ、36回の冬季記念？よくよく考えたら楽勝だったね。もう俺、親父超えただろ、うん超えたよね」

と調子こいたことを言い続けているらしい。まあ、翌年突然現れたディープリンパクト的な豚に完敗するのだが。

暗闇からの来訪者―番外編―最終章（前書き）

超久しぶりです。とりあえず進路が決まったのでできるだけこの更新に専念したいと思います。

暗闇からの来訪者―番外編―最終章

「取った。取ったぞおおおお！良くやったマイネルピッガー、俺が見込んだ通りだ。流石俺、流石俺の瞳もう決めた俺は一生お前を疑わないぞ。赤なら赤、青なら青と信じ続けるぞ」

マイネルピッガーの覚醒、ダレンシアンの画策によりレースは大荒れとなった。飛び交う罵声とハズレ馬券。場内は騒然となっていた。当たり券の配当が表示された時、さらに場内は騒がしくなった。複勝（買った豚が3位以内に入れば当たり。しかし配当が安い）以外の馬券が全て高配当であったのだ。もちろんマルが買ったマイネルピッガーの単勝も高配当である。

「うおおおお、あれ、確か俺」

豚券は買った金額分配当金が倍になるのである。マルが一番安い紙幣で買ったため、オッズの金額が10倍になるのである。

「ききききたああああああ。やった。元あった金額をはるかに超えている。よしよしよし。このまま豪遊と行きたいところだが、こは一度換金した大金をサナエに見せて自慢してやろう。そして、指をくわえて待っておきなと言って夜の街に遊びに行つてやる。うん、よしそうしよう」

たった1枚の最低価格の紙幣が最高価格の紙幣10枚に化けて返ってきたのだ。キャラが崩れ、女性10人に聞くと9人に生理的に無理と言わせるほどの有頂天になるのも無理はない。ちなみに残りの1人は異性として見れないと言う。

「うふふふ」

大金を大事にポケットに収め、宿の帰り道で襲い来る数々の欲望と強盗と戦い続けた。途中、あれ隙の第4期フィギュアコンプリートセットに心と財布を持つ手が動きそうになったが、サナエの悔しがる顔を見るためなんとか打ち勝ち宿に辿りついた。

「おーい見ろよこれ。この大金。これ俺が稼いだんだぞ……」

「何これ？」

両手で札を扇形に開きドアを蹴り開けたマルの眼前には、椅子に座り短剣を持つているサナエとワイヤーでぐるぐる巻きに縛られ頬を腫らして眠っている少女がいた。

「あっすいませーん部屋間違えました」

異様な光景にマルは自分の瞳を疑った。

暗闇からの来訪者（6）

「えっ何？誘拐？お前、前から言ってるだろ。犯罪をする時は先に俺に言えって。ああもうどうするんだよ。身代金でも要求すんの？やめとけやめとけ、ほら金見てこれ金。なっ、これでいいだろ。よし分かったな、なら早速このか弱き少女の自由を奪っているワイヤ―を外して元の場所に返してこようか。うん1人じゃ行きづらいか分かった俺も付いて行って頭下げてやるから。なっ」

サナエが極貧生活に嫌気がさし身代金目的の誘拐をしたと勘違いしているようだ。顔色は蒼白し、大量の汗を浮かべている。息遣いもどこか荒く、今にも過呼吸に陥りそうになっている。

「アホ、ちゃうわ。金稼ぐんやったらこんな手間かけずにもっと單純に高そうな貴金属つけてるセレブババア襲うわ。ちゃうちゃう誘拐ちゃう、実はな、かくかくしかしか」

かくかくしかしかとたった8文字で3話分の出来事をまとめ説明した。実に便利な言葉である。

「うむ。つまりあれだな、お前がこの街で出会った男に恋をしたのは良いのだが、その男には彼女が居てその彼女がこの子なんだな。そして、お前は恋敵である邪魔な少女を亡き者にしようとしている所に俺が入ってきたんだな」

表情は落ち着いているが、まだ脳内は絶賛混乱中のようなのである。

「ちっがーう。ええ加減にせんとドツキ回すぞ」

「分かってるって、その少女が昨日の刺客なんだろ。うんでお前が返り討ちにした。しかし、殺すことはできないし倒したままにしておけば、また襲ってくるかもしれない。だから縛って監禁してるんだろ」

「そうそう。監禁って言葉世間体悪いけどな」

「見る者が見たら確実に犯罪者だな」

その時であった。絶対に入ってきて来てほしくない状態、エロ本をコソ

コソと読んでいる中学生状態と呼ばれる状態の部屋のドアが開いた。
「失礼します。夕食は………あっ………失礼しましたあ」

ビーフオアフィッシュと国際線のキャビンアテンダントのように注文を聞きに来た宿の店員が何か見てはいけない物を見てしまったと慌てて部屋を飛び出して行った。その動きを見ると同時にマルの体は反応し、店員に向かっていった。

「違うから違うから、犯罪じゃないから誘拐じゃないから、ただ……そのあれ、ド変態的なプレイをしようとしていただけだから。うん、決して犯罪的なものじゃないから変態的なものだから安心してね、ねっ」

逃げだそうとする店員の腕を掴み、マルが混乱しつつ仮に納得されても損しかない言い訳をするのであった。悪いことにこの男の目が大きく開かれ瞳孔も開いていた。さらに先ほどの汗がまだ引いていなかった。ますます、不審者に見える。

「いやああああ、変態も犯罪もどっちもいやああああああ。そっその私見てないです。何も見ていないんです。だから殺さないでください、もしくはそのプレイに巻き込まないでええええ」

腕を掴まれた女性店員は命の危機に瀕しているかのごとく暴れ回った。腕を振り回し、マルの手を外そうとする。

「ちよっマル暴走してるから。もうちょい良い言い訳あったやろ」

「えっとあのその………そうだ。実は人体実験の方を」

「わっ私に触るな、このド変態がああ！」

涙目の店員のスナップのきいたビンタがマルの頬を打ち抜いた。綺麗に強振で真芯を捉えられたマルの体は回転を始め、宙を舞った。そして落ちた。

「二度と私の目の前に現れるな！後ビーフオアフィッシュ！？」

「フィッシュでお願いします」

あまりの迫力に2人は押され、ビーフを食べたいところフィッシュを注文してしまった。

「おう！待っておけよ」

「「はいつ、ありがとうございます姉さん」」

劇画タッチになった店員は注文を取り部屋を後にした。

「はあ、痛い。右耳の鼓膜破れたかも」

ビンタがあまりにもきれいに決まったようでマルの右耳は聞こえづらくなっているようだ。

「良かったやん。ド変態の方信じてもらえて」

「・・・複雑な気持ちだ。もう少し、良い言い訳があったよなあ。

例えば、マジックの縄抜けショーの練習中だとか。しかし、どうするんだその子、このままにしていともいかなだろ」

この大騒ぎの中、未だに気絶している少女を指さした。この少女ある意味大物である。

「うーん。とりあえずもう一回襲いかかってこられたらかなわんから、私の目に届く場所においとこってことになってんけど、先々のこと全然考えてへんかったわ。やっぱりここは覚悟を決めてバラすか、それともどこか遠方の方に運んで行ってこのまま放置するか」

「主人公の言う言葉じゃないな」

なんて、一向にストーリーが進展しない会話が飛び交っている。

暗闇からの来訪者（7）（前書き）

長かったこの殺し屋シリーズも終了です。

暗闇からの来訪者（7）

ようやく刺客の少女が目を覚ました。どうやら、先ほどの大騒ぎのせいで半覚醒していたようだ。

「こっことは・・・はっ」

一瞬で覚醒し状況を把握した刺客の少女はアクションを起こそうとした。流石戦いなれているだけである。しかし、刺客の少女を束縛しているワイヤーがその行動を阻害した。

「おはようさん。どう、調子、しゃべれる？」

「・・・何？」

「何ってえらい余裕やな。起きぬけの質問でごめんやけど。なんで私襲ったん？」

「・・・・・・」

無言。刺客の少女はただサナエを見つめるだけ。その瞳は何も考えずただ茫然と見つめている感じである。

「なあ、なんでなん？」

「・・・・・・」

無言。少しドスの効いた声での質問だったが、少女は物怖じせず、ただサナエを見つめている。

「ちよおっ、聞こえてんねんやろ？さっき応えとったやん。何って、なあ」

「・・・・・・」

無言。ピシッと空気が割れる音がした。この部屋の隅っこを探せば、空間に走るヒビが見つかるかもしれない。そして、そのできた隙間を見ると異界の者と目が合うかもしれない。

「ええ加減にせええよ。それ以上黙るんやったら、顎にもう一発決めるぞこらあ！」

「こらこら、話を聞くんたる暴れるな。と言っかお前短気すぎるぞ。落착け」

マルは、今にも襲いかかりそうなサナエを抑え込み、なんとかな
だめようとしている。

「触んな、訴えて賠償金取るぞ、この性犯罪者！」

「何っそんなにキレてんの？確かに今金あるけど。ちよっ、お前も
これ以上こいつを怒らせるなっつて、矛先全部俺の方に来るんだから」
刺客の少女と、サナエの肘が頬に決まっているマルの視線があっ
た。

「・・・！？」

瞳が直線で結ばれて数瞬、刺客の少女の体の中の何かが弾けた。
そして弾けた物からあふれ出る液体が体中に一瞬で行きわたり体を
温める。それは体に変化を起こし少女の頬を赤く染めた。

「えっうあ。何これ」

初めての感情、初めての体の変化により刺客の少女はしどろもど
ろになっている。

「うん、どうした。どこか痛むのか？顎か？そうだろう痛いだろう
な、こいつの力で殴られたもんな分かる分かるぞ。俺も幾度となく
食らってきたから良く分かる。とりあえずワイヤー外しておくか、
このままだと痕が残ってしまうからな」

確かに顎にまだ痛みがあつたが、今はそんなことより自分の体の
発熱に気がいつている。マルの声さらにワイヤーを外すマルの手が
触れるたびにさらに体温を上昇させる。そこらの医者に見せると迷
わず風邪ですと診断されるほどの熱さである。今、少女が口に水銀
体温計を咥えていれば赤い液体が急上昇するほどだ。

「うっ、だっ大丈夫」

なんとかかひり出した言葉であつた。残り少ないマヨネーズを出す
ように少しだけ絞り出た。

「そうか。それは良かった顔に傷が残ったら大変だからな。俺はマ
ルグロリア。君は？ああ、話したくなければ話してくれなくていい。
強制はしない」

さっきまでの府抜けた面のマルはどこかにいき、今はキリっとし

た眉毛を顔の上部に持つ凛々しい青年マルになっていた。最近府抜けてばかりいたせいか眉の筋肉がひきつっている。この後顔面筋肉痛に苦しむことになる。

「なあ、なんか、全然私と扱い方ちゃうやん。一応その子敵やで。まるで、シャボン玉に触るようにソフトタッチやん」

「うっさい。俺はこの世界に住む全ての女性に優しくすることをモットーとしているのだ。敵だろうが親の敵だろうが異世界の生物だろうが、どんな女性でも優しくするのだ。それが俺の座右の銘であり生きがいなのだ、分かったか！」

両手を広げ講釈するマル。どこか自分の演説に酔っているようだ。

「私も女やつちゅうねん」

「いや、腕相撲で両手の俺に勝っちゃう奴は女性じゃない。ゴリラ科のメスだ」

サナエが次の言葉を話そうとした時、

「クイナ」

刺客の少女が口を開いた。もしも少し遅かったら2人のどうでもいい中身のない罵り合いにかき消されていただろう。それほど小さな声であった。

「んっ、クイナ、クイナって言うのか？」

顔をグイッと寄せてくるマルから視線を逸らし刺客の少女は首肯した。

「じゃあ、よろしくなクイナ」

右手を出し握手を求めるマル。それを見て、おずおずとどうするか考えているクイナ。なかなか握手をしないクイナ。握手を決心したクイナ。手をおずおずと差しだすクイナ。

「あんだなんか触りたくないって」

しかし、サナエの一言を聞きマルは

「うっさい、さっきの変態がまだ尾を引きずってんだぞ。お前はなんでそうデリカシーがないんかな」

と言って手を引っ込めてしまった。空振りしてしまったクイナの

手は行きどころをなくした。

「あつ……しゅん」

マルと握手できなかったことが余程悲しかったようである。差しだした手を引っ込め見つめた。

「ところで、クイナ。君はなぜこのサナエの命を狙ったのだ。何が原因だ。あれか、こいつがぶちのめした被害者の関係者か？」

先ほどサナエが聞こうとしていたことである。さき程と一転してクイナは即答する。

「違う。私は殺し屋。殺し屋ギルドにそのサナエの暗殺依頼があったからそれで」

殺し屋ギルドとは殺しを生業とする者達と殺しを頼もうとしている者達の仲介をする組織である。およそ1000人の殺し屋が所属している。

「暗殺？うむ、依頼者は分かるのか？」

「ううん。分からない。私たちはただ来た依頼を遂行するだけ。依頼人と直接会うことは無い」

「うむ。では君はサナエを暗殺しなければどうなるんだ？」

「仕事失敗は大罪。ギルドが私を殺害する依頼を出す」

「なんと言っことだ。……仕方ない残念だが、おいサナエ」

マルが、サナエの方を見る。要するに仕方ないからお前死ねと言っているのだ。

「いやいや、絶対に殺されへんからな。なんやねんお前の言い方、コーラ買って来いの軽い言い方すんなや」

乱心したサナエが今にもマルに飛びかかりそうになっていた。その殺意を体で受け止め、冷や汗をかきながらマルはクイナに話しかけた。

「ううむ。なんとか、両方生きる方法は無いのか？このままだと？君が始末されるか、？俺が君を守ろうとサナエを殺すしか選択肢がないのだ」

「もう1つ選択肢あるで、？襲いかかってくるお前を私がぶっ殺す」

「選択肢はこの3つだ。ちなみに選択肢？は実現不可と思ってもらってもかまわない」

ピースで差し出した指をサナエの言葉により3本に変え、クイナの方に突き出した。

「大丈夫。もう1つ選択肢がある」

クイナは指を4本立たせマルに向けた。ほとんど開かれた少女の手の平はタコができている。今まで訓練していたことが分かる。

「なぬっ、それはどういった方法だ？」

「殺し屋ギルドは信用よりも利益を優先するお金第一の機関。だから依頼金の2倍の額があればキャンセルすることが出来る」

お客さんがあつて成り立つ仕事にも関わらず自分たち優先に考える機関である。信用が無く依頼が来ないのではないかと思われるが、キャンセル以外でターゲットが生き延びることが今まで無く、成功率100%を誇るのだ。そのため、依頼が減ることは無かった。

「いくらかかる？」

「これだけ」

とクイナは両手を広げた。偶然の一致、運命の合致、クイナが出した金額はマルが先ほど競豚で勝ち取った大金と同額であった。

「・・・マル確か、さっき大金持ってたやんなあ」

「嫌だ」

「マール」

母親が悪さをした子供を呼ぶ時の猫なで声。

「絶対嫌だ。これは俺の金だ。あれ隙のコンプリートセットを買ったんだ。それで、余ったお金で綺麗なお姉さんといちゃいちゃするんだあ」

札を胸に抱きかかえマルはひな鳥を守る親鳥のようになっている。我が身を省みず金を守ろうとしている態勢だ。

「ふう。マル、見てみ。黒い服着ているから分かんと思うけど、この子結構おっぱいでかいで。多分DかEくらいあるかも」

「へっ？」

悲しき男の性。釣りだと分かっているつもりで行ってしまう。もちろんマルも例外にもれずクイナの胸元を見てしまう。

「そっそんなに自信ない」

頬をさらに赤らめたクイナが胸元を隠した。本人が言うとおりサナエが行っていた程のサイズではなく、大きいというにはちよつと無理がある。

「あれっ・・・それほど・・・ぐふっ」

サナエの手刀がマルの首元を襲った。不意を突かれた攻撃のため、ダメージがかなりのものであったようでピクリとも動かなくなってしまった。

「たく、ちゃっっちゃ出せばええねん」

マルのポケットを探りサナエは金を取り出した。一度、札を数え金額があることを確認する。言葉を使わない分そんじょそこらの不良よりも質が悪い。

「ほら、これでええやろ」

気を取り戻し痛みで悶え苦しんでいるマルを余所に、サナエは金をクイナに手渡した。

「・・・依頼キャンセル確認した（いらっ）」

受け取ったクイナだがどこか表情は面白くないと言った感じである。

「ほなこれで、じゃあねえ。食べ歩きの手続きしてくるわあ。まだ食べしていない特産品いくつもあるから」

死の恐怖から解放されたサナエは足取り軽く部屋から出ようとしていた。

「でも・・・個人的に私はあなたを狙い続ける」

突然の死刑宣告である。それじゃ今から抜き打ちテストを行うと告げられた小学生と同じ心境に立たされている。

「なっなんでえ！？ちゃっ、ちゃんとキャンセル料払ったやん」

「確かに依頼はキャンセルされた。でもここから先は私の個人的なもの。ただ単にあなたにあんな負け方をした自分に腹が立つ。だから

らただの恨み」

「そそそんなあ。ならお金返して」

サナエは足取りを乱し、クイナの傍に寄った。鼻腔に女の子独特の香りが通った。

「だめ。もう受諾された。でも今日のところは分が悪い。武器無し顎痛いから。今日帰る」

「そんな簡単に帰すかあ！」

ベッドから起き上がるクイナを抑えようとサナエが襲いかかる。

しかし、簡単にそれをかわしクイナは窓際に立った。

「それじゃあ、また・・・来る」

クイナは一度マルの方を一瞥し頬を赤らめ姿を消した。窓から飛び降りたクイナを追おうとサナエも身を乗り出すが、マルがそれを羽交い絞めにし制止した。

「放せえええ」

サナエは体を捻りもう一度マルの首へチョップを食らわせる。同じところにもう一度ダメージを食らい、さらに悶え苦しんだ。

倒れているマルは考えるのをやめた。結果としては刺客が襲ってこなくなっただけでもなく、ただ単に自分が首に2週間は治らない痛撃を食らい、さらに全財産を取られたということ。

「うーむ。しかし、なんでお前が襲われたんだろうなあ。結局何も聞き出せなかったな」

首をひねり考えるマル。

「むう。殺し屋やろあ。命狙われるなんてなあ。本気やん」

「結局、なんも分からんな。誰が何のためになんでお前を殺そうとしたのか」

「せやな。なんかおおごとに巻き込まれてそうやし。さっきみたいなんが起こる前に、ちゃっちゃんと元の世界に帰りたいわ。てか、あんたいつまで首捻ってんねん。そんな格好良くないで」

「好きで捻ってるんじゃない。どっかの誰かさんが強烈な手刀を食

らわせてくれたおかげで、こうしておかないと痛いんだよ」

「あんたそれ、刺客のせいちゃうか!？」

「だとしたら、大金を叩いて依頼キャンセルしたいところだ」

「残念。お金じゃキャンセルできないんやなあ。召喚者が要るんやなあ」

「知ってる。殺し屋よりよっぽど質が悪ことを」

鈴鳴らせば狐が黙る

全人口30人ほどの小さな村。若者が都会へ出稼ぎに行ってしまったので老人だけしか住んでいない。

その村で2人は一泊し、次の目的地に向け山を越えようとしていた。山はそれほど高くないので1日がんばれば越えられるほどである。

「うむ。さあ行くぞ。ここを越えれば。大きな街だ。早く若いぴちぴちの女性を見ないと俺は死んでしまう」

「こらこら、ここにおるやろ。若い女の子」

「・・・さあ行くぞ」

「がん無視かい」

いざ山に入ろうとしたその時。

「待ちなされ、あなた方、山を越えるつもりかの？」

80歳ほどの腰の曲がった老婆が話しかけてきた。後60年若かつたらとマルが嘆いていた。

「そのつもりだが、どうかしたか？」

見ればわかるだろと言いたくなつたがそこは常識人、しかと我慢した。

「この山は、人を化かす狐の魔物が出るんじゃ」

「狐の魔物、化け狐か？」

「そうじゃそうじゃ。それが山に入ってきた人間を化かすのじゃ。

今まで色々な被害者がいてな。馬糞を口いっばいに詰め込まれた者もいれば、崖から落とされた者もいたなあ」

「げっ、おばあちゃん、その化け狐なんとかならへんの？」

馬糞を口に含んだ絵を想像しサナエは気持ち悪くなった。

「心配ご無用。どのようにしてこの村の若者が都会に行っていると思うのじゃ。もちろん化かされない方法はある。これじゃ」

老婆は腰につけていた巾着袋に手を入れ、2つの鈴を取りだした。

「鈴？」

「そうじゃ、これはこの村で作られている特別な鈴なのじゃ。この鈴が出す音が狐の術をかき消すのじゃ。タダでやりたいところなのじゃが、私にも生活があつてのう」

悪徳押し売り業者の売り方をサナエは思い出した。

「ほんまに効くん？きかへんかったらクーリングオフやで」

「この村全員がこの山を越えるときに持つておるわ。良く考えてみい。仮にお主たちが私を疑つて鈴を買わずに山に入つてみる。もし偶然化け狐に会うことが無く山を越えることができた時、お主たちは、ああ鈴を買わなくて良かったと思うじゃろう。しかし、もし化け狐に遭つた時はもう遅いのじゃ。化かされている最中お主たちはずっとああ、あのおばあさんの言つとおりケチらずに鈴を買つておけばよかったと後悔するはずじゃ。それに、鈴を持たずに入り、化け狐がいつ出るのかと常に不安な状態にいるよりは、鈴を買ひ安心して山を越える方がよいじゃろ。のうそうじゃろ。私は鈴を売ることににより安全と安心を提供しているのじゃ。ほれどうじゃ？買うじやろ？」

年齢からは想像できないほどの饒舌っぷりですっかりサナエは老婆の話術に取りこまれていた。

「うん分かった。ほな、おばあちゃん2個ちょうだい」

「ほい毎度」

鈴業界の相場では考えられない金額を支払い、サナエは安心を購入した。

「ほほほ、後はそれを腰にでも付けて、常に音が鳴るようにしておくのじゃ。よいな、必ず音が出るようにしておくのじゃぞ」

老婆の念押しを受け腰にしっかりと鈴をつけた2人は、老婆に見送られ山に入つて行つた。

山に入り行程の半分くらいが過ぎたころ。

「えーんえーん」

こんな化け狐が出るような山にも関わらず、進行方向に小学校低

学年ほどの少女が1人でしゃがみこみ泣いていた。

「めっちゃくちゃ怪しいな」

「うむ。いかにもだな。おい見てみる。あの子供尻尾が生えてるぞ」
マルの言うとおり少女の尻からは毛でおおわれた尻尾が生えていた。尻尾は少女の、泣いている感情に反し良く動いている。

「ほんまや。しかも犬が喜んだ時と同じ動き方してるわ。私らを騙せるかも知れんからわくわくしてる感じやな」

「おい、ここは一丁、あの化け狐を懲らしめてやってはどうだ？」

「ほうほう、中々面白そうやんか」

「だろ。あいつの術にかかったフリをして騙してやろう」

「オッケー。それ乗った」

そして、2人は鈴を大きく鳴らすような歩き方をしつつ少女に近づいた。

「お嬢ちゃん。一体どうしたんだ。こんな山奥で危ないぞ。なんでも化け狐が出るらしいからな」

マルが声をかけると涙で瞳を潤ませた少女がこちらを向いた。後10年後ならマルがまた嘆いた。

「グスツ、えつとね。お父さんと来たんだけどね、途中ではぐれちゃって、グス」

いかにもと言った迷子理由である。引かれそうなおばあちゃんを助けていましたと言う高校生の遅刻理由くらいいいからである。

「ほほうそれは大変だ。一緒に探してやろう。なんせ俺は」

「幼女の味方やから」

「っておい違う違う。ラムダ警護団の人間って言いたかったただけだから」

「ちやうでお嬢ちゃん気をつけや。こんな大人がこの世に山程いてんねんから」

「ごく少数だよ。かつてに子供の心に非常識を刷り込むな。この子の親父に許可取ってからにしろ」

「許可取ったらええんかい」

「クスッ、お兄ちゃん達面白いね」

先ほどまで泣いていた少女はクスクスと2人の会話を聞いて笑い始めた。顔を袖で拭き少女は顔を整えた。もしこの少女が本当に化け狐でこれが演技ならば、かなりの役者である。

「ふはは。それでは行くとするか」

「うん。ありがとうお兄ちゃん」

マルは少女の手を取り、中腰で歩き出した。マルが手を取ると、少女の尻尾がまたパタパタと振られた。2人は傍から見れば兄弟にも親子にも見えるだろう。しかし、サナエには幼女誘拐犯にしか見えなかった。

「おい、当初の目的忘れんなよお……………やっぱあいつロリコンなんかなあ」

先に行く犯罪ギリギリの2人の後を追いかけるサナエは歩き出した。

狐がはしゃげばサナエが動く(2)

ある程度進んでいるとマルの歩くペースに合わせるために若干早歩きになっていた少女が足を止めた。相変わらず尻尾は元気に振られている。

「むっとうした。小便か？」

デリカシーのない男である。

「違うよ・・・あれ、なんだろ」

少女が突然空に向かって小さな指をさした。先ほどまで素晴らしい演技だったのにもかかわらずここに来て急に棒読みである。どうやら用意してきたセリフを言うのは苦手らしい。

「あれ？」

指が差す方向にサナエとマルは視線を向けた。空には何もなく、美しい青と真つ白な塊があるだけであった。

「なんもないけどなあ。なんやUFOでもおったんか」

「なんか空に光が飛んでいたの、もうちょっと見ていて」

もちろん、この時2人は何もなかったとは分かっていた。おそらく少女が今から自分たちを化かそうとしているのだろうと言うことを承知していた。しかし、騙そうとしている少女を逆に騙すにはある程度少女にペースを持たせることが大事だと考えていた。なので、少女の嘘にのったのである。

すると、少女は見上げているマルから離れた。そして、一度呼吸を整え、円を描くように両腕を動かした。ちなみにペガサス流星拳を打つわけではない。

「お兄ちゃん達こっち見て」

「「へっ？」」

「必殺幻惑朦朧拳！」

必殺幻惑朦朧拳。この少女が得意とする人を化かすための術である。しつこいようだが、少女は聖闘士フェニックスでもない。

「あつ……」

見事に必殺幻惑朦朧拳を食らった2人。しかし、そこは高値を出した鈴である。見事に2人は術にかかることなく正気保つことができたようで、両手をぐるぐる回して何をしてるんだこの少女はと言った感じで見つめていた。

「なんやねん、めっちゃかわいいやんけこの動き……あつ
そうか、術か」

2人は一度目を合わせ大きく頷いた。そして、目から力をなくし、術にかかっているような真似をした。マルなんか口から涎を流すほどの力の入れようである。

「やった。初めて成功した。やったやった」

化け狐は喜びのあまり立ちつくしている2人の周りを、尻尾を振りピョンピョンと飛びまわっている。さらに、少女は緊張が解けたのか頭部からはふさふさの耳が出てきた。その耳も左右に動いている。

あまりにも無邪気にはしゃぐ化け狐を見て、サナエはキュンキュンしていた。男勝りな性格だが、かわいいものには目が無かったのだ。

「あかん、かわいい。今すぐに抱きしめてめっちゃモフモフしたい」
「我慢しろ、それは俺も同じだ」

少女に聞こえない程度の小声で会話をする2人。

飯にマルが、サナエのしようとしていることを実行すると、マルの仲間の警護団が走って飛んできて、何の躊躇もなくマルを拘束し冷たい飯を食わせるだろう。

「よし、それじゃあ。えーと、お前、あたしの肩を揉め」
「はいかしこまりました」

指名されたサナエは少女の後ろに回り肩を揉み始めた。小さな肩を握りつぶさないように慎重に力加減をしながら揉んでいく。

「むー。そこそこ……ヒヤン！こら、そこ、こしよばい……うひゃ。むうつこらあ」

サナエの力が弱すぎるのか、あまりのこしょばさに少女は頬を赤らめ悶え始めた。このかわいらしい声がサナエの我慢ゲージを天元突破した。

「ブフツ！・・・もうあかん我慢できん」

鼻血を流しながら肩を揉んでいた手をゆっくりと前に動かし、少女を抱きしめる。少女の細く小さな体はすっぽりとサナエの腕の中に収まった。

「へっ、何？」

突然自分の命令と違う行動を起こされ、少女は反応することができず、簡単に拘束された。そのまま横に倒れサナエは少女の首に顔を埋め、クンカクン力始めた。

「ああっ、こらそこは肩と違う。ちよつと耳は触るなあ、こしょばいから。尻尾もやめろおおおお・・・あああ」

サナエの責めは、それはもう激しいもので撫でられていない部位は無いのではないかと思えるほど広範囲に渡るものであった。最初は抵抗していた少女であるが、次第に抵抗する力も弱まり、最後の方はなされるがままになっていた。

「むふう。満足」

サナエは顔中に少女の毛を纏わりつかせ、少女を開放した。その顔は何故か少しだけ男前になっている。

「はあはあ・・・むむむ、お前、肩揉めって言うただろ。それなのに、あちこち触って。むうう、なんでだ。術のかけ方が甘かったのかなあ」

少女は首を捻り本気で考え始めた。むううと唸るその姿もかわいらしく、サナエはもう一度襲いかかりそうになった。しかし、少女に見えない角度でマルに尻を蹴られ制止された。原因が分からなかった少女は念のため、もう一度幻惑朦朧拳をかけ、さらに命令を続けた。

「じゃあ、次はお前。あたしに何かおいしい料理を食べさせろ」
「了解です」

命令されたマルはリュックから数々の食材を取り出し、料理を始めた。料理が作られている間にサナエがお腹を鳴らせたのは秘密である。

数分もするとマル特製チャーハンが完成した。米は見事に卵でコーティングされ一粒ずつがバラバラにほぐれている。また、オリジナル性を入れたせいかな少し赤みを帯びていた。

「どうぞ、ご主人様。マルグロリア特製のトマトチャーハンです」

「うん。おいしそう。赤いのはトマトかあ。あーんパクツ。うんうんご飯がパラパラでおいし・・・きゃあああああ」

チャーハンを一口ほおばるや否や少女は悲鳴を上げのたうち回った。デパートでおもちゃをねだる子供なぞ比ではないほど転げまわっている。

「辛い辛い辛い！水、水ちょうだい」

チャーハンが激辛だったようだ。尻尾も緊急事態を現しているのかヘリコプターのプロペラのごとく回っている。今にも空に飛びそうな勢いだ。

「あつ、すいません。醤油とブート・ジヨロキア間違えて入れちゃいました。」

ブート・ジヨロキアとは世界一辛い唐辛子のことである。一体何のために何に使ったためにブート・ジヨロキアがリュックに入っていたのだらうか。

「間違うか。もうなんなのよお前らは。なんもできないじゃん。そのままじつとしてろ」

水を飲みようやく落ち着いた少女が2人を叱責した。命令に従うように2人は直立する。

「ふふふ。罰として今から落書きしてやる」

油性ペンを懐から取り出し、キャップを開けた。シンナーの匂いが広がった。

「よーします、女の方からだ。むふふ。ひげと額に肉って書いてやる」

少女は少し背伸びをし、サナエの額へとペンを向かわせた。その脚はプルプルと震えている。本当にギリギリなのだ。ペンを持っていない左手はバランスを取るためにサナエの服を握っている。しかし、そのようにして苦勞して上げられたペンが額に届くことは無かった。

サナエが少女の腕を額に届く前に掴んだのである。

「あれっなんで？」

「残念。実はかかってなかったんなぁ」

勝ち誇った顔で笑うサナエ。友達に約束を破られたかのような表情の少女。

「そっそんな。ずっずるいぞ。騙すなんて」

サナエは持ち前のフットワークで再び少女の後ろに回る。そして先ほどと同じように少女を抱きしめ拘束した。

「むふふ、騙される方が悪いのだ。と言うよりも化かそうとする方が悪いのだ。さてさっきはかかってるフリしてたから、本能の赴くままに本気でモフモフできへんかったんな。しっかし今はもう何も枷が無いから。やりたい放題できるわ、覚悟しいやぁ、ふへへへっへ」

その眼は草食動物を狙う肉食動物のものになっていた。

「いっついやあああああああ」

サナエの法廷に持ち込まれたら確実に刑に科せられるほどのセクハラは30分続いたのだった。

大きな狐と猟銃（3）（前書き）

今回はちよいエグイです。

大きな狐と猟銃（3）

「うつつう、おっ覚えてろよ。馬鹿あ！うわああああん」

ぐったりとしていた少女は一度頭を揺らして起き上がり、捨て台詞を吐き逃げて行った。途中思いつきり転び、涙を流しながら起き上がり走って行く。一挙動一挙動がかわいらしい少女である。

「むふう、ミツシヨンコンプリート。これで山の平和は守られた」

顔、服に少量の抜け毛を付けたサナエが達成感を感じ立っている。抜け毛の季節なら一体どれほどの量の毛が付いていたのだろうか。

「・・・平和が欲望のついで見えて仕方がない」

呆れながらも少しうらやましく思っているマルであった。俺もできるものならしたかったと。

「さて、先に向かおか。もう一回出てきてくれへんかなあ。今考えたらまだしてないことあったしなあ」

新たな愛で方を考案しているサナエと俺もやっておくべきだったかと後悔しているマルは山を越えるためにさらに進んだ。

モフモフの余韻を残したサナエ達の前にまたまた怪しい人物がいた。

先ほどと同じように尻から尻尾が出ている。しかも耳も出ていた。どこからどう見ても化け狐だ。一回鏡を見て来いと言っておきたいほどのおまぬけぶりだ。先ほどの狐の方が数段、人を化かそうとしている精神を感じ取れた。

ただ、先ほどと違う所がある。少女の姿ではなく大人の女性の姿であった。黒い髪の毛は腰まで伸びていて着物を着ている。俗に言う和風美人である。

「・・・いかん。タイプだ。もろタイプだ」

足を止めて見入ってしまうほどであった。その見入ってしまったマルは柄にもなく頬を赤く染めていた。

「お前はデッドボールでもストライクやろ。でも、どう見ても化け狐やで。まさか2匹おったとは、親子なんかなあ」

「・・・大丈夫だ。俺は子持ちでも問題ない」

流れてもいない鼻血を拭うジェスチャーを取った。出ていないことは分かっているが強く頭を打った人が手で触った後に血が付いていないかと確認するのと同じように拭った袖を確認した。

「その大丈夫やないやろ」

「分かっている。さっきと同じように鈴を鳴らして、術を無効化にする。そして、かかったフリをしてサナエがしたように俺が・・・むへへ」

サナエのかかと落としが、しんちゃん笑いマルの脳天を打ち抜いた。ついでにマルの額が大地を打ち抜いた。これでも流血しないマルの頭部はかなりの硬度をほこっているようだ。

「なんで？」

「生理的にあれやから」

「ごめんなさい」

かかと落としの衝撃で自然と寝土下座になっているマルであった。

「あの、旅人のお方ですか？」

和風美人が困った顔でこちらに近づいてきた。即座に、サナエ達は腰に付けられた鈴を鳴らす。再び山には無い人口の音が響いた。

「ええそうです。それがどうしましたか美しいお姉さん」

「そうですか実は・・・ふっ」

女性の雰囲気が変わった。開かれた瞳の瞳孔が縦に細くなり、髪の毛も重力に抵抗し、浮かび上がって来ている。そして、女性はマルとサナエに目を合わせた。

術をかけようとしているようだ。理解し2人は急いで瞳を逸らし、鈴をさらに盛大に鳴らした。

2人が瞳を逸らし、術から免れようとしたと同時に背後から銃声が鳴った。マルの耳の横を何かが高速で空気を切り裂き走って行った。「なっなんやあ!？」

突然の聞き慣れない爆音に気を取られていると、周囲に嫌な匂いが漂ってきた。血の匂いだ。

「ぐふっ、あああ」

化け狐の女性が胸を押さえて前のめりで倒れた。サナエ達の後方から放たれた銃弾が女性を襲ったのだ。倒れた地面には血の池ができていた。綺麗だった着物は血で彩られ、危なかしい美しさを秘めていた。

「一体何が」

銃弾が飛んできたであろう後方の茂みが動いた。

「おうし、どうだ。化け狐め」

猟銃を構えた猟師の五郎座衛門が姿を現した。マルとサナエはまったく気配が無かったことに驚きを隠せなかった。こういった人気のない場所を歩く際は、いつ何時襲われるか知れないので常に周囲に気を使って歩くようにしているのだ。それなのに五右衛門はまったく2人のアンテナにかからなかった。もし五郎座衛門が2人を殺そうとすれば簡単に殺せたと言うことだ。

「おめえら危ねかったな。あと少しでこいつの術にかかることだったぞ」

茂みの枝を乱暴に折りながら五郎座衛門は近づいてきた。そして、倒れ苦しんでいる女性に銃をもう一度向けた。

「おらあ、楽にしてやる」

とどめを刺そうとしているようだ。

「うりゃああ」

「うおっなにすんだおめえ」

サナエが体当たりしたのだ。不意を突かれた五郎座衛門は簡単に吹き飛ばされ女性から離れた。

「何をしてんねん！」

「何を言っただおめえ、殺すんだよ。こいつは人様を化かす害虫だからな。邪魔すんな。人間の姿してっけどそいつは化け狐だぞ」
「うっうっ……うっ痛い……いたい……死に……」

女性は何度か声を上げ、動かなくなつた。さらに血液は広がり水たまりが広がった。

「なんでえ、死んじまつた。呆気ねえな」

五郎座衛門は女性の死体を足で小突いた。その行動がサナエの最後の仏の顔を消した。

「何してんねん。おっさん。いつたいお前は何してんねん！」

動かなくなつた女性を見て、サナエが殴りかかった。左手で五郎座衛門の胸倉をつかみ、しっかりと右手を振り上げた。しかし、拳が振られることは無かつた。マルが腕を掴み止めたのだ。

「放せ、マル！」

マルはサナエとは対照的に冷静に話し始めた。しかし、腕を握る手の力が強くなつていくことをサナエは気付いた。怒っていると。

「獵師さん、あんたがしたことは正しいことだ。人に迷惑をかける生き物を駆除する。これは、大きく見れば農作物に害を加える虫を退治することと同じだ。だが、なぜだろうな。そう言うことは分かっているんだが俺が人間として未熟だからかな、今むかつて仕方がない。すまん。これはただの、俺のわがままだ」

大きく振りがぶられた拳は五郎座衛門の頬に打ち込まれた。殴られた五郎座衛門は大きく後方に吹き飛び後方回りを三度しようやく止まつた。

「なつなんだあ、いきなり何すんだおめえらは。俺は村の人間に頼まれてこの化け狐を退治しに来たんだ。それをかばうてこたあ・・・もしかしたらおめえらも化け狐だな。そうだそうに違いない。おい、みんな化け狐が2匹ここにいるぞあ」

五郎座衛門が大声を上げると突然、周囲に獵師たちが集まりだした。それぞれが獵銃を携えていた。サナエ達はいつでも戦えるように身構えるが、ともに戦つてもかなう相手ではない。人数も殺傷能力も攻撃距離も全てが不利なのだ。だが、一歩も2人は引こうとしなかつた。

「なんばしよとか五郎座衛門」

五郎座衛門の幼馴染の田子之助が話しかけた。先ほど狩ったのか
小さなウサギを何羽か腰にぶら下げている。

「おう、よく来てくれた。さっき、化け狐を退治したんだがな。ほ
れその」

五郎座衛門は猟銃で動かなくなった女性を指した。銃で撃ち抜か
れた女性はピクリとも動かない。

「おう、すごいじゃねえかあ。早速、村に帰って報告だあ」

「おうよ。しかしよあ、こいつらが俺の狩りに文句をつけて殴っ
てきたんだ」

「なにい？」

「もしかすつとこいつらも化け狐かもしれねえんだが。どう思うよ」

「きまつとる化け狐だ。まっさか化け狐がこんなにおるとはのお」

「よっしゃ決まりじゃ。退治すんぞ」

「おうさ」

話が終わると一斉に猟師たちはサナエ、マルに向かって猟銃を構
えた。

猟銃を構えた。いや構え終える直前にサナエ、マルは攻撃に移っ
ていた。

6人いる猟師。その中の1人、イノシシの毛皮を着た男の猟銃の
内側に強力なステップでサナエは入っていた。そして、肘を一撃腹
に食らわせる。怯んだところにヘッドロックを仕掛け、こちらに銃
口を向けている1人に向かい投げ飛ばした。仲間を避けることがで
きない男は仲間を受け止める形となり銃口をサナエから外した。サ
ナエは、投げると同時に走っていた。そして、受け止めると同時に
飛び後ろ回し蹴りを食らわす。

この作品で初めてサンタフェを抜き戦うマルは、サンタフェを一
振り一閃させる。すると猟師の1人の猟銃の銃身が切断されていた。
続けて、近くに居る五郎座衛門の銃身を切り落とす。切られた両人は、
全く気付かなかったようだ。最初は非常に調子の良かった2人だが
そつも続かなかった。相手が悪すぎるのだ。相手は猟銃を使うプロ

である。そんじょそこらの素人とはわけが違うのだ。しかも人数が3倍ときている。とてもじゃないが2人がかなう相手ではなかった。獵師達は2人の攻撃が近接攻撃しないと知ると、銃が使用不能となった2人がサナエ、マルの前に立ちふさがった。獵師2人は鉈を取り出し、牽制してくる。その隙に残りの4人が大きく距離を取り、並んで銃を構えた。

「どっけ、五郎衛門」

「おうさ」

盾となっていた五郎衛門が横に大きく飛ぶ。田子之助の銃口から銃弾が発射される。

「まずい」

銃口の直線状に居るマルは急いで側転で横に避けた。普段五郎座衛門たちは、このようにグループで動くことが多かった。そして、銃弾の分担もしていた。一発のライフルタイプと、今田子之助が放った散弾タイプと。散弾のその範囲は通常の弾丸と違い面なのだ。

「ぐあああああ」

避ける距離が足りなかったマルの足先に散弾の数発が命中した。本来全てあつたはずの五指が無くなっている。吹き飛ばされたのだ。マルが自分の足の現状を確認すると同時にそれを待っていたかのように傷口から大量の血液が出始めた。

「よしや命中じゃ。とどめといくかのぉ」

空薬莢を抜き、田子之助はもう一度構えた。指を無くし踏ん張ることができずマルは避けることができない。全快でも避けきることができなかったのだ。次はくらうことは必然であつた。

「させるかあああああああ」

田子之助の側頭部に飛び膝蹴りが入った。そして、倒れこんだ田子之助にとどめの一撃で胸を強く踏みつける。胸を強く圧迫され田子之助は気絶した。

「マル、大丈夫!？」

「馬鹿野郎、早く逃げろ!」

「うるさい。あんた怪我してんんで、私1人でこいつら全員倒して・・・ガフっ・・・えっ」

乾いた銃声と共にサナエが田子之助の上から大きく後方に飛んだ。まるで背中に繋がれているワイヤーが急に引っ張られたかのようであった。

「へへへ、やったぞ」

猟師の1人が放った銃弾。それがサナエに当たったのだ。銃の衝撃でサナエは吹き飛んだのだ。

「ガハッ、うああああ」

銃弾は体の前面に当たり、サナエの生命維持に必要な器官をほとんど損傷させた。新たに作られた穴、元からある穴である口から大量の血液流れ出た。誰が見ても致死量の出血である。

「サナエ！サナエ！」

マルの悲痛な声にも反応せず、ただ、サナエの体はピクピクと波打っばかりであった。

「くそおおおおお」

マルはサントフェを杖に立ちあがる。傷ついた足は、機能せず、ただ付いているだけとなっていた。サントフェが無ければ今にも崩れ落ちそうである。立ち上がりなんとか前に進もうとするが、その間に猟師達は眼前に迫る敵に向かって攻撃の準備を整えていた。3人が一斉にマルに向かい銃を構える。

「いいぞ、撃つてみる・・・だが俺はタダでは死なないぞ」

「構うなあ、撃てええええ」

凶気をはらんだ音が鳴り響いた。爆発に押された鉛玉たちが次々とマルの皮膚を貫き体内へと侵入していく。鉛玉に解錠された体から血液達が脱走を始めた。

そして、マルはされるがまま銃弾をその体に受け、倒れた。

しかし、先ほどまでマルの体を支えていたサントフェがマルの傍から姿を消していた。撃たれる瞬間マルによって投げられたサントフェは主人の仇打ちのため、猟師の1人の胸を貫いていたのだ。

「はあはあ、サナエ・・・サナエ」

かすかに胸が動いているサナエの元にゆっくりと這い寄っていく。
手を伸ばし、手を握る。サナエも握り返す。

そして、2人の意識は途切れた。

針金ハンガーの輪に頭をつつこんだ時の痛み（4）

意識を失ったサナエの顔を何か冷たい細いものが這いずりまわっている。ナメクジかと思ったがそうじゃない。何か嗅いだ事のある匂いがする。

「なんや、天国か。にしてもえらい臭い所やな。なんかシンナーのにおいするし」

サナエはゆっくりと目を開く。そこには、かわいらしい少女の顔があった。

「これが天使か。なんか想像してたんと全然ちゃうなあ。もっと西洋風かと思っていたけど」

テレビでよく見る昔の西洋画を思い出していた。全裸の背中白い羽を生やし、頭に黄色い輪をつけた子供の姿を思い描く。

「あ、母様あ起きたよ」

横を向いた天使の首筋に赤いマークいくつか点々とあった。何か外部から刺激を受け出来た痕のようだ。母様とは神様のことなのだろうか。

「あれっ・・・あれって確か」

サナエは虚ろな状態で思いつく。17年と言う短い人生で造られた脳のアルバムを1ページずつめくっていく。幼稚園以前のページが減っていた。歳を取るにより小さいころの記憶が薄れてきているようだ。

「あつ、あれや・・・あんときの狐にモフモフした時の私のキスマークや」

まだ写真が1つも整理されていない最近のページで天使と思われた少女の姿を発見した。

サナエが上半身を起こすと、上に乗っていた化け狐の少女は跳ね飛ばされた。少女は見事に尻もちをついた。

「いったあ。何すんだ人間。お尻打っちゃったじゃないか」

少女が立ちあがり尻に付いた土を払う。ここ最近雨が降っていないせいか、水分を含んでいない乾いた土はいとも簡単に少女のスカートから離れていった。

「えっえっ、何とういうこと。確か、大人の狐が出てきて、そんなに急に猟師が出てきて、それで・・・私、撃たれて死んだはずなのに記憶はあるけど傷が無い」

脳に残った胸の痛みを思い出す。確かに自分は撃たれた。それは間違いではないということは確信を持てた。しかし、現実の自分は無傷であり、むしろ眠っていたので少し体が元気になっている。

「あらあら大丈夫ですか。頭は痛くないですか？」

優しい声がサナエをいたわった。アルファ波が出ているのだろうか聞くだけで気持ちが落ち着くような気がした。

「ああ、結構痛いんです。こうズキンズキンと側頭部が締め付けられるように・・・って、えっ」

猟師に撃ち殺されたはずの女性が立っていたのだ。撃たれたはずの胸はふさがっており着物も綺麗な状態であった。その外見は相変わらず美しく、女のサナエが魅入るほどであった。

「なんで生きてんの・・・撃たれたやん。私も、そちらさんも」

「ああ、まだ混乱していますか。どのように話せばいいか」

「その点は俺に任せてもらおうか。このバカ娘の扱いは慣れている」
先ほど、サナエと同じように集中砲火を浴びたはずのマルが平然と立っていた。美人の化け狐の前のせいか若干格好つけていることが窺える。

「マル!？」

「俺はお前より先に目が覚めて、そのリツコさんから説明を受けたのだ。いいか、彼女は化け狐だ」

「・・・それはあの人が撃たれる前から分かってたわ」

「それでだ。俺達はリツコさんに化かされていたんだ。覚えているか彼女が俺達をじっと見つめた時。あの時から俺達は彼女の術にかかっていたんだ」

「でっ！？なんでえ。だつて鈴があつたし、それにその前にこの子の術も効かんかったし」

横にちょこんとしゃがむ少女の襟を摘まんだ。もらわれてきた猫のように少女はおとなしかった。持たれ慣れているのだろうか。

「それはだな。そのガキは未熟で過去に何度も人を失敗しているらしいんだ。それで、見かねたりツコさんが細工をしたんだ」

「細工？」

「それがこれだ」

マルが腰に付けられていた鈴を掲げた。持ち上げられたことにより鈴が小さく鳴った。

「鈴？」

「ああ、なんでもこの鈴は術をかき消す効果なんか持っていないらしい。むしろ、術にかかりやすくする音を出すらしい」

「・・・と言つと？」

「こういうことです」

先ほどまで和風美人であつたりツコが老婆の姿に変わっていた。見覚えのあるその老婆は、2人に鈴を高値で売り付けた老婆であつた。

「あつ」

「つまりだ。リツコさんは娘であるそのガキのために、山に入ろうとしていた旅人にその鈴を売りつけていたんだ。それで、最初の客が俺達だった。しかし、予想に反し、鈴の力を持ってしても娘は俺達を化かすことができなかった。それどころか返り討ちに遭つてしまった。それで、泣きついてきた娘の頼みで俺達を化かしたんだ」
「しかし、鈴の力のせいで私の思っていた以上にあなた達が術にかかってしまいました。本当は、ちよつとの間だけ脅かそうと思つていたんですが。予想以上にかかつて、まさか気を失われると思わなかったです。ごめんなさい」

老婆から先ほどの和風美人に戻ったりツコが陳謝した。いえいえ、かかりすぎた俺達が悪いんですとマルがフォローを入れる。

「・・・ほうほう、なるほど、分かったわ」

完全に理解できているかどうか微妙な表情である。

「おうよく分かったか。だから俺達は五郎座衛門の気配に気づかなかったんだ。見事に完敗だ」

偉くあつさりしているマルである。どうやら、しょうがないこれほど完璧に化かされたのならぐうの音1つも出ないと言った諦めの境地になっているらしい。

「・・・そうやなあ。私もやな」

サナエも同じように状態になっている。ここがリツコに食ってかかって良かったのだが、先ほどの幻覚をもう一度見せられるのはごめんであつた。おそらく、リツコにはかなわないのであろうと察したのだ。

サナエは起き上がり、少女の頭を撫でた。少女はどこか気持ちよさそうな表情をし、サナエの行為を受け入れた。猫なら今にでもゴロゴロと言いそうである。

「しかし、自分ただけ未熟やねん。全然あかんかったやん。鈴あつてんやろ？それやのにまだまだやなあ。それになんやねんあの朦朧拳やつたけ？お母さん全然そんなせんかったで、目を合わせるだけやつたで」

「うるさい。あたしだってもう少し大きくなったら。母様みたいに背が高くなって、おっぱいが大きくなって美人になるんだ。そして、簡単にお前を母様みたいに化かしてやるからな、このお」

少女がサナエにぐるぐるパンチで殴りかかったが、サナエに頭を押さえられた。悲しいことに一生懸命振り回される腕は空を切った。池乃めだか状態である。

「せやな、もう少し大きくなったら危ないかもなあ」

「そうだ。だからもうちょっとここに居ろ」

攻撃をやめた少女が頭に置かれたサナエの袖を掴んだ。

わずかな間の出会いであるが、どうやら少女はサナエのことを気にいったようだ。しかし、どこに氣にいる要素があつたのだろうか。

子供は謎である。

「なんやねん、寂しいんか？かわいいなあお前は」

「そんなわけないだろ、バカあ！」

「はいはい、そう言うことにしとつたるわ」

少女にデコピン。少しだけ、赤くなつたデコを抑え少女は少しだけ涙目になつた。

「そうですね。サナエさんの頭痛が治まるまで、私たちの家で休まれませんか？騙してしまつたお詫びもしたいところですし。それに、そのまま街に出てしまつてはまずいと思いますし」

「まずい？」

「ええ」

「??？」

サナエは笑い始めた少女を見た。正しくは少女の右手に握られたマジックインキを。

「あつ、まさか」

かばんに入れている手鏡を取り出し、自分の慣れた顔を写した。最初に会つた時に少女がしようとしていたこと、そして今少女が手にしている物。リツコのそのまま街に出るとまずい。これらを繋げる。その推測を確信へと返る答えが鏡にあつた。

頬に書かれたナルトマーク、目の下には大きな隈。さらに繋がれた眉毛、ロボットのよう口端からまっすぐ下に引かれた直線、チヨビヒゲ。それらすべてが黒のマジックインキで少女の手で描かれていた。

「ぶははははは。もう我慢の限界だ。大変だつたんだぞ、お前の顔見て笑わないようにするのは。しかし、なかなか、絵心があるだろアイコは。」

アイコと呼ばれた少女は腹を抱えて笑っている。動かせるものは、尻尾、耳、腕、足と全て駆動させて爆笑している。

「ほはおう。なるほど起きた時なんか顔に冷たいもんが這っているなつて思っていたらマジックか・・・なるほど。と言うことは、お

いそのくそマル。お前、私がやられているん黙って見てたな」

「違うよ。マルは、ここにチョビヒゲを描いたらどうだって、あたしにアドバイスくれたよ」

純真無垢な瞳でアイコが言った。当の本人はこの言葉がどういった結果をもたらすのか当然分かっていない。ただ、真実を告げただけであった。

マルは、娘ができたらかう言ったときに応用の効く子供に育てようと誓った。

「余計、質悪いっちゅうねん」

今すぐにうちの団体にほしいとスカウトが殺到するであろうと思われるほど美しい理想のフォームで繰り出された延髄切りがマルへと放たれた。

鈴のオマケについてくる子狐

リツコによりサナエ達が術をかけられていた時、アイコもその現場に居た。物陰に隠れて、2人がやられている様を見るためだ。

「ふふふ、人間め。覚悟しろ。母様の術でギッタンギッタンにされちゃえ……あつ」

散々注意を受けたにも関わらず、不覚にもアイコはリツコの瞳を見てしまった。

しかし、仮にも化け狐なだけがあり、サナエやマルのように深く術中にはまることはなく、幻覚は見えているがそれを幻覚と認識することができた。

幻覚と分かっているとしても、やはり自分の母親が撃たれるところでは目を覆った。小さな少女にはショッキングな映像である。

母のリツコが撃たれ倒れた後。当初の予定では、リツコが倒されたことにより、2人は猟師に感謝し、山を下ろうとする。そして、ある程度進んだ所に、死んだはずのリツコが立っていて脅かすと言った幼稚なものであった。過去に幾度となくこの方法で旅人を脅かしてきた定番なのだ。

しかし、状況はリツコ達の想定外な方向に進んでいった。サナエが幻覚である猟師を攻撃したのだ。しかも続いてマルも。

ここから、幻覚はリツコの手を離れて勝手に構成されていった。2人が鈴の力も相まって、2人が気を失うまで幻覚は消えないようになっていたのだ。

見ているアイコにも2人の行動は予想外であった。相手は拳銃を持っている相手だ。その相手に対して攻撃する。どう考えても自殺行為とは思えない行動だ。相手が人差し指を少し動かせば、目の前で倒れている化け狐と同じようになるというのに。自分達に術をかけようとしていた化け狐が殺されたことで起こす行動ではない。しかし、2人は行動した。

「・・・・・・・・バカだ」

それを眺めていたアイコは笑った。

しばらくすると2人は銃で撃たれ気を失い倒れた。それと同時に創造主の支配から離れ自由に動き回っていた幻覚も消え去った。

それを確認して、アイコは笑顔で懷からマジックインキを取り出し、サナエに近づいて行った。

少しのはずが、気がつけばリツコの家にお邪魔して、もう3日経っていた。その原因としては、リツコの飯が飛びぬけてうまいことアイコがサナエにひつついて離れないと言ったことである。特にリツコの料理を前にすると、いつも2人が自炊している飯が、これ本当に料理？と考えさせられてしまうほどであった。

アイコは四六時中サナエの横に居て、ねえサナエが口癖になっっている。

アイコに懷かれて悪い気はしないのだが、これほど接近してしまうと別れる時が辛い。できるのならこの少女が泣く姿は見たくない。しかし、誰がどのように懇願しようとするように努力しようとするのを叶えてくれるランプか？つあるボールが無い限り、時間を止めることはできない。

サナエ達が旅立つ時が来たのだ。

「それでは、リツコさん、アイコ、お世話になりました」

「ええ、サナエさんもマルさんも気をつけて。ほら、アイコも挨拶して」

リツコの横で立つアイコはどこか表情が硬かった。今にも泣きそうな笑いそうなどちらともつかない表情であった。その両手は強く握られている。

「ほら、ちゃんと言いなさい」

リツコがすすめるがアイコは口を開こうとしなかった。

「ほなな、アイコ。また会お。大きくなったら私を化かしてみ」

アイコの頭の上にサナエの手がおかれた。その手を先ほどまで石

のように硬く握られていたアイコの両手が握った。この3日間何度かアイコはサナエを化かそうと試みたのだが何度やっても無理だった。サナエがかわいそうと思い全力で鈴を鳴らしたのだがそれも無駄であった。

「嫌！ねえ、サナエここに居てよ。もつと遊ぼうよ。嫌だよ。ここでバイバイなんて、大きくなったらとか嫌だよ。そんな長い間待てないよ」

アイコが言葉を発することに手を握る力が強くなっていった。

「そんなん言っても・・・」

サナエもアイコと同じ気持ちであった。しかし、この旅が終わらない限りマルは任務のためずっとサナエと一緒にいなければならぬ。もし、ここでサナエがここで暮らすことを選ぶとマルを一生拘束することになってしまふ。それが申し訳ないと感じているサナエは自分に言い聞かせた。

「ごめんな。私はどうしてもやらなあかんことあるから、ここにおられへんねん」

「グスつ、ずずず、そんなあ」

いつの間にかアイコは泣いていた。鼻水を垂れ流し、どの液体が涙で鼻水なのか区別がつかない。

「・・・ふう。分かりました。アイコ」

先ほどまで傍観していたリツコが開口した。

「一緒に行きなさい。外の世界を見てきた方があなたの修行になるかもしれませんから。サナエさん、マルさん急なお願いなのですが、この子連れて行ってもらってもいいですか？」

「は、母様。いいの!？」

「ええ、御2人が良いとおっしゃられるのなら」

リツコは涙とその他で汚れた娘の顔を拭いた。まだまだ未熟な娘をいきなり自分の手から離し外界に来るのだ。淡々としゃべっているがその内心は大変苦しんだに違いない。

「私らは別にかまわへんけど。本当にええの？心配じゃないん？」

「そつそつだよ母様。あたしが居なくなったら1人だよ。寂しくないの？」

母の胸に飛び込んだアイコは何度か母の胸の感触を頬で感じた。

「寂しいよアイコ。でもね、ここにずっといたんじゃ、あなたは立派な化け狐になれないと思うの。私もあなたくらいのころには世界を旅していたわ。それに、私にはふもとの村の人たちがいるから1人じゃないわ。あの人たちにとっても優しくしてくれるのよ。だから大丈夫心配しないで」

「母様あ」

「ほらっ」

リッコは娘の頭を大切に大事そうに丁寧に、その感触を手に覚えさせるように撫でた。そして、小さなポシエットをアイコの肩にかけた。

「ほら、アイコ」

いつから用意していたのだろうか。ポシエットには少女に持てるだけの重さで旅に必要な道具が一式入っていた。

「リッコさんまさか」

アイコのポシエットを見てマルは驚いた。

「ええ、最初から考えていましたよ。この子がもし駄々をこねたらとあっさり見送ったら何も言わないつもりでしたが。まあまずないと思っていました。でもここまで駄々をこねられると少しサナエさんに嫉妬しちゃいますね」

「ははは。流石は母親だな。なんでもお見通しだ」

「ふふふ。私の母親の真似をしただけです」

子供を産んだ女性には一生かなわないなとマルは痛感した。自分の母親もこんなのだったのだろうかと考えた。会えることは無いことは分かっていたが、少し会いたいと思った。

「じゃあ、母様。あたし行くね」

「ええ、いつてらっしゃい」

アイコはもう一度母親の胸に飛び込み、母親の匂いをその鼻に覚

えさせる。

「ほな、行こうか」

「うん！じゃあね母様、いつてきます」

アイコは、母親の胸から飛び出しサナエの手を握った。新たな仲間を入れた3人は歩き出したのだ。

「ほんじゃあ、これからよろしく。アイコ」

「うん！サナエよろしくね、それとマル」

「俺はそれと扱いか」

「ところで、ねえサナエ」

「んっ？」

「サナエがしなければならぬことって何？」

「えー、言うてへんかったなあ。それはなあ」

それ、つまりこの旅の最終目的を話すと、アイコはまた大きく泣きだしたのであった。

水の街の水産者（前書き）

前回アップしたものをまとめて加筆しています。

水の街の水産者

「ねえ、サナエ喉渴いたあ。まだ着かないのお？」

アイコは水筒の底に残ったわずかな水を飲もうと何度も逆さにして、底を叩いた。雀の涙ほどの水滴がわずかに垂れるほどで、それを舌先で受け止めるがアイコの渴きを潤すことはなかった。

「あげたいところやけど、私のもすっかり空っぽやからなあ。もう3日経つもんなあ」

サナエが水筒を逆さにすると、砂が出てきた。マルはどうかと見ると、マルも同じように水筒を逆さにして首を振った。

「はああ、まったくどっかの誰かさんが、2日くらいで次の街に着くからそんなに補給しなくていいだろうって言って、あんま補給せんかったからなあ。まあ、誰とは言わんけどなあ。なあマル。本当にいい迷惑やなあ！」

「・・・はつきり言えよ。そうだよ。俺が言ったんですよ。だってお前から自分の水筒しか持たないだろ。そのほかの水を運ぶのは俺だぞ。そりや言うよ補給減らそうって」

マルのリュックサックの口から空のポリタンクが見えている。

「だって、私らかよわい女の子やし（キャピッ）」

「アイコも（キャピッ）」

両拳を口元に付けかわい子ぶる2人。アイコは確にかわいらしいのだが、サナエは中身を知っているせいかその拳が自分に向って放たれそうな恐怖をマルは感じた。

「はいはい俺が悪いんですよ俺が。どうする？今から腕でも切って血を出そうか？それを蒸留させて水を作ろうか？」

追い詰められたためか何かえげつないことを言い出した。

「おうおう、してもらおか。するなら腕と言わずに大量に血が出そうな手首とか首とかしたらどうや？」

「おう、いいよやってやるよ。今ここで手首を切ってこのポリタン

クいっぱいの水を作ってやるよ」

「やれさあやれ、大量出血して苦しんでいるお前を一切無視してやるわ。それで溜まった血をそこで枯れそうになっている雑草にくれてやるわ」

「じゃあ、俺はなんのために切る必要があるんだよ」

「あつ」

いつもの言い合いを無視していたアイコが口を開いた。

一緒に旅を始めて1週間、最初のころは毎回喧嘩の仲裁に入っていたが、今ではこれが日常茶飯事だということを悟り、スルーするという技術を身につけていた。

「どうしたアイコ、漏らしたか？」

とマル。ストライクゾーンから大きく外れる女性には簡単にデリカシーのない言葉を放つことができるエセ紳士なのである。

「違う！おねしょは去年からしてないの」

「去年までしてたんかい」

「うるさいなあ。違うよ、あれ見てよほらあ」

一本の木材に一枚の木の板をつけた看板が一行の目に入った。そこには『この先、水の町アクアガーデン』と書かれている。3人は顔を見合せて頷いた。

現在欲しいものはなんですかと聞かれたら、サナエは高級食べ放題店の年間フリーパス、マルはモテ力、アイコは身長と答えるのだが、現在、緊急事態である。ため一同は声を揃えて水と答えるであろう。そんな面々が水の町この先という看板を見たのだ。例えばそこが目的の街でなくても、そこが目的の街とは逆方向であろうと3人の足は自然とその街へと向いた。

水、水、水、至る所に水があつた。滝に噴水に湖。街の面積の半分以上が水で占められていた。そのため、空気は水分を多量に含んでおり常に涼しい状態である。先ほどまで暑かったのだとても快適であった。特に毛皮があるアイコにとっては喜ばしいことであつた。

「ひやつはあー水だ水だああ」

世紀末に出てきそうなモヒカン男が水源地を見つけた時のごとくマルは大喜びで、水を飲もうとした。サナエとアイコもそれに続く。「ちよつと待った」

突然制止の声がかかった。

「誰だ。俺の邪魔をするやつは!？」

今にも噴水の池に頭をつけようとしているマルが振り返った。今にもサントフェを抜こうとしている。ここでこの生きるための行動を邪魔しようとするやつは 殺そうとする殺意を孕んだ瞳をしている。それに続くようにサナエも拳を固めた。渾身の一撃を顔面に叩き込んでやろうと考えているようだ。

「その水は、汚くて飲めたもんじゃないよ」

眼鏡をかけたインテリ風の男が1人立っていた。年はマルほどで、中々の肉付きをしている。医者に見せれば厳しい注意が入る程の太り方である。山でよく見かける動物の仲間かとアイコは錯覚した。「なんだあんたは?俺達はもう喉がカラカラなんだ。邪魔するならこのサントフェで切るぞ」

初対面の人間に中々物騒な挨拶である。人によつてはマジギレされる可能性がある。

「その水は飲み水じゃないから駄目だよ。ちゃんと飲み水を飲んだほうがいいよ。汚い水だから噴水用になっているわけだし」

噴水から飛び出てくる水は透き通っておりどこが汚いのかさっぱり分らない。なんだったらサナエ達が道中で調達している水よりも綺麗である。

「汚い水、どこが?きれいな水じゃないか」

「だめだめ。汚い水だよ。それにその水飲んだら逮捕されるよ」

「マジか。まさか、生きるための行為が法律違反とは。どうすればいいんだ?」

「この街では、飲み水は買わないといけないんだ」

「ケチだな。まあいい背に腹は代えられんどこで売っているんだ。」

飲み水たる綺麗な水は」

「僕が売っているよ」

「へっ？」

男はそう言うが身体のどこを見ても水が入っていきそうな容器など見当たらない。というか荷物など何も持っていなかった。

「どういうことだ？そんな物どこにも無いじゃないか」

「買ってくれたらからくりを教えるけど」

「しょうがない、はい」

「まいど。それじゃあ。何か水を入れられる容器とかある？」

受け取った金を懷に直し、男はマルからポリタンクを受け取った。

「何をするつもりだ？」

「いいから、見ていたら分かるよ」

男はポリタンクの口に掌を載せた。そして、目を瞑り、力を入れた。

すると、手の平に黒い球体が生まれ、球体から勢いよく水が放出し、あっという間にポリタンクが満たされた。

「へえ、魔術か。そんな魔術もあるんだな」

「そう。ほらこれ、それでもこの街で売れっ子水産者の水だからね。味は保証済みだよ」

男から受け取ったポリタンクは噴水の水よりもさらに透き通った水で満たされていた。

「この街は始めてみたいだね。買ってくれたお礼に教えてあげるよ。この街ではね、水は水産者に作ってもらうしかないんだ。しかも水は用途によつて使い分けられてるんだ。例えば僕の水は飲み水のためだけに使われて、あそこに居る水産者は植物のために使われる水を作っているんだ。見分け方はね、水産者の腕にある腕章の色で分かるんだ。僕は緑だから飲み水、あの水産者は青だから植物用ってね。それ以外の用途で買っちゃったら捕まっちゃうから注意してね・・・」

長々と話す小太り男を余所に、3人は水を取りあい、水をなんと

か体に注ぎ込んでいった。

「んっ・・・ああ聞いてる聞いてる。つまり、いちいち水を買わないといけないんだろ？おい、サナエとアイコお前ら飲み過ぎだ。俺の分も残しとけよ」

「・・・とにかくこの街で生きるには腕章の色を覚えなといけなからね。なんだったら役所に一覧表があるからそれをもらうといよ」

新しい客に呼ばれたので男はそちらへ移動していった。

「あっ・・・お前ら」

マルが小太り男を見送り、振り返ると空のポリタンクが転がっていた。

水の街の水産者（２）

というわけで３人は紋章確認ついでに役所で腕章一覧表を手に入れた。

当然のごとく紋章登録簿はいつも通りどのページを開けばいいのか迷っていた。結構ボロい登録簿のため耐久力がなく、数ページが飛んでいった。

「ほうほう。結構な種類の腕章があるんだな」

一覧表には緑が飲み水、青が植物用、緑色が飲料水、白が塩水。黒がその他の用途に用いられる水であった。

主に黒の腕章を付けている水産者が多く、緑が一番少ない。飲み水の清潔基準は高く、それに適用するような清潔な水は滅多にいないためだ。

「ほんまや。そういえば、緑付けてる人の服装は高そうやったしな」
逆に黒の腕章をつけている水産者は大量生産されている安物の服やマントを多く装着していた。

「うむ。通りで先ほどの水産者からセレブ感があふれ出ていたのか、ほら見てみるあれなんて有名ブランドのマントだぞ。あれだけで俺の給料３回分だ」

サナエはかなりの額を取られたことを思い出した。あれだけの水であれほどの額を奪い取るのだ。自然とセレブになっても不思議ではない。

「ねえ、サナエあの腕章はなんだろう。灰色だよ。白色が汚れたのかな」

サナエの袖をひっぱりアイコが指差した。アイコが言うような白色が汚れたため作られた灰色ではなく、業者によってきれいに染められた灰色である。

「それはだな。なんでも水を作り出せなくなった水産者のようだ。パンクと呼ばれていて水産者再生学校に通うようになっていよう

だ。全員が回復するわけではないが、それでも何人かは回復しているらしい」

「ほな、回復せえへんかった人は？」

「もちろん水産者を続けることはできない。まあ水産者の中には貯めた金で起業したりして副業で稼いでいたりするそうだが。大体のパンクは水産以外できないからホームレスになることが多いそうだが、それに水産者はこの街では高い地位に位置付けられているそうだから、偉そうにしていたやつはホームレス社会でも村八分状態らしい」
この街は水が豊かで美しい街ではあるが、その反面格差がひどく、あたりを見渡すとホームレスが必ず視界に入るほどだ。

「おつ、この街の歴史が書いてあるぞ」

およそ100年前までこの街は水不足であえいでいた。雨が一向に降らず次々とこの街を離れる者が続出した。作物も取れずにこの街はもう長くないと思われていた。

しかし、ある日1人の男が現れた。その男は、氣力を無くした民衆に声をかけ、自分に注目を集めた。そして、手のひらを空へ向けた。すると、男の手のひらから大量の水が放水された。その日以降この街を悩ます水不足を解消する水産の技術が伝わった。

「ほうほう、どうやら水産は魔術の1つのようなのだな。しかし、水を作り出すような魔術など聞いたことがないがなあ」

「伝えた男の人のオリジナルなんちゃうん？」

「そうかもな。でもオリジナルの魔術は相当な魔術師じゃない使うことは難しいんだがな。そんなホイホイ使えるものなのかなあ」

3人はクタクタの体を休めようと今日の宿を探し始めた。
すると、どこか遠くのほうから男の叫び声が聞こえた。

「聞こえたか？」

「うん聞こえた」

「どうする？」

空耳であってほしかった。

「・・・ゆっくりとお風呂に入って、フカフカのベッドに入ってア

イコを愛でながら疲れをとるために寝たいからなあ。やめとく？」

「そうだな。俺も熱いお湯に浸かって、その後ゆつくりとサントフエの手入れをしたいからなあ。最近サボり気味だから」

「こらあ、行こうよ。助けを求めてるんだよ。一応主人公なんですよ」

「主人公やから助けなあかんってそんな義務ないやろ。だいたい主人公やカラって正義の味方って定義どうかと思うで私は」

「いいから！行くの！」

やれやれアイコはやさしいなあと疲れすぎて行動を起こす気がなかった2人はアイコにひっぱられ、渋々声の聞こえた路地へと向かっていった。完全にスイッチをオフした自分たちのスイッチを入れ直した輩を肅正するために。

路地裏に入ると先ほど飲み水を買ってくれた緑色の腕章をした水産者が5人の男に囲まれていた。男たちは黒の腕章をつけていることから水産者だと予想することができた。黒色の割に、男たちは高価な服を着ている。マルの給料1回分といったところだ。

「何なんだ君たちは。失礼じゃないかいきなり腕を掴んでこんなところに連れてくるなんて。いいかい僕は緑腕章なんだぞ。偉いんだぞ。君たちのような黒腕章とは地位が違うんだ。僕が声をかけたら、君たちなんかこの街で生きていけなくすることなんか簡単なんだぞ。分かっているならさっさとそこをどいて」

自分で作った水を飲んで喉を潤しているのだろうか、ペラペラと言葉が出ている。

「黙れ。ペラペラしゃべる豚め。俺たちはそんな言葉を聞きに来ているんじゃない」

顔のエラが出ている男が無限に言葉を生産する水産者の口を手で覆った。

「エイモンよく聞け。お前は邪魔だ。この街から消えろ。以上だ」

「何を言って、ごぶう」

エラ男の言葉を遮るようにしゃべろうとしたエイモンの言葉が止められた。

「黙れと言っているんだ」

エラ男の掌から大量の水があふれ出た。掌がエイモンの口をふさいでいるため放出された水は逃げ場をなくし、エイモンの胃、口、鼻、目、いたるところからあふれてきた。

「がばおっばお」

息がでず胃がはちきれんばかりの量の水が入ってきている顔面は蒼白である。死ぬこのままでは死ぬとエイモンが思うと助けが現れた。

「こらあ、何やってんだあ。それいじょうやるとあたし達が相手だぞ」

身長140cm未満の少女アイコだった。まさか、こんな小動物に喧嘩を売られると思っていなかった黒腕章たちは微笑した。助けを求めていたエイモンが愕然とした。

「なんだ。おじょうちゃん。俺たちに喧嘩を売っているのかい。それとも俺たちに如何わしいお店に売りたいのかい？」

「喧嘩じゃないもん。成敗だ。ただしあたしじゃないけど。あんたたちを倒すのは、ヘイ！カモン！主人公（笑）達」

「サー！どうもどうも主人公（笑）どもです。このちっこいのに引っ張られて嫌々その暴行を止めにやってきました。ちなみに抵抗すると息の根を止めちゃうぞキャハッ」

「目が笑ってないぞ」

「あつたり前やるこっちはさっさと寝たいねん。ほら、どうすんねん抵抗すんのそれともさっさとそのペラペラ豚を放すのか」

黒色腕章の男たちは一瞬にしてエイモンから離れた。どうやら相手の力量を見極める力は備えられているようで、かなわないと判断したようだ。まあ、笑顔で殺すと言っている奴が相手なのだから即座に逃げるだろう。

「ちっ行くぞ」

リーダー格であるエラ男は一度エイモンを蹴り、いいかこの界限から消えないと次はないぞと告げ街へと消えていった。素晴らしく雑魚らしい行動である。

エイモンは口から大量の汚水を吐き出していた。さすがその他の用途のための黒腕章である。水が緑色である。いったい何に使うのだろうか。

「ワッショイ」

胃を酷使し吐いているエイモンに追撃のボディーブローがサナエから放たれた。

「ウボロロロロロ」

さらに大量の汚水、胃液が吐きだされていった。

「よし」

「よしじゃねえ。何してんだお前」

「いや、吐くん手伝ってあげよかなって。ほら胃液出てきたからOKや」

「ゲホッゲホッOKじゃない。いきなりなにするんだ。君たちは・・あっさっきのお客さんか」

吐き終わりようやく顔をあげたエイモンは3人に気づいたようだ。「さっきはどうも。大丈夫か一体何なんだあいつらは」

「ああ、多分僕の競争相手だと思う。目星も付いている。覚えていろよお。思いつく限りのこの世の苦行を味あわせてやる」

メラメラと燃えているエイモンは助けてくれた3人に礼も言わずにそそくさ走り去っていた。

「なんやねんあいつ、礼も言わんと、これやから金持ちは、まったくブツブツ・・んっ？」

ぶつぶつ愚痴を垂れていたサナエは一枚の手のひらサイズの紙を拾った。

「なになに、あなたの日常生活に極上の飲み水を組み込んで如何でしょうか？緑腕章所持の水産者サラエボ・ドーソン。なんやこれ名刺？」

名刺に極上の飲み水と書く程自信があるようだ。言うだけのことがあり、サラエボはこの街で一番の稼ぎ頭である。ただ手売りをするだけではなく、業者と結託し、極上の水として商店で売られるようにしている。それが大変好評で、あつという間にサラエボはこの街一番の緑腕章水産者になったのだ。

「なんでこんななんあるんやろ」

「なるほどな」

顎に手を当て、何かを察したようだ。サナエはなぜかそのしたり顔がイラついた。

「んっ、マルどうしたの？」

「どうやら、さっきの男たちはそのサラエボの手下なんだろう。さっきの男の水を考えるとあんな汚い水であの高そうな服を着るのは無理だろう。おそらくだがこのサラエボってやつに高い金で雇われているんだろうな。そして、サラエボはエイモンが稼ぎすぎて目障りなんだろう。だから奴らを仕向けて脅迫した」

「ほうほう、でもなんでエイモンだけ？」

「いや、もしかしたら他の緑腕章も脅迫されていたのかもしれないがエイモンもなかなかの性格の悪さをしているからな、他の奴よりもひどくされたのかもしれない」

「なんで性格悪いって言えるん？」

「ほれ」

マルが役所でもらった一覧表の水相場表を見せた。先ほどエイモンから買った水は、一覧表に書かれた相場よりも5倍ほど高かった。

「なんあつ、ぼったくられた。あのハゲ・・・殺す。よく考えたらお礼も言わなかったし・・・2回殺す。フシャー」

爪を立たせ今にも走り出しそうなサナエの袖をアイコがひっぱた。

「あたしは助けてもらったらちゃんと言うよ。ありがとっつて」

「おうおうええ子やなあ。アイコはよしよし」

「へへへ」

撫でまわし過ぎてアイコの首が取れるのではないだろうか。しかし、アイコのおかげでサナエの興奮が収まったようだ。もしアイコがおらず、走り出したサナエがエイモンを捕まえることができないければ、その向ける先を失った怒りはマルに向けられるだろう。そのため、マルは胸をなでおろした。

「・・・ほら、それ以上なでるとアイコにハゲができるぞ」
中断されていた宿探しを再開するため3人は歩きだした。

水の街の水産者（3）

サナエが跳んだ。あらん限りの脚力を使い高く。そして、体を捻る。何度か横回転をし、引力に引つ張られ落下。

「もふうっ」

着地した先はフカフカのベッドであった。落下の衝撃を吸収しサナエの体にかかる力を和らげる。

「サナエすごい。ファイトガールアサミみたい」

どうやらアイコも月刊少年ダンシングを読んでいるようだ。しかし、絶対にこのようなシーンは麻美にはないはずである。

どう考えても宿に迷惑がかかるアクロバティックなベッドインをまだ幼いアイコはキラキラした瞳で感動している。このままではこの娘に悪い影響を与えそうである。

「ほらアイコもおいでおいで」

自分の胸に飛び込むように手招きをする。

「うん・・・とうっ」

軽く助走をつけてアイコはサナエの胸へと飛び込んだ。アイコの突撃の衝撃を減らすために、アイコが飛び込んだ瞬間に少しだけ、重心を後ろにずらした。

「うしゃしゃよしよし」

「にゅーっ」

恍惚の表情でアイコは、サナエの胸で抱かれていた。サナエに耳を触られ、頭を撫でられ、サナエの胸の感触を頬で感じ、まんざらでもない様子だ。

「うるさい！お前ら、この前みたいにまた追い出されるぞ」

ドアを乱暴に開けマルが乗り込んできた。過去にも、同じように暴れて追い出されたことがあったのだ。しかし、その時はサナエの悪口を言ったマルが追いかけまわされたのが原因なのだが。

「うおっなんじゃ不審者。凶器持って入ってくんや」

見るとマルの右手にはもしかしたら意思を持っているんじゃないか妖刀なんじゃないかといわれているサンタフェが握られていた。

「違う。これはサンタフェの手入れをしていたんだ」

「じゃあ、置いてこればいいじゃん」

「パクられたらいやだから」

「安心し、そんなナマクラ誰も一生を棒に振ってまで盗ろうと思わなくて、この前質屋持っていったら、買い取りはできないってしかも引取ってもええけど処分費とるって言われたもん」

「なにをしようじゃあのは」

ナマクラと言われたサンタフェでこのアマを斬ってやろうとマルが歩を進める。

「あああのののおお客様」

刃物を持った男がいると通報を聞き店員がなんとか対抗しようと震えた手で包丁を持って後ろに立っていた。素人のはずなのだが右手を包丁の柄頭に備え、肋骨の隙間を縫い深く突けるように包丁は横に構えられている。

「いいいやちつち違うんですこれは・・・」

急いで、殺気立っている店員にこの不審なモテナイ男を身内だということを書いて退室してもらい、一安心したマルを部屋に入れた。

「まったくお前らはほらそこに座れ」

どうやら今からマルは説教を始めようとしているようだ。しかし、自分がしてもらったのが先だと思うが。

「いいか、仮にも俺たちはラムダの援助を受けてこの宿に格安で泊まることのできているんだ。それなのに俺たちが問題を起こしたらラムダに迷惑がかかるだろ」

「マルおっさんくさい。くちやいくちやい」

アイコが鼻を押さえた。

「なあっ!？」

「怒ってばっかだもん。なんかおじさんみたい」

「・・・・・・」

思い返してみるとどうも団長の説教の仕方に似てきているように思える。そういえば、最近1週間が早いような気がする。そんなことを考えていると不思議なことになぜか体が熱くなってきた。恥ずかしいからなのだろうか、ベッドに寝そべっているサナエが艶やかに感じるからだろうか、更年期障害。いやそういった内面的なものではなく外的要因から来るものであった。

「火事だー」

火事だ。

一階から出火し、木製の宿を燃やし続け火は少しずつ巨大になっていく。サナエたちが泊まる部屋にもう少して届きそうなほど成長している。ものすごいスピードである。ボロい木造建築のためよく燃えるようだ。

「なにい!？」

「いいいい急いでこちらへ」

駆けつけてきた先ほどの店員が手招きした。しかしその手には包丁が握られている。突くことを狙わず、相手の肉を斬り裂くため、逆手に握られている。この店員包丁を使うことを手慣れているようだ。

「なんで包丁!？」

「ああああなたたちが犯人かと思ひまして。それより早く逃げてください」

「言い訳も聞かず、殺す気だったのか」

部屋で散らばっていた荷物をアイコがかき集めマルに投げる。そして、投げたアイコをサナエが抱きかかえる。完全なコンビネーションである。

部屋を出て煙を吸わないように身を低くして走り出す。

非常口に着くと何人か宿泊客が辿り着いているようで列ができていた。幸いここにはまだ火が届いていないので楽に脱出することができるようだ。非常階段から階下を見下ろすと野次馬が集ミリー、黒色腕章をつけた水産者たちが協力し、汚い水で鎮火に当たっている。

「一体何が原因やったん？」

「周りの話を聞いていると放火らしいな、なんでもここ最近この辺でよく放火が起こっているようだ。おそらく同一犯なんだろうな。もう少し詳しいことを聞いてくる」

そう言つてマルは、事件の状況を調べていたラムダの団員に話を聞きに行った。野次馬根性なのかラムダ団員としての正義の心に火がついたのか。

「・・・怖かったよお」

涙を拭い火事の恐怖も冷めやらぬアイコ。それを静かに撫でるサナエがただ茫然と宿の前に立っていた。燃え盛る宿の中に駆け出そうとする女性、命からがら逃げだせたことを喜び抱き合う親子。それらの光景を見てサナエは空いている方の手を強く握りしめた。

「それじゃあ、店長さん。鎮火に当たった際に作った水の量、それと危険手当合わせてこれだけ頂こうか」

先ほど鎮火に当たった黒色腕章の水産者たちが店長に請求書を渡していた。

「こつこんなになん？ちよつと待つてくださいよ。相場よりはるかに高いじゃないですか。それに宿もなくなってしまうて、すいませんが今はこんな額払えません」

「相場つて、俺たちがどれだけ作ったかあんた細かく言えるのかい？無理だろ。これは俺たちがちゃんと図った量に相場を当てた額だ。不正なんか一切ないぜ。それに、宿も半焼で済んでいるんだ。あんたラムダの宿舎連盟に入ってるんだろ、なら保険金が出るじゃないか。そこから払ってもらおうか。払わないとどうなっても知らないぜ。もしかしたらまた火事になるかもな」

そう言つて男たちは店長をぐるっと囲んだ。柄が悪い水産者である。ボランティアで鎮火をしていたのならいい話でメディアに取り上げられそうなのだが。

「ひつ、わっ分かりましたよ」

店長は泣く泣く燃えることのなかった金庫にビッシリ詰まった札

束から数束取り出した。

「へへへまいど」

金額を確かめ黒色腕章水産者たちは去って行った。

「・・・あれっ？」

「どうしたんアイコ？」

「あの水産者の一番右の人。さっきエイモンって人襲ったグループにいなかったけ」

「・・・あっほんまや」

エイモンを襲った黒色水産者がグループにいた。

「なんか怪しいよね」

「かなり・・・尾行してみよか。犯人やったら半殺し、犯人やなかってもぶん殴ってやろう」

「犯人じゃなかったら無罪にしなよ」

野次馬の隙間を掻い潜り2人は男たちの後を追った。

「ありがとう。それじゃあ、この事件は放火ってことか」

「ええ。そうなりますね。これで今年に入って18件目です。被害者が出なくて幸いです」

眼鏡をかけた女性ラムダ団員が調査書を見つつ話した。その表情は事件を起こした者たちに怒りを覚えているようで、眉間にしわが寄っている。美人が台無しである。

「それ見せてもらっていい？」

「一応極秘の書類なんです。マルグロリアさんなら」

何故かマルの頬から涙が流れた。ああそうだ。俺マルグロリアだった。久しぶりに聞く自分の名前に感動を覚えた。初めて女性と手を繋いだとき、初めて生ハムメロンを食べた時、その時ぐらいマルは衝撃を受けた。あミリーにも言われなさ過ぎてラムダが関わっていない宿の宿帳に名前を書く際に筆が止まってしまふことが度々あった。

「どっどうしたんですか？」

「いっいやなんでもないありがとう。ちょっと心の汗が出ただけであふれ出て止まらない涙をぬぐい去り、マルは一通り調査書に目を通した。何か共通点や犯人の特徴はないのかと探す。女性ラムダ団員の書いた文字は教科書のお手本通りの美しさで、とても読みやすかった。クラスに居たら優等生委員長タイプだ。」

「・・・んっ？」

「どうしました？」

「これ、ほら」

マルが指差すところにはどれも水産者という文字があった。読んでみると『近くにいた水産者が鎮火の行った』と書かれていた。すべての事件に水産者が関わっている。

「・・・これは」

「うむ。実にきな臭いな。何か水産者が裏で何かあるんじゃないのか」

「・・・そうか、ありがとうございます。この話を上司に持って行ってみます」

一度頭を下げ、ラムダ女性団員は去って行った。

「さて・・・あれっ、あいつらどこ行っただ？」

「なあ、ミリー。なんであの男に調査書見せてんだよ。上司にばれたら懲戒免職になるぞ」

ミリーの先輩団員が、ミリーの報告を聞いている際に質問した。調査書は機密事項のため、もちろん一般人に見せることは禁じられている。

「あれ、先輩ご存じないんですか。マルグロリア・ドミニコフさんですよ」

「・・・ああ、あれか去年のラムダ総合大会の剣術部門でイリアリア代表だった奴か」

「そうですね。あんな有名人に会えるなんて思わなかったです。格好よかったですなあ」

と嬉しそうにミリーは話していた。身内には手を出さないように教育されていたマル。ミリーが身内じゃなかったらよかったのに。

「ああ、そう言えば、お前デスクに写真置いていたな」

「写真より格好よかったです」

本当に残念である。

怪しい水産者の後をつけていたサナエ、アイコのコンビは見失わずかつ怪しまれにくい距離を保ち、噴水の陰、店先に出ているワゴンの陰、体のでかい人の陰に隠れつつ尾行を続けていた。

水産者たちは周りに気を配ることなく談笑しつつ歩いている。自分たちが殺気をぶつけられながら尾行されているなど夢にも思わないだろう。そして、人込みを離れ路地へと入って行った。もちろん2人もその後が続く。

「あれっ、どこ行った？」

目の前から水産者たちは姿を消していた。

「・・・ふうむ。あっ」

何かないかと路地を歩いていると左手にある看板が目に入った。

『サラエボの事務所？』。ドアは閉まっていて中の様子が分からないが、耳をドアに近付けると男たちの声が聞こえるのでどうやらここに入って行ったようだ。

「ここは、確か」

ポケットに入れていた名刺を取り出す。サラエボ。あのエイモンを襲った男たちが持っていた名刺に書かれていた名前が目の中の建物に刻印されている。

「うお、まるで謎解きゲーム見たいやな。なんかトントン拍子で謎が解けていくな」

「ゲーム？」

「んああこつちの話。さて、今から乗り込んでええけど火事の件は簡単にはぐらかされそうやな」

「うんそだね。とりあえず戻ってマルにちくってみよっか」

「せやな。イベントが起きて新しいアイテムが手に入るかもしれんし」

「イベント？アイテム？」

よくわからない単語が続き困惑状態のアイコの手を引きサナエはマルが待っているであろう元宿に歩を進めた。

水の街の水産者（４）

「うん。じゃあこのお金でお願いするよ」

「へい。まいど」

人気のない倉庫街でエイモンと悪人顔の男が会話をしていた。エイモンからかなりの金額が悪者顔に手渡される。エイモンの水コップ１０００杯分である。いかにも何か企んでいる様子である。

「へへへ、まいど。しかし、いいのかい。一応双子の兄弟だろあんたら」

受け取った金額を確認し悪人顔が聞いた。しかし、悪い笑い方が板に付いている。

「気にするな、あいつを兄と思ったことなんか一度もない。それに奴の水は僕と同じ味だからね。居なくなってもらったほうがいい」

「そうかい。サラエボが居なくなったら緑色腕章の中であんた以上においしい水がなくなるもんな」

「そういうこと。なんならもうちょっと上乗せしようか。どうせ将来大金を稼げるんだから。初期投資って考えているし。言ってくれたらいくらでも払うさ」

「いや俺たちもプロだ。金額はこれだけでいい。結果は新聞か噂で知ってくれ」

悪人顔は一度笑いかけ、後ろで待機していた男数人を引き連れて出て行った。

事件現場に帰るとマルが心配そうに立っていた。貧乏ゆすりが多い。

「どこ行つてたんだお前ら、急にいなくなつて」

「うん実はなゴニョゴニョ」

サナエは火事の後に目撃したもののその後の行動をマルに話した。

「ふーんなるほどな。どうやら俺の推理は間違っていなかったのか

もな」

「どういうこと？」

「ここ最近放火による火事が相次いで怒っているんだ。その事件のどれもが水産者によって鎮火がされている。そこでお前らが後をつけた黒色腕章の水産者たちだ。そいつらが黒いな、もう真黒だ。黒色腕章なだけに」

「わっしょい」

サナエのチョップがマルの脳天にヒット。クルミをかませておけばきれいに割れたかもしれない衝撃である。

「すまん。後調べたところによるとサラエボとエイモンのこの兄弟がここ最近荒稼ぎしているようだ。とくにサラエボは販売している水量よりはるかに稼いでいるそう。黒色腕章の男たちから金が流れていると見ても不思議ではないだろう」

「兄弟？それやのにあんな仲が悪いん？」

「人間だから色々なあるんだ。さっきの団員の子が黒色腕章の水産者が怪しいと見ているようだからもうすぐにでもサラエボは捕まるだろうさ」

「ふうん。できれば、一発ぶん殴ってやりたいけど、被害者も出なかったことやしこの事件もひと段落やな。ところで、今日の宿どうするん？いややで野宿はもう」

「それも、ラムダが新たに手配してくれた。それも皮肉なもんで燃えにくい石造だ」

「よかったよかった。木造でも石造でも無事ゆつくりと眠れるならどこででも眠ったるわ」

次の日、いち早く目が覚めたマルは外に出てキザッたらしくコーヒーを朝日の下でゆつくりと飲んでいた。もちろんブラックは飲めないで砂糖、ミルクたっぷりのコーヒーである。団長がよくやっていたのを真似ているのだ。

「ふう、やっぱりモーニングコーヒーはたまらんな。この甘ったる

「いこの味が頭の動力源だよなあ。んっ、えつと確か君は・・・」

目の前に現れた女性の名前を見事に思い出せないようだ。エネルギーを頭に与える前に油を差した方がマシなのではないだろうか。

「マルグロリアさん」

「ええと、マミーでもトニー・・・ああ、トニーは男の名前だ。確か・・・ミリー、そうだミリーだ。どうしたこんな朝っぱらから。どうだ一緒にコーヒーでも」

「はあはあ、ありがとうございます。今はちょっと走ってきたんで、コーヒーは厳しいです。できれば、サラエボの水が・・・ああじゃない、それがですね。マルグロリアさんが推理した通り犯人は黒色水産者でした。昨日現場にいた黒色腕章水産者を1人捕まえて白状させたんです。するとどうやら緑色腕章の水産者のサラエボに雇われてやったそうです。」

「そうか。それでサラエボは？」

それを聞くと、ミリーは怪訝な表情に変わり、新たに刷られた調査書を取り出した。

「それがですね。私たちが乗り込んだときには、すでに事務所はもぬけの殻でした。しかも、事務所に血痕があつて、荒らされた跡がありました」

「血痕に荒らされた跡？」

「ええ、別の誰か、または組織が、私たちが乗り込む前に事務所を襲ったようです。それで、現在その襲撃犯は不明、またサラエボを含む一派も行方不明となっています。せつかく事件解決かと思つたのに振り出しに戻っちゃいました」

「・・・こりゃ、なんか、裏がありそうだな」

「ええ、今のところ捜査中ということですよ」

「そうか、頑張れよ」

「はい。あつあの、マルグロリアさんその、いつ頃までこの街に滞在される予定ですか？」

ミリーが書類を直しつつマルに話しかけた。

「明日くらいに出発しようかなって思っているが」

「あの、今晚お暇ですか？よろしければ食事なんてどうですか」

「ん？ああいいぞ」

「あ、本当ですか。やった。それじゃあ、今晚7時に・・・ここでもいいですか」

「うむ。分かった7時だな」

「はい。それじゃあまた」

ミリーは満面の笑みで走り去って行った。走るといってもスキップしている。

「元気な娘だな。しかし、サラエボが行方不明か。こりゃ血なまぐさい展開になってきたな」

普段のマルなら食事に誘われただけで、手放しで大喜びするところだが、今回は珍しく冷静なままである。これはマルの過去のトラウマがそうさせているのだ。

昔、マルはラムダの団員の年上の女性を好きになったことがあった。その女性は大変清楚純粋でそれは素晴らしいお姉さまであった。しかし、それは表の顔にすぎなかった。マルが意を決して告白した際に「付き合ってあげてもいいけど、そうね。麗美草をとってきて」

麗美草を乾燥させ自分の髪の毛を入れ火であぶる。発生した煙を意中の相手に吸わせると、自分に惚れさせることができるのだ。それを言われた時マルはこう解釈した。きっと彼女は自分のことをそれほど好きじゃないのだろう。でも付き合ってもいいと考えている。付き合うならやはり好きでいたい、だから麗美草が必要なのだろう。と、とても前向きに考えていた。どう考えても裏があるように思えるのだが、当時のマルは疑うようなことを一切しなかった。

麗美草を求めてマルが向かった先はラムダでAランクに認定されている魔物たちの住む、麗し山である。一週間一度も集中を途切れさせることなくマルは山を探索した。少しでも油断するとすぐに魔物が襲ってくるのだ。常に死と向かい合わせであった。しかし、マルは彼女と付き合った時のことを妄想し、自分を奮い立たせていつ

たのだ。そうしなければ泣いて帰っていたらろう。そうして、何度
も命の危機に遭遇し、死に物狂いでマルはついに麗美草を発見した。
そして、告白から二週間、ついにマルは麗美草をボロボロになり持
って帰ることができた。

「あら、ありがとう。本当にとつてくるなんてね」

マルはすでに髪の毛を抜いており、いつでも準備はできていた。
リップクリームも塗ったし、荷物もまとめた。婚姻届も後は彼女の
署名を入れるだけである。

「それじゃあね」

「んおっ!？」

彼女は麗美草を確認するとマルを一度も見ることなくミリーと同
じようにスキップで去って行った。状況が確認できず一瞬放心状態
になったマルは自分を取り戻し、彼女を追いかけた。息を切らしマ
ルがたどり着いた先にはマルにとって目を覆いたくなるような光景
が繰り広げられていた。

「ほーらほら、ふふふ」

彼女が扇子で煙をラムダ団員である男に吸わせていたのだ。もち
ろん煙の出所は麗美草である。

「ええええええ!？」

マルの叫び声を聞き、彼女が振り向いた。

「あら、マルグロリア君ありがとう。おかげで彼を私に振り向かせ
ることができたわ。だましてごめんね」

そう言っただけで彼女は自分の虜になった男を連れて去っていったのだ。
このような経緯があり、マルは反射的にラムダ団員を恋の対象と
して見ることはできないようになったのだ。

「うむ・・・」

約束の時間はとくに過ぎている。もうかれこれマルは3時間も
待っていた。何度も脳内でミリーとの会話を再生し、待ち合わせ場
所、集合時間が間違っていないか確認していた。道行く人々を眺め

つつ時間をつぶすマル。トラウマのせいで尋常ではない冷や汗が吹き出ている。涼しい街のはずだが汗が止まることはなかった。

しかし、ミリーは姿を現さなかった。心配になり翌日の7時まで待つてみたが彼女が来ることはなかった。不思議に思いミリーの職場を訪ねてみた。普段ならこんなマナー違反なことはいないのだがどうにも胸騒ぎがしたのだ。

「死んだ？」

「ええ、今朝街の路地裏で、うちの団員と3人揃って発見されました」

「・・・なぜ」

「分かりません。ただ、窒息死だったようです」

「窒息？」

「ええ、胃や肺の中に大量の水が入っていました。恐らくそれが原因でしょう。それに、乱暴された跡があったとのこと。くそっ」

「・・・そうか」

「一応、水産者が怪しいとみているんですが。どうも物証がなくて」

「分かったありがとう」

「あとあのこれ、ミリーが持っていたものです。本当はいけなところなんです」

先輩団員から手帳が渡された。目を通すと、そこにはミリーの日記であった。最新のページをめくるとマルとデートすることが書かれていた。

『マルグロリアさんと食事だ。勇気を出してよかった。昔からずっと憧れていた人だからとても楽しんだ。どんな格好していいのかなあ。下手な格好していったら嫌われるかも』

ミリーの日記は日記と呼ばれるものではなくミリーがその時思ったことをただただ書き続ける形式であった。1日で30件以上書かれている。ツイッターみたいなものだ。

『マルグロリアさんとの待ち合わせ場所に行く途中、サラエボ達

路地でいるのを発見した』

『サラエボ達は周囲を警戒しながら歩いているようだ。何人かが剣を持っている』

『サラエボ達は何か建物に入って行った。どうやらここが隠れ家のようだ』

『乗り込もうと思ったけど、流石に1人ではどうにもならない。誰か呼びに行こう』

『同僚のカク君とスケさんを連れてきた。今から乗り込んでみよう。マルさんには本当に申し訳ないけど少し待ってもらおう。それにもし捕まえたらマルさんに褒められるかも』

ここで日記が終わっていた。

マルは手帳を閉じ、先輩団員に返却した。

「ありがとうございます」

「なんとしても俺達は全力で犯人を捕まえます。そして、犯人に思い知らせてやるんです。」

そう言って団員は去って行った。

「・・・どうしてん。何ぼーっとしてんねん」

宿の部屋で椅子に座り遠くを眺めているマルを気味悪く思いサナエが声をかけた。

「サナエか・・・なんでもないちよつと出かけてくる。明日この街を出て行くからな用意しとけよ」

「はっ？」

サナエを置いてけぼりにし、マルは部屋に戻って行った。

「なんやねん。いきなり。明日やったらまだええやんか。何言ってるねん、おかしくなったんか？」

「悪いものでも食べたんじゃないのぉ」

ビーフジャーキーをしゃぶっているアイコが返ってこないマルの返事を代わりに答えた。

「うつん、そうやとええねんけどな」

水の街の水産者（5）

サントフェを携え、街を歩き回り始めた。探すものは黒色腕章の水産者、水のカタログに描かれていたサラエボの顔、ミリーがサラエボを見つけたであろう路地、この3つである。

とりあえず、この3つの中で1番簡単であろうと思われるミリーがサラエボを発見した路地を探すことにした。まず現在分かっていることは、ミリーの家からマルの待つ待ち合わせ場所までの道の途中であると言うこと。

仲間を呼びに行ったので本部にもその連絡が伝わっているかと思われたが、緊急のことだったので本部に居た団員全員が連れて行かれ、当時のことを知る全員が殺されてしまったのだ。

仕方なく、辺りを見渡しながら歩き回るしかないのだ。だが、マルにはある程度確信があった。先日、サナエとアイコが見つけたサラエボの事務所である。今は看板が外され、空き物件として扱われているが、ミリーの家から待ち合わせ場所の道中に有ると言う条件を満たしていたのだ。

サラエボの事務所だった場所に行くと、近くに設置されていたごみ箱がへこんでいる。まだ新しい傷だと思われる。それに、乾いた血液も少しばかり付着している。どうやら、ミリー達が戦った時に付いたものだろう。

「どうやら、ここで間違いないな」

ドアに耳を当てると中から話し声が聞こえる。会話が成立していることから2人以上いるようだ。

「さてと・・・」

サントフェを抜き、一閃。一拍置き、ドアはいくつもの木片へと姿を変えた。

「なっ!？」

ドアがなくなり入口はすっかり吹き抜けになっている。そこには

黒色腕章の男が2人立っていた。

「ハロー」

挨拶をするや否や、サンタフェは2人を打ちのめしていた。切ることなく、側面でどついたのだ。

「さて、聞きたいことがあるのだが。サラエボはどこだ。抵抗せず言ったほうが身のためだと思うが」

首に刃を当てられて断るやつはいないだろう。よほど忠誠心があれば別だが、この水産者は金で雇われているにすぎないのだ。いとも簡単に口を割った。

「くそつ、どうするんだ。もう俺は終わりだ。なんてことしてくれただお前は、ラムダの人間を殺すなんて！あいつら血眼になって犯人を探しているんだぞ」

髪を乱し、サラエボは男に食ってかかった。現在サラエボは、エイモンの襲撃から命からがら逃げだし街外れに持つ自分の倉庫に隠れていた。

「しょうがないでしょう。エイモンの手先だと思ったんだから。それにラムダにしても、遭ったらまずかったはず。こういうことをさせるために俺を雇ったんでしょ？そこは割り切ってくださいよ。エイモンを襲った時点でこうなることを覚悟しておくべきだ」

サラエボの威圧的な攻めにアーツは動じずに言い訳をした。アーツの腕には黒色腕章が付けられていることから彼も水産者であることが分かる。ただ、どうやら彼は水産者ではなく暴力の方が専門のようだ。

「くつ。いいか、これ以上俺の不利になるようなことはするなよ。なんとしても俺を犯人と分らないように名」

「へえへえ・・・そうですね、代役で立てましょうか？パンクがその辺に山ほどいるんでいくらか金を積んだら喜んで出頭してくれますよ」

「そうか、それがあった。よしそれでいい」

「了解。ところで、エイモンがサラエボさんを襲撃するのに雇ったのは街の外の山賊らしいですよ」

「そいつらが来てもお前は勝てるのか？」

「もちろんですよ。あの時は俺がいなかったから逃げるようなことになりましたが俺が居たら返り討ちでしたよ。それに今回は結構な人数を集めましたから、負ける気はしないですね。エイモン達をやっちまって、後はラムダ殺しの代わりを出頭させればサラエボさんの天下ですよ。その後少し金を積んでくれたら俺たちは何も文句ないです」

「頼むぞ。高い金を払っているんだからな」

「わかってますよ。この仕事で俺らは食ってんだから。信用問題にかかわりますからね、がっちり仕事させてもらいますよ。もう貧乏暮らしの黒色腕章はコリゴリだ」

机の上に置かれていた水を飲み、アーツは椅子に座った。ビンにはサラエボの字が書かれている。

「おや、どうやら来たようです。思ったよりも早かったなあ」

「何を言ってるんだ？お前は」

すると、倉庫の扉が開かれ、山賊を従えたエイモンが立っていた。
「へえ、ここにいたんだ。兄さん」

「エイモン」

「正解。ちよつとさあ、兄さん、逃げないでよね。手間かかるんだから、さつさと降参して、殺されてくれよ。兄さんもがめついんだよ十分稼いでいるんだろ？別に僕が居てもいいじゃないか」

「何言ってるやがる。ただ俺が先に行動を起こしただけだ。お前も俺を殺そうとしていただろうが」

「それも正解。昔からだよね、いつも一歩兄さんが早いんだよ。それが僕は太っ嫌いだね。殺したいくらい。というわけで、兄弟の感動的な再会の場面もなくて悪いんだけど」

エイモンが手を挙げると、続々と武器を構えた男たちが入ってきた。

「俺の名はアルト」

「僕はイルト」

「エルト・・・後、この写真はウルト兄ちゃん」

「「3人合わせて、あ行三兄弟」」

「ふふふ、決まった」

サナエとマルを襲った山賊達であった。どうやらこんな遠方まで出張に来ているようだ。

「てめえら黙ってる。エイモンさんよ、あいつらを全員殺すのか？」
悦に浸っていたアルトの頭を一蹴したのはこれまた懐かしい鎌使いのレイトルであった。彼らのことを知らない、忘れたという方はファイトオアエスケープ？イエスッ！エスケープを参照してください。

「うーん。サラエボ兄さんだけでいいんだけど、僕の顔見られてるからなあ。報酬は弾むから全員やつちゃって」

「あいよ」

レイトルが鎌を取り出し、臨戦態勢に入った。アルトとイルトも剣を取り出し、エルトも急いで写真をしまい、剣を取り出す。合図があればいつでも飛びだせるようになってる。前かがみになり足先に力を込める。

「ふーむ。4人が、こっちよりはるかに人数が少ないなあ。おい山賊ハンデをやるよ。武器を使わないでおいてやる」

そーいうとアーツ達は武器を地面に落した。

「てめえら何を考えてんだ」

「ハンデだよハンデ。人数はこっちのほうが多いんだ。これぐらいのハンデがないとやりがいがないからなあ」

「よっしゃ」

ガッツポーズのアルト。

「ラッキーだね兄ちゃん」

同じくガッツポーズのエルト。

「ちよつと腹が立つけど」

少しだけプライドを傷つけられたイルト。

「ふざけんな。てめえら武器拾え。拾わねえと殺す」

殺そうとしている相手に殺すと脅していると矛盾を言い放つレイトル。

「分かっていないなあ。こっちは楽しみたいだけなのに、君たちくらいいならこれくらいが丁度かと思っているんだよ」

アーツは相手を馬鹿にするような表情を一貫として崩さない。それほど自分の実力に自信があるようだ。

「おおおい、アーツお前、なにしてるんだ」

できる限り安全な位置であるアーツ達の後ろに隠れるサラエボは声を荒げた。

「大丈夫、心配しないでください。金はもらっているんだちゃんと守りますよ。ただ、俺たちは戦うことが好きなんです。殴るのも殴られるのも斬るのも斬られるのも、突くのも突かれるもの全部好きなんですよ。数少ない命のやり取りだ。楽しまないと損だ。とくにあの鎌男、あいつは上玉だ」

「ひやはっはっはっ、なるほどなるほど、ただの戦闘ジャンキーか・・いいぜえ。気に入った。おい武器を持て、お前らが武器を持て初めて俺と対等だ」

どうやらレイトルは3兄弟を数に入れていないようだ。しかし、6人もいる相手に向かって立った1人で十分というレイトルもかなりの自信があるようだ。

レイトルは鎖鎌を振り回し放った。しかし、鎌はアーツ達のほうには向かっていない。金属同士がぶつかる音がし、アーツ達が捨てた武器が宙を舞い、それぞれの手元に飛んでいった。

「へえ、器用だなあ」

「ああ、どうだ？使いたくなったら」

「・・・そうだね」

「それでいい。手加減している奴なんか殺しても面白くもないからな」

レイトルはアーツ同様余裕の表情を作っているが仲間のあ行3兄弟はそうでもなかった。

「ああああ、レイトルこの野郎なんてことしやがんだ。せつかくの大チャンスなのによお」

「どう見てもあの男は僕たちより強い。素手ならまだ勝てたかもしれないけど」

「ううう、ウルト兄さんもうすぐそっちに行くかも」

3人共々弱気の及び腰である。エルトなんて自分達の写真を額縁にセツトし始めていた。

「縁起でもねええ！」

「アルト兄さんどっちの写真がいい？僕はこの髪の毛を掻きあげている方が好きだけど」

「そうだなあ、俺はこっちのひげを整えているところかな」

「あつそれもいいね。兄さん写真映えるよね」

「そうだろうそうだろう。女たちは分かんねえんだよなこの俺の魅力がよお」

「今話している場合じゃないんだと思うけど。ちなみにエルト、僕はそっちの白目で寝ているアルト兄さんの方が死を暗示しているように好きだな」

「うるせえな。てめえら真面目にしやがれえ、ぶつ殺すぞ」

いつもなら迷わずボコボコにするところだがレイトルもある程度アーツの実力を認めているのである。一対一なら、なんとかなるかもしれない、しかし、向こうは6人もいるのだ。その数の差を少しでも埋めるために行き3兄弟を欠かすことはできないのだ。

「ねえ、もう漫才は終わった？そろそろやろうよ」

受け取った武器を構え、アーツが声をかけた。アーツの持つ武器は極々普通の剣タイプだが、柄に刃が付いているのだ。

「ああ、おい、てめえら俺はあのアーツって野郎をやる。お前ら、なんとかして残りのやつらを倒しな。いいか、俺たちの戦いに邪魔が入ったら、てめえら殺すぞ」

3人で5人倒さねばならないといふかなり実現不可能に近い注文を要求された。しかし、断れば殺されることは分かっている確実な死よりも、まだ未確定の死を選ぶ方が賢い。それを察した3人は腹を括った。

「くそつたれ行くぞ弟達よ」

「なんとかするしかないね」

「なんとかなるよ。兄さん、ウルト兄さんが助けてくれるよ」

レイトルが姿勢を低くし、臨戦態勢に入った。鎖を左手に右手に鎌を持ち、突進する。

「行くぞお！」

「来い」

数回レイトルの頭上を回った鎌は遠心力を味方にものすごい早さを身に着けていた。動くごとに空気を切り、鎌のケツに付いているはずの鎖が肉眼では捉えられないほどであった。レイトルの腕の動き、視線を見て鎌の動きを予測し、アーツはギリギリで避けた。そして、何度も放たれる鎌を避け続けた。少しずつ距離を縮めていくそして、遂にアーツは武器を振るった。ピンポイントで鎌をはじき返したのだ。予想外の力を喰らった鎌の軌道は乱れ、先ほどまでの力を失っていた。レイトルが鎌の制御に力を入れるその隙に、アーツは一気にレイトルの命を取ることでできる間合いまで入った。

「もらった」

武器を横振りし、レイトルの胴を狙った。しかし、武器は胴に傷をつけることはかなわず、鎖鎌の鎖にその軌道を妨げられた。そして、いつの間にかレイトルの右手に戻って来ていた鎌がアーツに向かって振り下ろされる。大きく後退し再び距離を取り、アーツはその攻撃から逃げた。その時、武器を引き柄の刃でレイトルの腕に傷をつけた。

「ふう。やるね、山賊さん。今のはもらったと思ったのに、たったかすり傷しか負わせられなかった」

「ああ。てめえもなかなかいいじゃねえか。楽しくなってきたぜ」

2人がさらにボルテージを上げていく。

「ぬああああ。逃げる逃げる。とにかく避ける」

3兄弟は相手を倒すことに専念せず、ただ死なないようにする戦いを心がけていた。正面から迎え撃てば死角から攻撃されることが目に見えているからだ。よって3人背を向け合いかたまって戦っていた。そして、少し攻撃すれば全力で距離を取るという作戦であった。レイトルがさつさとアーツを倒し、そして、ついでに今戦っている敵を倒してくれるであろうと言う目論見である。3兄弟とくにアルトはレイトルのことが大嫌いなのだがレイトルの実力だけは認めていた。だから、アーツを倒すと信じていてこの作戦を取ったのだ。

「早くやつちまえレイトル！」

「黙ってる。うんなこたあ分かってんだよ」

「でも、俺が思っていた以上に強いからなかなか倒せないって？」

「勝手に邪推すんじゃないよ。そんないいもんじゃねえ。タダもの足りねえからゆっくりと味わってんだよ」

「本当に口だけは達者だね」

「だけじゃねえよ」

再びレイトルが鎌を回し始めた。その時、倉庫の扉が音を上げ、縦に真つ二つになり何の仕事もたないタダの鉄屑に変わった。

「なんだ!？」

サンタフェを構えたマルであった。その表情は無表情で何を考えているのか全く掴めない。

「お取り込み中失礼する」

マルの口の筋肉だけが動いた。

水の街の水産者（6）

「何の用だい。君」

一旦戦う手を止め、突然の乱入者にその場にいる全員が注目した。中にはあの雇って切れるもんなのかと疑問を持った者もいた。

「・・・あいつは」

過去にマルとサナエと関わったことのあるレイトル、あ行3兄弟、エイモンは特に反応が早かった。

「何の用だつて聞いているんだけど」

そんなこと知らないアーツがマルに問いかける。乱入者にいきなり切りかからないだけある程度気が長いのだろうか。

「・・・この中にミリーを殺した奴はいるか？」

「ミリー？」

「女のラムダ団員のことだ」

「ああ、あの子か・・・そうだよ僕らが殺した。最高だったよ。結構な人間を殺してきているけど、彼女の死に顔は本当に良かった。幸せの絶頂から一気に突き落とされたような絶望の表情だったよ。特に、処女をもらった時はたまらなかったな、最初は大声で叫んで暴れたけど、終わりの方は静かになって良い表情していたよ。無表情って言うのかな、今の君みたいな何にも感じませんって感じの。まあそれがむかついたから苦しんで死んでもらったんだけどね。で何、君はあの女と何か深い関係だったのかい恋人関係？そうだったらごめんよ、君の女最高だったけどついつい殺しちゃった。どうもこの癖抜けないんだよなあ」

アーツの言葉を聞き、仲間たちが笑い口々にその時の感想を言い合った。彼らもそれぞれ狂っているようだ。

「・・・そうか、よく分かった。もしかしたら偶然、または、そのサラエボに脅されて嫌々やったとしたら俺は、考えただろうな。でも、その言葉を聞いてほっとした。何の遠慮も加減も躊躇も後悔

もせずに全力で、お前らを殺せるんだからな。感謝したいくらいだ。ありがとう。言っておくが、これは仇打ちってわけじゃない。ただ、俺がお前らを気に入らないだけだ。そうそう、お前らこの仕事が終わったら何かしたいことないか。思いついたのならそれを頭の隅に留めておけ、それは絶対にできないことだからな。あの時やつておけばよかったと後悔しながら、死ね。このクズ共！」

懷から抜き出されたナイフはマルの手から高速で放たれ、アルトと対峙していた男の眉間に吸い込まれていった。仲間が殺されたことによりマルから注意を逸らしてしまった男たちは後悔した。何故あの男から視線を逸らしてしまったのかと。

自分に向かう注意が逸れたことを察知し、マルはイルトの前に居る男に向かつていった。

「くっ」

男は、下からの斬撃を剣で受け止めるのだが、マルの力により剣が押し上げられ、ゆっくりと腹部を切られた。

「貴様あ！」

アーツがマルへと走り出そうとしたその時、アーツの腕に鎖が巻きついた。

「おっと、お前の相手はこの俺だろ。逃げるんじゃないええ！」

「この、屑がああ！」

鎖を辿り、アーツが方向を変えレイトルへと向かつていった。

マルは残りの黒色腕章を仕留めようと移動を始めた。アーツがこちらに手を出せない今、黒色腕章の男たちは3人で、マルを何とかするしかなかった。その中の1人がマルへと切りかかった。振り下ろされた剣は紙一重でかわされ、振り下ろした際にできた隙を突かれ、男は先ほどの男と同じように腹部を切られ絶命した。しかし、黒色腕章の男たちもただやられるばかりではなかった。仕返すかのように、マルが剣を振った隙を突き、残った男がマルの後ろで剣を振りかぶっていた。

「死ねえ」

剣が振り下ろされた。しかし、剣を振り下ろす速度は、マルの剣を振る速度よりはるかに遅かった。剣を握り男の両手が腕から離れ、飛んで行った。マルが男の腕を切り飛ばしたのだ。

「ぶはあああ」

不運なことに、次に襲いかかろうとしていた男の胸を、腕付きの剣が貫いていた。

「なあああ。 なっなんなんだ。 おっお前はああああ」

両腕を無くした男は、動転し大量の出血をしつつ出口へと逃げだした。しかし、出口の直前で力尽き、倒れた。

「くそつくそつくそくそおおおお」

急所へと放たれる斬撃を、レイトルの鎌が受け止めていく。

「見えているんだよ。 あああん!？」

さらに片手を鎖で封じられていることがあり、アーツの攻撃には力が込められず、レイトルの態勢を崩すことができないでいた。むしろ、鎖を引っ張られ態勢を崩されることが多くあった。このまま戦い続けていると、防御攻撃どちらともに集中しなければならない、アーツの体力が尽き、アーツが負けることは目に見えていた。

その泥仕合は、鎖が分断されることにより動いた。

マルのサンタフェがアーツとレイトルを繋ぐ鎖を切ったのだ。

「ああん!？何邪魔してんだよてめえ」

「邪魔は、お前だ」

マルがサンタフェを振るった。金属音がし、レイトルの鎌が粉碎した。そして、サンタフェをひっくり返し、柄をレイトルの腹へと打ち込む。

「ぐううう・・・てめえ」

腹を押さえ、レイトルは蹲ってしまった。

「さあ、残るはお前だ。 クズ野郎」

「くっ」

マルはアーツを見据える。その眼はサナエ、アイコと共にいるときのような瞳ではなく感情を感じさせない魚のような目をしている。アーツ分かっていた。先ほどまでは自分と互角の戦いをしていた男をあっという間に倒したのだ。その男と自分の力量の差は計り知れない。

「なにか言い残すことはないか。言っておくがこいつらみたいに簡単に死ねると思わないことだ。出来る限り丁寧に執拗にネチネチと殺してやるから、抵抗するなよ。抵抗したらついつい思いつく限りの苦しい殺し方になっちゃうからキャハ」

「ふふふふざけるなあ！」

プライドを汚されたアーツが激昂した。自分との力量差を考えずにマルをなんとかしても殺すことを決意した。

「死ね死ね死ねえ！」

アーツは大きく距離を取り、マルと同様にナイフを取り出し、投げつけた。さらに、それに追走し、剣を水平に構え、突進してくるアーツ。マルは怯えることなく、ナイフにつっこんでいった。サンタフェを片手で持ち、残った手を前に差し出した。開かれた手の平に吸い込まれるようにナイフが突き刺さった。しかし、マルは無反応で自分に殺意を向け突進してくるアーツにだけ注意を向けていた。アーツの剣がマルの前に差し込まれた手の内側に入ってきた。それに合わせて、マルは体を回転させ、アーツの剣の切っ先の進路から体をずらした。そして、ナイフが突き刺さった腕でひじ打ちをアーツの顔面へ打ち込む。

自分の走る力が加わりカウンターとしてひじ打ちをもらってしまったアーツは地面へと倒れる。

「ぐううう。はあはあ」

鼻が折れ、大量の鼻血が吹き出ている。呼吸をすることが不可能になっているようで激しく口で呼吸をしている。しかし、喉にも鼻血が流れ込んできているようで、なかなか思うように酸素が供給できていないようだ。

起き上がろうとしているアーツを蹴り倒し胸の上に足を乗せマルが見下ろした。

「よう。どんな気分だ。これから殺されると分かっていると。俺はごめんだ絶対に体験したくない。できることなら、眠っている間に死にたいくらいだ。でも残念お前はそれができない、これからお前は死ぬんだ。この気持ちをたっぷりと骨身に染みこませて死んでくれ。じゃあな」

アーツに向かい、マルはサンタフェを振るった。アーツの首から血が流れ始めた。

「ひややああああ！」

アーツは必死で傷口を抑え止血を試みるが、マルの第二撃でその止血をしている腕を切り落とされてしまった。そして、血は次第に勢いを増し、アーツが絶命するころには辺りに池を作った。

剣を拭い、この場を去ろうとしていたマルにレイトルが声をかけた。

「てめえ、人殺せる人種だったんだなあ。だが今はそんなことどうでもいい。どうしてくれるんだ俺の獲物を横取りしやがって」

「そいつはすまなかったな。だが何故イリアリアに居た山賊がこんなところに居るんだ」

「イリアリアじゃ、もう稼げなくなっただんだよ。君たちを取り逃したことで仕事しづらくなっただんだ」

簡単にエルトが恥をばらした。

「ふうん。それでここまでやってきたのか。でもいいじゃないか、何もせずに金が入るんだから」

「あああ！？なめてんのか獲物が横取りされたことが広まればまた、俺らは仕事しづらくなるんだよ。この仕事を成功させて、ここで名を広めようとしてたんだよ」

「そうか、それは悪いことをしたな。でどうする？」

「こいつらを全員やった、てめえをやるんだよ」

レイトルが笑みを浮かべて、腰から新たな鎌を出し、回し始めようとしたその時、一気に距離を詰めてきたマルの腕がレイトルの腕を抑え込んでいた。さらに首元にはサンタフェが当てられている。

「俺に断りを入れる前に攻撃してこればよかったのに。少々遅いんじゃないか行動が。話している暇があったら行動するべきだ。で、どうするお前はそのまま長々としやべって首を切られるのか、何も言わずにこの場を去るのか、どっちだ」

「ちいつ、分かった。おい行くぞ屑三兄弟。覚えておけよラムダ団員」

「まつ待て僕も連れて行けよ」

腰を抜かしていたエイモンが去ろうとしているレイトルに声をかけた。

「残念だが依頼主さんよ。そいつはあんたにも用があるらしい。残念だが連れていけねえエイモンさんよ。金は返しておくぜえ。まあ使うことはないかもしれないねえがな。ほら来たぜ」

「さて、次はお前らだな。お前らのしょうもないいざこざのせいでミリーが覚悟しろよ」

6人の命を奪ったサンタフェを持ち、ゆっくりと怯えるエイモン、サラエボの2人に近づいていく。

「「ひっひい、近寄るなあああ」」

流石兄弟である、一言も違うことなく同じセリフを叫んだ。仲たがいでいるはずの2人だがここは協力しなければ生きて逃げられないと考えたのだろう。

そして、2人は並列しマルに手の平を向けた。そして、一拍し、2人の手の平から大量の水が放出された。

意思疎通しているのか2人は各々役割を分担していた。エイモンがマルの足の自由を奪おうと地面に大量の水を流し、サラエボは噴射口を縮め、水を球状にし、高速で飛ばした。

「くそっ」

サラエボの水球を喰らった。普段なら耐えられる程の圧力だが、

水に足を奪われている状態では、踏ん張りも効かずサラエボ達の思惑通り後ろに吹き飛んでしまった。

「よしっいいぞ。サラエボもつとだ、もつとやれ」

エイモンに激励され、サラエボの水球は威力も数も増した。

「くそつくそつ待て、お前ら」

何発も水球を当て吹き飛ばしたマルとの距離がかなり開いた。

「よし、今だ逃げるぞ」

「うん」

ある程度距離を確認した2人は最後の一発をマルに当て、逃げだした。

すぐに起き上がり、逃げだした2人を追いかけたが、すでに2人がどちらに逃げたのかマルには分からなくなってしまった。

「ちくしょう」

マルとサナエ、アイコは街の外に居た。

マルが帰ってすぐにこの街を出るぞと言ったのだ。急な申し出で2人は困惑したが、マルの気迫に押され渋々と了解した。

あの戦いの後、マルはラムダに訪れていた。ミリーを殺したのがサラエボ達で、サラエボの事務所を襲ったのがエイモンであることが告げた。そして、倉庫にミリーを殺した実行犯の死体があることも教えた。自分がやったのではなく山賊たちのせいにした。

「そうですか。分かりました。でも目撃情報がありまして奴ら、この街を先ほど出ていったようです。ただちに、各支部に連絡して、逮捕に全力を尽くします。それと、明日、ミリー達の葬式があるんです」

「すまない。やることがまだあるんだ。ミリーにさようならって言うておいてくれ。墓参りには絶対来るから」

「分かりました。捜査協力ありがとうございます」

そして、マルは2人を追いかけるために街を飛び出したのだ。近くの街や村に逃げ込んでいる理由が高いと推理していた。

そして、最寄りの村。この村は昔からあふれ出てくる地下水を売りにしている村であった。最高においしい飲み水で一時話題をさらったのだが水の街ができて以来すっかり話題を聞かなくなった。この村に2人は逃げてきていた。

「おい、エイモンこの村で一旗揚げるか」

「そうだね兄さん」

いつの間にか2人の仲は戻っていた。死線をくぐったおかげであらうか。

「おっ早速お客発見だ。もしそこのご老人。世界で一番うまい水は如何かな？」

マルたちがこの村に辿りついたのは1週間後であった。いくつもの街や村を回り、最後の候補の村であった。早速情報を得ようと、マルは歩いていた老人に声をかけた。

「すいません。人を探しているんですが」

「あんなんだあ？」

「ここ最近よそ者が来なかったですか。手の平から水を出す」

それを聞くと何か知っているようで老人は何度か頷いた。

「おおお知つとるぞ。あのインチキどもじゃろ」

「インチキ？」

「そうじゃ、奴らはわしにうまい水を売ってやると言ってきたのお。面白そうじゃからわしの空いておる井戸に入れてもらおうと思ったわけじゃ。手の平から水が出てきて確かに驚いたが、奴らが水を出す、わしの水を蓄えておる井戸から水が無くなっていくのじゃ。」

それどころかわしの井戸が空になると、隣のゲンさんの家の井戸も減っていったのじゃ」

「どういうことですか？」

「やつら、転送魔術を使っていたのじゃ。まったくなんて奴らじゃ、人の水を盗んで金稼ぎをしていたとは。通りで最近村の地下水が減って来ているわけじゃな」

「なに！？ 転送魔術か。それで奴らは？」

「村人全員で囲んでボコボコにして、魔術師に頼んで魔術を二度と使えんように封印して村の外に出してやった。今頃山賊か魔物に襲われているじゃろうな。良い気味じゃ。ハッハッハッハッハッハッ」
大笑いして老人は去っていった。

「マル・ぎゅんぎゅん……」

「ようするに水産は水を作る魔術じゃないんだ。水を移動させる魔術なんだ。それも奴ら気づいていないようだな。多分、最初に使用した時にランダムで場所が選ばれるんだろうな。それでパンクしたのは、水源地が枯れることを指すんだろうな。人によつてはそこに雨が降ったりして水が元に戻るんだろうな」

「ほお、じゃあ白色が海で、黒色はどぶ川とかになんのかな」

「そうだな。ある意味白色が最強だな。なんせ、ほぼ無限に水を出せるからな。ふふふ、しかしざまあないな。せつかく痛めつけてやろと思ったのもう死んでいるかもしれないとはな」

マルはハハハと笑った。

「おっ、やっと笑ったな。まあ、笑ってる内容は不謹慎やけど」

「うん。そうか？そんなに俺は笑っていなかったか？それでも笑顔の貴公子として、イリアリアでは名が通っているんだがな」

「さっきまでマル怖かったもん。何考えているか分かんなかったし。なにかあったの？」

アイコがマルの袖を引っ張り、自分に注意を向けさせた。

「いや。なんでもない。なんか、スッキリしたんだよ」

「ふーん。胸のつかえが取れたんやろ。そりゃ、ええこつちや」

「うん、ええーっちやええーっちや」

アイコが意味も分からず、ええこつちやと言いつつ2人の周りを回った。

「あっ、そうだ。もう一度アクアガーデンに戻っていいか？」

「なんで？　なんか忘れ物したんか？」

「行きたいところがあるんだ」

「さよか。あんたが真面目な顔して頼むから、普段なら嫌やけど特別やで」

サナエは自分より長身のマルの顔を見上げ、人差し指をビシッと立てた。

「ありがとうよ。あっそういえばお墓に持っていく花って何がいいんだろうな」

「さあ、あんたが分からなかったら私が分かるわけないやん」

アクアガーデンに着いたら、花屋さんに聞いてみよう、とマルは思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5072l/>

召喚されちまった少女

2011年11月29日20時23分発行